

諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書

ジブの墓（諫早市早見町） 背景は橋湾と雲仙岳 2020年2月撮影

2024年3月

諫早市

# 諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書

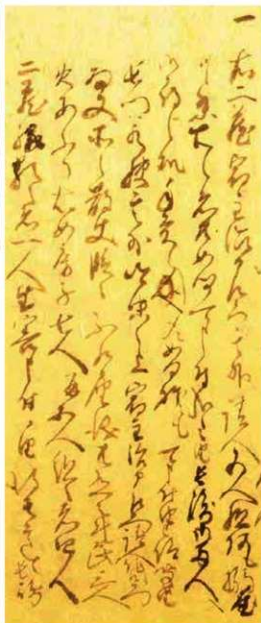
2024年3月

諫早市





ジブの墓（早見町：背景は橋湾と雲仙岳 2020年2月 撮影）



治部左衛門記載箇所拡大（一行目）



多久家資料「肥陽旧章録」（佐賀県多久市郷土資料館所蔵）



ピッチの墓（天神町）



ピッチの墓（天神墓地上空写真）



千々石ミゲル墓所推定地（R3年度完掘状況：左が石碑で、右が北）

下：調査区と石碑の位置関係



千々石ミゲル墓所推定地（R4年度完掘状況：左が石碑、右が北）



3号墓土師器出土状況



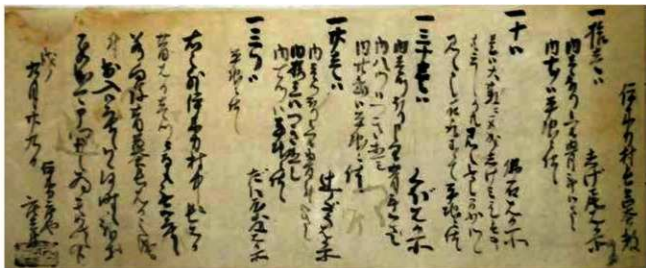
千々石ミゲル墓所推定地3号墓・4号墓出土品



山川内遺跡 試掘坑1 (石塔出土状況)



山川内遺跡 試掘坑1出土の石塔 (五輪塔)



〔長墓改覚〕(彦右衛門文書、h-122-0033) 伊木力村・させ村・さきへた村 (長崎県大村市歴史資料館蔵)  
 上の写真右端「伊木力村長墓数」、下の写真右端「させ村長墓数覚」、中央「さきへた村長墓数」



山川内遺跡石塔群 (石塔散布状況)



西小路町墓碑 (左：正面、右背面)



山川内遺跡石塔群 宝篋印塔基礎「道佛禅門」



伝西川内マリア観音像



高城跡採集品「花十字紋瓦」

## 発刊のことば

諫早市は、長崎県の中央部に位置しており、古代から現在まで交通の要衝として、その歴史を刻んできました。そのような歴史の痕跡として刻まれた遺跡は市内に250箇所あり、文化財保護法によって埋蔵文化財として保護されています。

遺跡発掘調査は地域の歴史を解明していく方法の一つですが、なかでも「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」が立つ千々石ミゲル墓所推定地は、民間の有志の団体の御尽力によって平成26年から令和3年まで4次にわたり実施された発掘調査により、千々石ミゲル終焉の地である可能性が非常に高いことが明らかにされたところです。

諫早市では令和元年に市の文化財保護審議会へ「キリシタン関連遺跡等の調査について」の諮問を行ったところ、「市内に所在するキリシタン関連遺跡等については学術的に重要と思われるため、市全域を対象とした調査を行うこと」との答申をいただきました。

本書は、市内におけるキリシタン関連遺跡等の分布や、それらの歴史的背景を明らかにすることを目的として、諫早市キリシタン関連遺跡等調査指導委員会の御指導のもと、文化庁や長崎県教育庁から諸種の御助言を賜り、令和元年から5年にかけて実施した調査の結果をまとめたものです。

これらの調査によって、諫早市のキリシタン信仰やその弾圧に関する具体的な歴史の一端を明らかにすることができたと同時に、引き続き調査が必要な課題が存在することも明らかになりました。

今回得られました考古学的な成果や出土品が、本書とともに今後の地域の歴史研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第です。

最後になりますが、調査に対し快諾いただき御協力くださいました調査対象の地権者の皆様及び関係自治会の方々、さらに調査指導委員会の先生方、文化庁文化財第二課及び長崎県教育庁学芸文化課の皆様、衷心より感謝申し上げます。

令和6年3月31日

諫早市長 大久保 潔 重



## 例 言

- 1 本書は2019年度から2023年度にかけて国・県の補助を受けて諫早市（経済交流部文化振興課）が実施した諫早市内のキリシタン関連遺跡等（保存目的のための学術調査）に関する発掘調査等の結果を掲載したものである。
- 2 調査は、諫早市キリシタン関連遺産等調査指導委員会による現地指導のもと諫早市が実施した。調査体制は「第1章 第2節 調査体制」を参照されたい。
- 3 調査により得られた出土遺物、調査及び整理作業にかかる図面、写真類は諫早市経済交流部文化振興課が管理し、諫早市美術・歴史館で保管している。
- 4 現地での発掘調査等は諫早市経済交流部文化振興課が主体となり実施し、扇精光コンサルタンツ㈱が現地において発掘調査のサポートを行った。石塔、伝承地の石碑、伝世品の実測は榊理蔵文化サポートシステムが行った。出土品のトレース作業は扇精光コンサルタンツ㈱が行った。
- 5 本調査で採用している方位は真北であり、高度は標高である。
- 6 伊木力・佐瀬嘉所の採集品の時代性や産地については、波佐見町教育委員会文化財班の中野雄二氏から御教示及び所見を頂いた。
- 7 多久家資料については、多久市郷土資料館学芸員の志佐喜栄氏の御教示を頂いた。
- 8 大村藩に関する「長葛改覚」についての資料は、大村市歴史資料館の山下和秀氏の御教示を頂いた。
- 9 写真図版に掲載した遺物の縮尺は、図版中にスケールを明示し、キャプションに明記した。
- 10 本書の編集は野澤哲朗（文化振興課主任）が行い、執筆は以下のとおりである。  
1章と3章3節が福井遥香（文化財専門員）、2章2節と3章7節が江口喬裕（文化財専門員）、3章2節は片多雅樹（県埋蔵文化財センター）、上記以外は野澤哲朗が執筆した。
- 11 遺物の整理・実測は野澤哲朗・橋本幸男・新井実和・福井遥香・江口喬裕が行った。拓本・遺物のトレースは野澤哲朗・福井遥香・江口喬裕・吉原圭子・橋本景子が行った。写真撮影は野澤哲朗・福井遥香・江口喬裕が行った。
- 12 調査および本書の作成にあたって次の個人や団体より御協力を御教示を頂いた。記して謝意をあらわすものである。  
清水進吾・須田哲成・中川浩道・野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）・野口洋子・水上カズエ・水上隆・有喜土地改良区、宇木会、諫早史談会  
千々石ミゲル墓所調査プロジェクト 浅田昌彦・井出明光・町田義博・大石一久・本田英二  
諫早市全自治会および聞き取り調査でご回答いただいた方々  
梶谷京子・島田真由美・鈴木純子・中尾敏子・林喜久子・林田裕美・松村直美
- 13 本文中（第1～4章）で参考にした研究書や単行本については、巻末に年代別順に列挙し、本文中には「〔2016報告〕」等と発行年等を記入した。
- 14 石塔の名称は田中義恭監修『日本美術図解辞典』（2004東京美術）を参考にした。

## 本 文 目 次

第1章 調査の経過に至る契機と経過……………1～14	第3章 キリシタン関連遺跡等の踏査・採集品及び分析・測量調査
第1節 調査に至る契機と経過	第1節 伊木力・佐瀬地区の墓所と「長葛改覚」…95～131
第2節 調査体制	第2節 伝西川内マリア観音像の科学的分析結果…132～134
第3節 諫早市の位置と歴史的環境	第3節 伝西川内マリア観音像の実測・撮影…135～139
第4節 所収遺跡の位置	第4節 高城跡の採集品……………140～155
第2章 キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査	第5節 西小路町墓碑・山川内遺跡隣接墓碑…156～159
第1節 ジブの墓……………15～19	第6節 伝円通寺跡の石塔群……………160～171
第2節 ジブの墓に関する文字資料……………20～25	第7節 文献からみたキリシタン関連遺跡等…172～179
第3節 ビッチの墓……………26～30	第4章 調査の総括と課題……………180～185
第4節 山川内遺跡分布調査及び地形図作成…31～39	第1節 発掘調査で得られた事実関係の整理…180～181
第5節 山川内遺跡分布の第1地点石塔群…40～47	第2節 肥前国後杵郡・高来郡での歴史的評価…181～182
第6節 山川内遺跡……………48～64	第3節 今回の調査における課題……………183～184
第7節 千々石ミゲル墓所推定地……………65～94	第4節 諫早市キリシタン関連遺跡等調査の総括…184～185

# 目 次

## 第1章 調査の経過に至る契機と経過

- 第1図 諫早市の位置……………2  
 第2図 キリシタン関連遺跡の分布図 1/100,000……………14

## 第2章 キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査

### 第1節 ズブの墓

- 第3図 調査区全体平面図 1/50……………17  
 第4図 遺構詳細図 1/20……………18

### 第3節 ビッチの墓

- 第5図 天神墓地の平面図……………28  
 第6図 平面図・土層図 1/20……………29

### 第4節 山川内遺跡分布調査及び地形図作成

- 第7図 石塔分布図……………31  
 第8図 地形図及び石塔分布図 1/800……………38  
 第9図 地形断面図2本 1/500……………39

### 第5節 山川内遺跡分布の第1地点石塔群

- 第10図 第1地点石塔1～8実測図 1/5……………42  
 第11図 第1地点石塔9実測図 1/5……………43

### 第6節 山川内遺跡

- 第12図 大村館跡墓地出土五輪塔の編年案……………50  
 第13図 試掘坑配置図 1/2,500……………51  
 第14図 試掘坑配置図 1/1,000……………52  
 第15図 地形状況概念図 1/150……………53  
 第16図 試掘坑1詳細図 1/20……………54  
 第17図 試掘坑2・3詳細図 1/40……………55  
 第18図 試掘坑4・5詳細図 1/40……………56  
 第19図 試掘坑6・7詳細図 1/40……………57  
 第20図 試掘坑8・9詳細図 1/40……………58  
 第21図 試掘坑10・11詳細図 1/40……………59  
 第22図 試掘坑12詳細図 1/40……………60  
 第23図 試掘坑1出土の石塔実測図 1/40……………60

### 第7節 千々石ミゲル墓所推定地

- 第24図 周辺地形図と調査区配置図 1/500……………70  
 第25図 令和3年度平面図 1/40……………71  
 第26図 令和3年度土層図 1/40……………72  
 第27図 遺構配置図 1/40……………73  
 第28図 令和4年度土層図 1/40……………74  
 第29図 造成断面復元図 1/60……………75  
 第30図 小土坑出土品実測図 1/3……………82  
 第31図 令和3年度3号墓・4号墓詳細図 1/20……………84  
 第32図 令和4年度3号墓・4号墓詳細図 1/20……………85  
 第33図 遺構配置図 1/100……………87

## 第3章 キリシタン関連遺跡等調査の踏査・採集品及び分析・測量調査

### 第1節 伊木力・佐瀬地区の墓所と「長墓改竄」について

- 第34図 宇調査概要図……………101  
 第35図 字名配置図……………103  
 第36図 墓所分布図 1/25,000……………104  
 第37図 長墓改竄記載墓所の想定地 1/30,000……………105  
 第38図 梅木地A 地形図 1/2,500……………106  
 第39図 宇図：梅木地A……………106  
 第40図 梅木地B 地形図 1/2,500……………107  
 第41図 宇図：梅木地B……………107  
 第42図 平 地形図 1/2,500……………108  
 第43図 宇図：平……………108  
 第44図 長野 地形図 1/2,500……………109  
 第45図 宇図：長野……………109  
 第46図 田頭 地形図 1/2,500……………110  
 第47図 宇図：田頭……………110  
 第48図 葛根原 地形図 1/2,500……………111  
 第49図 宇図：葛根原……………111  
 第50図 徳木宇都 地形図 1/2,500……………112  
 第51図 宇図：徳木宇都……………112  
 第52図 徳木宇都 地形略測図 1/1,000……………113  
 第53図 小崎 地形図 1/2,500……………114  
 第54図 宇図：小崎……………114  
 第55図 上セメ 地形図 1/2,500……………115  
 第56図 宇図：上セメ……………115  
 第57図 大久保 地形図 1/2,500……………116  
 第58図 宇図：大久保……………116  
 第59図 須ノ瀬A 地形図 1/2,500……………117  
 第60図 宇図：須ノ瀬A……………117  
 第61図 須ノ瀬B 地形図 1/2,500……………118  
 第62図 宇図：須ノ瀬B……………118  
 第63図 採集品 実測図 1/3……………130

### 第2節 伝西川内マリア観音像の科学的分析結果

- 第64図 伝西川内マリア観音像分析結果……………132

### 第3節 伝西川内マリア観音像の実測・撮影

- 第65図 実測図 1/2……………136  
 第66図 発見地周辺地形図 1/50,000……………138

### 第4節 高城跡採集品

- 第67図 高城跡地形図 1/2,000……………143  
 第68図 採集品実測図（土部器類・陶磁器類 1/3）……………144  
 第69図 採集品実測図（軒丸瓦 1/3）……………145

第70回 採集品実測図(軒平瓦 1/3).....	147
第71回 採集品実測図(軒平瓦 1/3).....	148
第72回 採集品実測図(鯉瓦・鬼瓦類 1/3).....	149
第73回 採集品実測図(丸瓦 1/4).....	151
第74回 採集品実測図(平瓦 1/4).....	153
<b>第5節 西小路町墓群・山川内遺跡隣接墓群</b>	
第75回 西小路町墓群・山川内遺跡隣接墓群 1/10.....	159
<b>第6節 伝「円通寺跡」の石塔群</b>	
第76回 宝篋印塔屋根 1 1/6.....	162

第77回 宝篋印塔屋根 2 1/6.....	163
第78回 宝篋印塔屋根 3 1/6.....	164
第79回 宝篋印塔屋根 4 1/6.....	165
第80回 宝篋印塔基礎 1 紀年銘有 1/6.....	166
第81回 宝篋印塔基礎 2 紀年銘有 1/6.....	167
第82回 宝篋印塔基礎 3 紀年銘有 1/6.....	168
第83回 宝篋印塔基礎 4 1/6.....	169
第84回 五輪塔火輪 1/6.....	170
第85回 五輪塔水輪 1/6.....	171

## 表 目 次

### 第1章 調査にいたる契機と経過

表1 諫早市キリシタン関連遺跡等調査事業計画 (R 1～3)...	8
表2 諫早市キリシタン関連遺跡等調査事業計画 (R 4～5)...	9
表3 会議と現地指導等開催一覧.....	11
表4 保存目的範囲確認調査の数量一覧.....	12
表5 保存目的地形測量・分析等調査一覧.....	12
表6 事務局による情報収集及び調査一覧.....	13

### 第2章 キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査

#### 第2節 ジブの墓

表7 基本土層.....	16
表8 出土遺物集計.....	16

#### 第4節 山川内遺跡分布調査及び地形図作成

表9 分布石塔一覧表.....	32
-----------------	----

#### 第5節 山川内遺跡分布の第1地点石塔群

表10 第1地点石塔寸法一覧.....	41
---------------------	----

#### 第6節 山川内遺跡

表11 試掘坑の出土品種別一覧.....	49
----------------------	----

### 第7節 千々石ミゲル墓所推定地

表12 小土坑出土品属性表.....	82
表13 検出された墓坑の概要一覧.....	83
表14 3号墓・4号墓関連出土品の基本情報一覧.....	86

### 第3章 キリシタン関連遺跡等の踏査・採集品及び分析・測量調査

#### 第1節 伊木力・佐瀬地区の墓所と「長墓改覚」について

表15 「長墓改覚」記載の墓所名と字名の比較.....	97
表16 伊木力・佐瀬墓所属性.....	102
表17 伊木力・佐瀬墓所採集品集計.....	102
表18 伊木力・佐瀬墓所採集品属性.....	127～129
表19 伊木力・佐瀬墓所採集品観察表.....	131

#### 第4節 高城跡採集品

表20 高城跡採集品 基本情報一覧.....	141
表21 高城跡採集品属性.....	144

#### 第6節 伝「円通寺跡」の石塔群

表22 円通寺跡石塔群一覧.....	160
--------------------	-----

## 写 真 目 次

### 第2章 キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査

#### 第1節 ジブの墓

写真1 出土品.....	16
写真2 トレンチ全体図.....	19
写真3 墓石部分の上空写真.....	19
写真4 墓坑掘り方 試掘坑南.....	19
写真5 墓坑掘り方 試掘坑北.....	19
写真6 墓石南壁.....	19
写真7 墓石北壁.....	19
写真8 トレンチ部分拡大.....	19
写真9 調査指導委員会現地指導.....	19

#### 第2節 ジブの墓に関する文字資料

写真10 佐賀県多久市郷土資料館所蔵.....	22
-------------------------	----

写真11 佐賀県多久市郷土資料館所蔵.....	23
写真12 佐賀県多久市郷土資料館所蔵.....	24
写真13 佐賀県多久市郷土資料館所蔵.....	25

#### 第3節 ビッチの墓

写真14 天神墓地上空写真.....	26
写真15 トレンチ全体図.....	30
写真16 土層西壁.....	30
写真17 土層東壁.....	30
写真18 土層北壁.....	30
写真19 土層北壁.....	30
写真20 土層北壁.....	30
写真21 出土遺物.....	30

#### 第4節 山川内遺跡分布調査及び地形図作成

写真22	第1地点石塔部材確認状況(正面)	33
写真23	第1地点石塔部材確認状況(正面下段)	33
写真24	第1地点石塔部材確認状況(右)	34
写真25	第1地点石塔部材確認状況(左)	34
写真26	第2地点石塔部材確認状況(正面)	35
写真27	第2地点石塔部材確認状況	35
写真28	第2地点石塔部材確認状況(側面)	35
写真29	第3地点石塔部材残置状況	36
写真30	第3地点石塔部材確認状況	36

#### 第5節 山川内遺跡分布の第1地点石塔群

写真31	石塔9	43
写真32	石塔1	44
写真33	石塔2	44
写真34	石塔3	45
写真35	石塔4	45
写真36	石塔5	46
写真37	石塔6	46
写真38	石塔7	47
写真39	石塔8	47

#### 第6節 山川内遺跡

写真40	試掘坑1 出土石塔	60
写真41	試掘坑1 完掘状況	61
写真42	試掘坑1 北壁オルソ	61
写真43	試掘坑1 西壁オルソ	61
写真44	試掘坑2 完掘状況(西から)	62
写真45	試掘坑2 完掘状況 西壁	62
写真46	試掘坑3 完掘状況と北壁	62
写真47	試掘坑4 完掘状況(東から)	62
写真48	試掘坑4 西壁	62
写真49	試掘坑5 完掘状況(西から)	62
写真50	試掘坑5 西壁	62
写真51	試掘坑6 P i t確認状況	63
写真52	試掘坑6 P i t完掘・南壁	63
写真53	試掘坑7 完掘状況	63
写真54	試掘坑7 西壁	63
写真55	試掘坑8 完掘状況	63
写真56	試掘坑8 北壁	63
写真57	試掘坑9 完掘状況	63
写真58	試掘坑9 西壁オルソ	63
写真59	試掘坑10 完掘状況	64
写真60	試掘坑10 西壁オルソ	64
写真61	試掘坑11 完掘状況(東から)	64
写真62	試掘坑11 完掘状況(西から)	64

写真63	試掘坑12 完掘状況(東から)	64
写真64	試掘坑12 完掘状況(北東から)	64
写真65	試掘坑12 西壁オルソ	64

#### 第7節 千々石ミゲル墓所推定地

写真66	指導委員会現地視察	69
写真67	斜面調査区南壁のオルソ画像	69
写真68	調査区1 東側 北壁オルソ画像	69
写真69	調査区1 西壁オルソ画像	69
写真70	調査区1 東壁オルソ画像	69
写真71	調査区1 完掘 上空写真(右が北)	76
写真72	調査区1 遺構検出状況(右が北)	76
写真73	調査区1 遺構検出 上空写真(右が北)	76
写真74	調査区1 土坑3・土坑4 検出(東から)	76
写真75	3号土坑土器部小皿検出状況1(北から)	76
写真76	3号土坑土器部小皿検出状況2(北から)	76
写真77	3号土坑土器部小皿(#4)検出状況	76
写真78	4号土坑土器部小皿(#10)検出状況	76
写真79	調査区1 西壁土層4号土坑・5号土坑	77
写真80	調査区1 4号土坑 西壁土層	77
写真81	調査区1 東壁土層 南半分	77
写真82	調査区1 北壁土層	77
写真83	斜面調査区 上空写真 上が北	77
写真84	調査区1と斜面調査区の接点部 右が北	77
写真85	斜面調査区造成段検出状況(東から)	77
写真86	斜面調査区平坦面1下層検出状況(北から)	78
写真87	斜面調査区造成段中位の南壁土層堆積状況	78
写真88	斜面調査区南壁土層のオルソ画像	78
写真89	調査区1西壁土層(南半分のオルソ画像)	78
写真90	調査区1東壁土層(南半分のオルソ画像)	78
写真91	土器部小皿	84
写真92	調査区1令和4年度完掘 上空写真	88
写真93	調査区1完掘状況 上空写真	88
写真94	調査区1完掘状況(東から)	88
写真95	3号墓サブトレ1検出状況(東から)	88
写真96	小土坑遺物検出状況①(東から)	88
写真97	小土坑遺物検出状況②(東から)	88
写真98	小土坑遺物検出状況③(東から)	88
写真99	小土坑遺物検出状況④(東から)	89
写真100	小土坑遺物検出状況⑤(東から)	89
写真101	3号墓 サブトレ1完掘(東から)	89
写真102	3号墓 サブトレ1完掘(西から)	89
写真103	3号墓 南北方向断面 西壁面土層	89
写真104	3号墓 南北方向断面 南一西壁面土層	89

写真105	3号墓 サブトレ1北面土層(2層)……………	89	写真146	伊木力・佐瀬墓所(須ノ瀬A)……………	122
写真106	3号墓 サブトレ1南面土層(2層)……………	89	写真147	伊木力・佐瀬墓所(須ノ瀬B)……………	122
写真107	4号墓 検出状況(東北東から)……………	90	写真148	墓所採集品(梅木地A・梅木地B)……………	123
写真108	4号墓 北側半截範囲の設定(東から)……………	90	写真149	墓所採集品(梅木地B・平・長野)……………	124
写真109	4号墓 北側掘り下げ 遺物検出状況(東から)……………	90	写真150	墓所採集品(田頭・葛根原)……………	125
写真110	4号墓 北側掘り下げ 遺物検出状況(南から)……………	90	写真151	墓所採集品(榎木宇都・小崎・須ノ瀬A・B)……………	126
写真111	4号墓 北側掘り下げ 遺物検出状況拡大……………	90	<b>第2節 伝西川内マリア観音像の化学分析結果</b>		
写真112	4号墓 北側掘り下げ 遺物取り上げ状況……………	90	写真152	伝西川内マリア観音像……………	133
写真113	4号墓 北側掘り下げ 未完掘で埋め戻し(東から)……………	90	写真153	透過X線・赤外線反射・煤付着拡大……………	134
写真114	4号墓 北側掘り下げ 未完掘で埋め戻し(北から)……………	90	<b>第3節 伝西川内マリア観音像の実測・撮影</b>		
写真115	4号墓 断面土層……………	91	写真154	伝西川内マリア観音像 オール画像……………	135
写真116	調査区1西壁土層①(右端はサブトレ2)……………	91	写真155	マリア観音像(東京国立博物館所蔵)……………	139
写真117	調査区1西壁土層(4号墓西側土層)……………	91	写真156	マリア観音像(東京国立博物館所蔵)……………	139
写真118	調査区1サブトレ2西壁土層(4層確認)……………	91	<b>第4節 高城跡採集品</b>		
写真119	調査区1のサブトレ3完掘状況(東から)……………	91	写真157	土師器・陶磁器類……………	144
写真120	調査区1のサブトレ3南壁土層(北東から)……………	91	写真158	軒丸瓦1～6……………	146
写真121	調査区1のサブトレ3南壁土層……………	91	写真159	軒平瓦1～4……………	148
写真122	調査区1のサブトレ3西壁土層……………	91	写真160	軒平瓦5～7……………	148
写真123	現地指導及び説明会遺構明示状況……………	92	写真161	鯉瓦1・鬼瓦2～5……………	150
写真124	調査区1 埋め戻し状況①……………	92	写真162	丸瓦1～8……………	152
写真125	調査区1 埋め戻し状況②……………	92	写真163	平瓦1～5……………	154
写真126	調査区1 埋め戻し状況③……………	92	写真164	平瓦6～12……………	155
写真127	調査区1・調査区2の点取り遺物① 1/2……………	92	<b>第5節 西小路町墓碑・山川内遺跡隣接墓碑</b>		
写真128	小土坑出土品……………	93	写真165	西小路町墓碑 正面・背面……………	157
写真129	4号墓覆土中・小土坑出土品 1/2……………	93	写真166	山川内遺跡隣接墓碑 正面・背面・両側面……………	158
写真130	4号墓上面出土品 1/2……………	93	<b>第6節 伝「円通寺跡」の石塔群</b>		
写真131	調査区1サブトレ 2・3の出土品 1/2……………	93	写真167	伝「円通寺跡」石塔群……………	161
写真132	山川内遺跡 試掘坑11 表土出土品 1/2……………	93	写真168	宝篋印塔屋根1……………	161
写真133	山川内遺跡 試掘坑10 2層出土品 1/2……………	94	写真169	宝篋印塔屋根2……………	161
写真134	斜面調査区西端の上段造成面3層出土品 1/2……………	94	写真170	宝篋印塔屋根3……………	161
写真135	調査区1トレンチ3の3層出土品 1/2……………	94	写真171	宝篋印塔屋根4……………	161
<b>第3章 キリシタン関連遺跡等の踏査・採集品及び分析・測量調査</b>					
<b>第1節 伊木力・佐瀬地区の墓所と「長墓改葬」について</b>					
写真136	伊木力・佐瀬墓所(梅木地A)……………	119	写真172	宝篋印塔基礎1……………	161
写真137	伊木力・佐瀬墓所(梅木地B)……………	119	写真173	基礎1拡大……………	161
写真138	伊木力・佐瀬墓所(平)……………	119	写真174	宝篋印塔基礎2……………	161
写真139	伊木力・佐瀬墓所(長野)……………	119	写真175	宝篋印塔基礎3……………	161
写真140	伊木力・佐瀬墓所(田頭)……………	120	写真176	宝篋印塔基礎4……………	161
写真141	伊木力・佐瀬墓所(葛根原)……………	120	写真177	五輪塔水輪……………	161
写真142	伊木力・佐瀬墓所(榎木宇都)……………	120	写真178	五輪塔水輪……………	161
写真143	伊木力・佐瀬墓所(榎木宇都)……………	121			
写真144	伊木力・佐瀬墓所(小崎)……………	121			
写真145	伊木力・佐瀬墓所(大久保)……………	121			

## 第1章 調査に至る契機と経過

### 第1節 調査に至る契機と経過

2019年（令和元）9月24日に諫早市教育委員会は市文化財保護審議会に「諫早市キリシタン関連遺跡等の調査について」の諮問書（資料1：諮問）を提出し、市がキリシタン関連遺跡等調査を行うことについて諮問し、同年10月23日に市が市全域のキリシタン関連遺跡等の調査をすることについての答申を得た。（資料2：答申）

その答申に従い、令和元年度から予備調査と準備を進め、2020年（令和2）6月29日に諫早市キリシタン関連遺跡等調査指導委員会（設置要綱6-7p、名簿10p）を設置した。第1回の指導委員会では、下記の「調査の基本方針」（下記の①から④）とスケジュール（表1・2）について決定した。

①諫早市内全域を対象とする。

諫早市内におけるキリシタン関連遺跡等の分布やそれらの歴史的背景を明らかにする。

②遺跡及び出土品、伝承地及び伝世品を対象とする。

すでに知られている遺跡や出土品、伝承地や伝世品  
未知の遺跡や出土品、伝承地や伝世品

③時代性は、主に江戸時代とする。（調査対象の時代）

1549(天文18)年にザビエルが鹿児島に上陸してから、1865(慶応元)年までの時代

④各専門分野の調査方針について

考古学、民俗学、歴史地理学は現地調査  
歴史学は関連文書の収集と一覧表作成

上記の方針とスケジュールに従い、令和5年度までに、計4回の指導委員会、計7回の現地指導及び現物調査、計6件の保存目的の範囲確認調査、計6件の保存目的の地形測量・分析調査を行い、諫早市全域にどの程度のキリシタン関連遺跡等が分布し、どの程度のキリシタン関連遺跡が残存するののかについての学術的な調査を実施した。（表3・4・5）

また、市独自の調査として自治会アンケートをはじめとする計8件の現地踏査・文献調査・出土品の鑑定等を行った。（表6）

本書はこれらの調査成果をまとめた文化財調査報告書である。

### 第2節 調査体制

諫早市教育委員会

教育長 西村暢彦（R1～R3.4） 石部邦昭（R3.5～）

教育次長 高柳浩二（R1～R3）

諫早市 経済交流部

部長 古谷正樹（R4） 北島淳二（R5～）

次長 山下浩信（R4） 田中伸一（R5～）

文化振興課

課長 諸岡昌史（R1～R2） 川瀬雄一（R3～） 参事 石井英治（R5～）

課長補佐	坪内理子 (R1)	木下誠 (R2~R3)
	松原めぐみ (R4)	中村和哉 (R5~)
主任	野澤哲朗 (R1~)	中村和哉 (R1~R4) 立山勇一朗 (R5~)
事務職員	大浦美香 (R1~R3)	岡崎奈々 (R2~R4)
	平古場綾乃 (R4~)	永石諭 (R5~)
文化財専門員	新井実和 (R1~R3)	福井遥香 (R3~) 江口喬裕 (R4~)

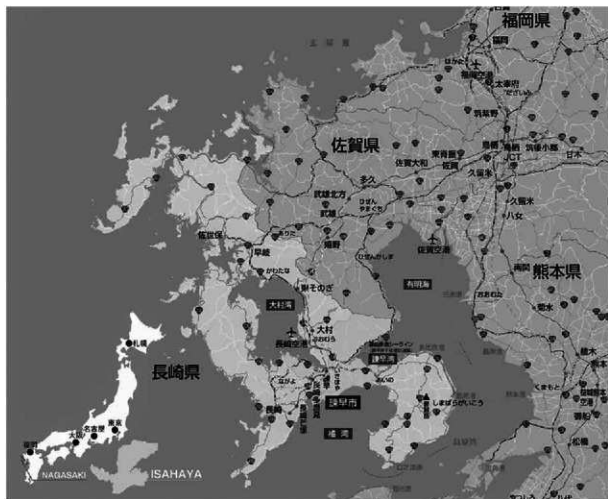
長崎県教育庁学芸文化課

係長	宮武直人 (R1~R2)	中尾篤志 (R3~)
主任文化財保護主事	山梨千晶 (R3~R4)	
文化財保護主事	前田加美 (R1~R2)	中野真澄 (R5~)

第3節 諫早市の位置と歴史的環境 (第1図)

諫早市は、長崎県の中央に位置し、長崎市・大村市・雲仙市・西彼杵郡長与町と佐賀県太良町に接する。市西部は県の中心となる内海である大村湾、東部は有明海に通じる諫早湾、南部は熊本県天草灘に通じる橘湾に面し、北部には多良岳があり、自然豊かな海と山に囲まれている。多良山系南部からは長崎県唯一の第一級河川である本明川が諫早湾に流れる。市中心部は諫早地峡とも呼ばれる平地である。

長崎県最大の規模を有する諫早平野は、奈良時代より多くの条里が施行され、戦国時代



第1図 諫早市の位置

には本明川の豊富な水を利用して用水（小野用水）を整備し、有明海の干潟を日本最大と言われるまでに広大に干拓し、現在に至るまで長崎県の農業を支えている。

また、奈良・平安時代の律令制下では高来郡（たかきのこおり）に属し、鎌倉時代には「八幡宇佐神宮領大鏡」（1196年（建久7））に「伊佐早村」として「いさはや」地名が初めて歴史に登場し、1314年（正和3）には京都仁和寺領となる。その後、南北朝期の騒乱を経て西郷氏が統治し、肥前国高来郡「伊佐早庄」と呼ばれる。その範囲は現在の行政区域より広く、北は現在の佐賀県太良町から、小長井、高来、諫早、森山、飯盛の外に、南は長崎半島の矢上、茂木、三和、野母崎、脇岬、樺島まで及んだ。

1587（天正15）年、秀吉の命により龍造寺氏が攻め入り、龍造寺氏は「諫早」と姓を改め、統治後は「佐賀藩諫早領」となり、江戸時代を通じて諫早家は佐賀藩の「親類同格」として藩政の一翼を担った。

また、諫早の地は長崎半島、島原半島、長崎・彼杵半島の結節部にあり、古くから交通の要衝としての重要な役割を果たしてきた。『延喜式』（927年（延長5））兵部省諸国駅伝馬条によると「船越駅」が設置され、奈良・平安時代の交通拠点として機能した。江戸時代に入ってから、豊前小倉から肥前長崎までの連絡路として多良海道、大村街道、島原街道という基幹となる交通網が整備され、街道沿いには宿場町（永昌・湯江・多良）や港（光江・津水・竹崎）、そして番所等の交通施設が設置され、情報の伝達や物資の運搬などの拠点として重要な役割を果たした。特に、長崎警備の一端を担っていた佐賀藩は有明海回りの多良海道を年に3回利用するなど、国防のために不可欠な街道であった。多良海道は令和元年に文化庁の「歴史の道百選」に追加選定され、大村街道と多良海道はともに文化財的価値の高い道路（交通遺跡）となった。

現在においても、国道34号（長崎—鳥栖間）、57号（長崎—島原—大分間）、207号（時津—小長井—佐賀間）、251号（諫早—国見—加津佐—長崎間）の国道各線、長崎自動車道（高速道路）、J R長崎本線・大村線、島原鉄道が諫早駅で交差するなど交通の要衝という地理的な特殊性は変わらず、物流拠点としての機能もある。2022年（令和4）には西九州新幹線が開業し、J R諫早駅は新幹線の停車駅となり、人員輸送の手段が新たに加わった。

#### 第4節 所収遺跡の位置（第2図）

今回報告する遺跡は8件、大まかな分布として市の中心部に2件、南の橘湾側に2件、西の大村湾側に4件所在し、江戸時代の領域分布では大村藩域で4件、佐賀藩諫早領内で4件となる。

ジブの墓は早見町の丘陵地に位置しており、橘湾やキリシタンの聖地であった天草地方を望むことが出来る。すぐ北側には江戸時代から伝わる島原街道が通る。ピッチの墓は天神町の墓地の中に所在しており、墓地の西北部に位置する。

山川内遺跡と千々石ミゲル墓所推定地は、多良見町に所在し、西彼杵半島の基部で大村湾の南端を形成する海岸から1.5kmほど内陸にあり、伊木力川流域に形成された平地との境をなす丘陵上に位置する。丘陵帯はミカン畑となっており、標高約37mの傾斜地を削平して平坦面としたところに千々石ミゲル墓所推定地があり、その周辺とJ R長崎本線の線路を越えた先の傾斜地が山川内遺跡である。多良見町は江戸時代には大村藩と佐賀藩にまたがっており、喜々津大草地域は佐賀藩諫早領、山川内遺跡と千々石ミゲル墓所推定地が所在する伊木力地域はキリシタン大名の大村藩に属していた。



伊木力墓所群は多良見町の旧大村藩域に12箇所あり、内陸の伊木力川流域の野川内に3箇所、山川内に1箇所、大村湾側の舟津に2箇所、佐瀬に6箇所である。伝西川内マリア観音像は多良見町西川内に所在する伝世品である。

高城跡は、高城町に所在し、多良岳南麓から流れる本明川が東に流れを変える崖面から突き出した独立丘陵を利用した標高50mの山城である。南側は細尾根、西側は谷を、北から東は本明川を堀として自然地形を利用した天然の要害で、明治以降に公園の園路として部分的に造成されているが、堀や土塁などが比較的良好に遺っている。

資料1：諮問書

令和元年9月24日

## 諮 問 書

諫早市文化財保護審議会会長 様

諫早市教育委員会



キリシタン関連遺跡等の調査について

諫早市内に所在する下記6件のキリシタン関連遺跡等を、諫早市教育委員会が調査することについて意見を求めます。

### 記

- |   |                   |                       |
|---|-------------------|-----------------------|
| 1 | 千々石ミゲル墓所推定地（多良見町） | キリシタン関連遺物（玉類・ガラス板）出土地 |
| 2 | 高城跡（高城町）          | キリシタン関連遺物（花十字瓦）出土地    |
| 3 | 金尾城跡（多良見町）        | キリシタン伝承のある喜々津城推定地     |
| 4 | ジブの墓（早見町）         | 潜伏キリシタン伝承地            |
| 5 | ピッチの墓（天神町）        | 潜伏キリシタン伝承地            |
| 6 | マリア観音像（多良見町）      | 潜伏キリシタン伝世品            |

資料2：答申書

令和元年10月23日

諫早市教育委員会 様

諫早市文化財保護審議会  
会長 古賀 力

## キリシタン関連遺跡等の調査について（答申）

令和元年9月24日付けで諮問された「キリシタン関連遺跡等の調査について」は、慎重に審議した結果、全会一致をもって次のとおり決定したので答申します。

## 記

## 答 申

諫早市に所在するキリシタン関連遺跡等については学術的に重要と思われるため、諫早市教育委員会が調査を行うことを求めます。

## 付帯意見

- 1 諫早市内全域におけるキリシタン関連遺跡等に関する情報収集を行うこと
- 2 千々石ミゲル墓所推定地については、隣接する山川内遺跡を含めた総合的な調査を実施すること
- 3 考古学や歴史学の専門家による調査指導委員会の設置が望ましいこと
- 4 調査結果については、報告書にまとめること



## キリシタン関連遺跡等調査指導委員会設置要綱

### (設置)

第1条 諫早市内に所在するキリシタン関連遺跡等について、学術的な調査を行うにあたり、専門的な立場から必要な助言を得るため、キリシタン関連遺跡等調査指導委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

### (所掌事務)

第2条 委員会は、次に挙げる事項について協議を行い、助言を行う。

- (1) キリシタン関連遺跡等の調査対象及び調査方法に関する事項
- (2) キリシタン関連遺跡等の学術的価値の明確化に関する事項
- (3) 前2号に掲げるもののほか、キリシタン関連遺跡等の調査に関して必要と認められる事項

### (組織)

第3条 委員会は、委員5名以内で組織する。

2 委員は、考古学、歴史学、歴史地理学又は民俗学について学識経験を有する者のうちから、教育長が委嘱する。

### (委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、委員の互選によりこれを定める。

2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

3 委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を行う。

### (会議)

第5条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会の会議は、委員の過半数が出席しなければ、開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数によって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(関係人の出席)

第6条 委員会は、必要があると認めるときは、関係人の出席を求め、その意見又は説明を聞くことができる。

(結果報告)

第7条 委員長は、協議が終わったときは、速やかにその結果を教育長に報告するものとする。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、政策振興部文化振興課において処理する。

(委任)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、令和2年4月10日から施行する。

(この要綱の失効)

2 この要綱は、第7条の規定による報告がなされた日にその効力を失う。

(招集の特例)

3 この要綱の施行の日以後最初に開かれる委員会は、第5条第1項の規定にかかわらず、教育長が招集する。

表1 諫早市キリシタン関連遺跡等調査事業計画(R1~R3)

	R 1	R 2	R 3
調査指導委員会の設置 ・委員会による指導助言、現地指導 ・調査結果の確認と分析 ・次年度の調査方針決定	・キリシタン遺跡等調査について答申 ・調査指導委員会のメンバーの選定	・委員の委嘱 ・委員会の開催 2回実施	・委員会の開催 (2回予定) 現地視察1回実施
市内全域における情報収集	・既刊の郷土誌などの文献調査	・市内分布調査 (自治会や史談会への聞き取り調査)	・ビッチ墓周辺の江戸時代の墓碑調査→R 4まで継続
山川内遺跡等(多良見町) (千々石ミゲル墓所推定地を含む)  ※鎌倉時代から江戸時代までの石塔群が所在する墓所(五輪塔・宝篋印塔・自然石を利用した江戸時代の石碑など所在)	地権者等との協議・調整	○山川内遺跡 ・石塔群等分布調査 (遺跡の中心地域を表面的に調査) ・石塔撮影・実測 (時代性を石塔の形式から分析) ・平面図作成  ○伊木力地域の墓地に関する歴史地理学・民俗学的調査(墓地の立地や字名等を調査)	○山川内遺跡 30㎡ ・範囲確認調査 ○千々石ミゲル墓所推定地の周辺 12㎡と墓坑1基 ・範囲確認調査 どの程度の数の墓が営まれていたのかを確認する ※隣接する市有地が対象 ・保存目的発掘調査 地下遺構の年代や規模などを具体的に確認するため、特徴的な墓壇の内容を確認する
高城跡(高城町) ※花十字紋軒丸瓦採集地	文献調査	実測作業、製図作業 写真記録作業	
金尾城跡(多良見町:伝圓通寺跡) ※キリシタンにより寺院が破壊されたとの伝承地	文献調査	・石塔群 測量 ・地元への聞き取り調査	範囲確認調査(破壊された寺院の痕跡確認) →R 2年度の指導委員会でジブの墓へ切り替え
ジブの墓(早見町) ※潜伏キリシタン伝承地	測量(撮影・図化)		保存目的範囲確認調査 9㎡ 指導委員会による現地視察
ビッチの墓(天神町) ※潜伏キリシタン伝承地	測量(撮影・図化)		
伝西川内マリア観音像(多良見町 ※潜伏キリシタン関連の伝世品)		・伝世品 測量 ・地元への聞き取り調査	・伝世品 非破壊科学調査 黒いシミが煤と判明
西小路町墓碑(西小路町) ※潜伏キリシタンの墓石	現地調査	・石塔 測量 ・聞き取り・文書調査	
新道の織部灯籠(新道町) ※潜伏キリシタンの伝世品	文献調査 測量(撮影・図化)		
金谷遺跡の織部灯籠(金谷町) ※潜伏キリシタンの伝世品	文献調査 測量(撮影・図化)		
情報収集により得られた関連遺跡等の調査		伊木力地域の伝承地現地調査	伊木力地域の徳木宇都墓所概要調査→R 4まで継続

表2 諫早市キリシタン関連遺跡等調査事業計画(R4~R5 備考)

R4	R5	備考:平成30年以前の調査履歴等
・委員会の開催 (2回予定)	・委員会2回予定 ・現地及び現物確認 1回予定 ・報告書の構成等について指導助言	
		<b>諫早市内のキリシタンに関する情報収集</b>
○山川内遺跡 30㎡ ・保存目的の発掘調査  ○千々石ミゲル墓所 推定地の周辺 8㎡ ・保存目的の発掘調査		○山川内遺跡:五輪塔が数基ある中世か近世の墳墓(民有地) ・H6年3月刊行の長崎県遺跡地図に登録  ○千々石ミゲル墓所推定地及び周辺(民有地と市有地) ・多良見町郷土誌では、石塔を玄蕃(げんぱ)さんと紹介し「あたりをブッセキといい、墓が散在する」と記載 ・江戸時代に実施された大村氏によるキリシタン墓検索の記録である「長嘉改覚」には伊木力には「志げ尾墓所」「佛石墓所」「くは墓所」「辻のどう墓所」「だい屋敷墓所」の5箇所が掲載(大石一久2005年「千々石ミゲルの墓石発見」) ・千々石ミゲル研究・顕彰委員会で実施された第3次発掘調査(H29.8~9)では、女性が葬られた長持ちからキリシタン関連遺物が出土 ・R1年7月 市文化財保護審議会は出土品をキリシタン関連遺物と確認
	報告書作成	○戦国時代から江戸時代の教会が建設された長崎市内で同種の瓦が多く出土しているもの
	・執筆 ・校正 ・印刷 ・製本	○町郷土誌に掲載されたキリシタン伝承地 イエズス会日本年報1588年フロイス報告紹介 ・城跡に隣接する伝置通寺跡は、江戸時代に諫早領から佐賀藩へ提出された寺社調査誌(諫早市郷土館2007年「寺社調査誌」諫早歴史資料叢書(一)1781~1800年代の記録)に「圓通寺 破壊地」と記載があり、石塔はキリシタンにより破壊された寺院の遺品
	・刊行  (200部予定)	H18年12月歴史探訪「宇木会」編纂委員会刊行 【有喜ロマン小路】に掲載
保存目的範囲調査 2㎡		同上
		<b>多良見町郷土誌掲載</b>
		H30年度に聞き取り、現地確認 (十字架が刻まれた墓碑)
		<b>説明板設置(市教育委員会)</b> 潜伏キリシタンの伝世品と解説
		説明板設置(市教育委員会) 潜伏キリシタンの伝世品と解説
		<b>伊木力佐瀬墓所の踏査</b> 「志げ尾」「佛石」「くは」「なりやうづ」「だいやしき」

## 諫早市キリシタン関連遺跡等調査指導委員会 名簿

## 1 【委員 学識経験者】

番号	専門分野	氏名	所属(職名)
1	考古学	下川達彌	活水大学 学術研究所 諫早市文化財保護審議会 会長
2	考古学	田中裕介	別府大学文学部 史学・文化財学科教授
3	歴史学	山下 二 ※令和3年3月末日まで	諫早市文化財保護審議会 歴史専門委員
		織田武人 ※令和3年10月4日から	諫早史談会幹事 前諫早史談会事務局長 前諫早市美術・歴史館専門員
4	歴史地理学	久原 卷二	諫早市文化財保護審議会 歴史地理専門委員
5	民俗学	川内 知子	諫早市文化財保護審議会 民俗専門委員

## 2 【オブザーバー】

国・県	所属(職名)
	文化庁文化財第二課 埋蔵文化財部門 文化財調査官
	長崎県教育庁学芸文化課 係長
	長崎県教育庁学芸文化課 主事

表3 諫早市キリシタン関連遺跡等調査指導委員会 会議と現地指導等開催一覧

年度	種別	開催日	出席者	内容
R2	指導委員会 第1回	R 2. 6. 29	下川、田中、久原、山下、 川内 県:宮武、前田	委嘱状交付、委員長と副委員長の選出 諮問内容と調査について 調査方針と年次計画について
	現地踏査	R 2. 12. 22 R 2. 12. 23 R 3. 1. 12 R 3. 2. 22 R 3. 3. 20	下川、久原、川内、田中 県:宮武	伊木力地区 梅木地・梅木地(重尾)・平・長野 ・田頭・葛根原 佐瀬地区 穂木字部・小崎 崎辺田地区 崎辺田(須ノ瀬A) 須ノ瀬(須ノ瀬B)
	指導委員会 第2回	R 3. 3. 19	下川、田中、山下、久原、 川内	令和2年度調査の成果報告 令和3年度の調査対象と方法について
R3	現物確認	R 3. 4. 19	下川	墓所で採集した陶磁器の時代性を判定
	現地指導	R 3. 9. 9	下川、久原、川内 県:山梨	山川内遺跡(千々石ミゲル墓所推定地含む)の 現況確認と調査予定箇所を検討
	現地指導	R 3. 10. 4	下川、久原、川内 県:山梨	橘湾沿岸のキリシタン伝承地であるジブの墓の 下部構造の調査の視察、歴史専門員の入選
	現地指導	R 4. 2. 21	下川、久原、 県:山梨	山川内遺跡:平場の存在確認と中世石塔検出、 谷地形の確認 千々石ミゲル墓所推定地横:第3号墓坑から5 号墓坑の上面検出、土師器小皿検出
	指導委員会 第3回	R 4. 3. 30	下川、織田、川内	千々石ミゲル墓所推定地周辺の地形や墓所の広 がりについて
R4	現地指導	R 4. 9. 22	下川、久原、川内、織田、 県:山梨	キリシタン伝承地「ビッチの墓」発掘調査の現 地指導 高城跡採集品の花十字紋瓦の現物確認
	現地指導	R 4. 11. 4	下川、久原、田中、織田 県:山梨	山川内遺跡と千々石ミゲル墓所推定地の調査報 告と検討会 サクモト様の五輪塔現物確認
	指導委員会 第4回	R 5. 3. 13	下川、田中、織田、川内 県:山梨	令和4年度調査の成果報告 令和5年度作成予定の報告書構成案提示 千々石ミゲル墓所推定地シンポジウムについて
R5	指導委員会 第5回	R 5. 11. 20	下川、田中、久原、織田、 川内、 県:中野	諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書の本稿 素案、諫早市に所在するキリシタン関連遺跡等 の今後の取り扱いについて
	指導委員会 第6回	R 6. 2. 8	下川、久原、織田、川内、 県:中尾、中野 国:桑波田	諫早市に所在するキリシタン関連遺跡等の出土 品についての現物確認、諫早市に所在するキ リシタン関連遺跡等の今後の取り扱いについて



表4 諫早市キリシタン関連遺跡等調査における保存目的範囲確認調査の数量一覧

年度	遺跡名	所在地	期間(現場作業)	面積(m <sup>2</sup> )	土量(m <sup>3</sup> )	出土遺物
R3	ジブの墓	早見町955-1	R3.9.8~10.29 (R3.9.27~10.11)	13.0	4.81	14点
	山川内遺跡	多良見町山川内40-1、40-2、48-1、49-1	R3.11.19~R4.3.31 (R3.12.17 ~R4.3.11)	24.8	11.8	ドット取り上げ:13点 層位取り上げ:コンテナ1箱
	千々石ミゲル墓所推定地横	多良見町山川内57-1		19.8	10.5	
R4	ピッチの墓	天神町1283	R4.8.16~12.24 (R4.9.20~22)	2.4	0.438	1点
	山川内遺跡	多良見町山川内40-1、40-2、48-1、49-1、野川内1433-2、1462、1465、1466	R3.6.13~12.24 (R4.7.22~12.13)	17	7	ドット取り上げ:28点 層位取り上げ:4袋
	千々石ミゲル墓所推定地横	諫早市多良見町山川内57-1		11	7.2	

表5 諫早市キリシタン関連遺跡等調査における保存目的地形測量・分析等調査一覧

年度	調査種別	対象	期間	数量	成果品
R1	石塔の実測・図化	ジブの墓(早見町955-1 畑) ピッチの墓(天神町1283 墓地)	R1.12.26~R2.2.18	2基	1/5・1/10
R2	伝承品と石塔の実測・図化	西小路町墓碑 伝西川内マリア観音像	R2.10.27~12.24 R2.10.30~R3.2.5	1基 1点	1/5 原寸
	石塔群図化	伝「円通寺跡」石塔群(多良見町中里200-1 蔭平石塔群遺跡)	R2.11.24~R3.1.29	10点	1/2
	石塔群分布図・地形図	山川内遺跡石塔群(多良見町山川内48番地1外15筆)	R2.12.21~R3.2.15	1基 22点	1/5 1/500地形
R4	実測図のデジタルトレース	千々石ミゲル墓所推定地 伊木力墓所採集品 10箇所	R5.2.2~3.24 R5.2.13~3.30	10点 21点	外線と内面 外線のみ
	R5	地形概略図	伊木力墓所 總木宇都墓所	R5.10.23~R6.1.18	1点

表6 事務局による情報収集及び調査一覧

年度	種別	調査日	内容	成果
R2	自治会アンケート	R2.7.9～ R2.8.11	キリシタン関連遺跡等の自治会アンケート	外道墓・西林寺焼き討ち（高来町黒崎） 公民館内の製造物（織部灯籠）（金谷町） 長田村・小江村のキリシタン殉教者情報
	地籍情報収集	R2.8.14	伊木力・佐瀬地区地籍調査（多良見支所）	昭和56年調査記録より地籍が「墓地」の土地を抽出
	現地踏査	R2.11.16 R2.12.1	高来町外道墓現地確認	確認されず
R3	非破壊科学調査	R3.7.29～ R3.7.30	伝西川内マリア観音像の黒い物質の分析 （長崎県埋蔵文化財センター片多）	実体顕微鏡観察と蛍光X線分析による分析で、黒い物質は炭素で、煤と判断
	出土品の比較調査	R4.3.15～ R4.3.16	山川内遺跡で検出された土師器小皿の比較作業 長崎県埋蔵文化財センター所蔵品	大村市玖名城跡出土の土師器小皿に製作技法などが類似し、諫早市沖城跡出土の土師器小皿とは異なることを確認 諫早家御屋敷跡出土品や森岳城跡出土品とも比較
R4	採集資料借用調査	R4.9.1～ R5.6.30	高城跡花十字紋瓦、山川内遺跡石塔、伝西川内マリア観音像	2点目となる高城跡の花十字紋瓦、山川内遺跡石塔群などの実測・図化・写真撮影 美術・歴史館の常設にて一時展示
	出土品の鑑定調査	R5.2.1～ R5.3.15	伊木力・佐瀬地域の墓地採集資料の鑑定	波佐見町教育委員会の中野学芸員による陶磁器の時代判定と産地鑑定
R5	文献資料調査	R5.8.25	佐賀県多久市所蔵多久家資料1073「肥陽田草録」 多久市郷土資料館	有喜地区所在のジブの墓の伝承に関する寛永末頃の古文書記録の写真撮影・解説 宿主 治部左衛門5人組とキリシタン3人の逮捕と処刑 鍋島勝茂の書状41通のうち3通



## 第2章 キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査

### 第1節 ジブの墓

#### 1 調査坑の設定 (17頁第3図)

「ジブの墓」という伝承がある墓石の地下構造を確認するために、墓石直下に一部重なる形で南北に2箇所の方形の試掘坑を設定した。調査後半では周辺に遺構が存在するか否かを確認するために試掘坑を南北にそれぞれ延長した。

墓石の実測作業については2019年(令和元)度を実施し、2021年諫早市教育委員会発行の文化財調査報告書第27集において周辺の写真などとともに地上部分の実測図は報告済である。

#### 2 基本土層 (表7基本土層、18頁第4図)

調査の結果、試掘坑の土層を7つに分層した。基本となる土層は次の4つである。

1 a層及び1 b層は表土で墓石周辺に広がる現在の畑の耕作土である。

2層は炭化物を含む土層で、畑のかく乱などもあるが良好な遺物包含層であり上面の墓石直下で土坑の掘りこみを確認した。

3層は2層とよく似る土層であるが炭化物を含まない。

4層は硬質な土層で遺構検出面である。遺構検出面を2枚もつ複合的な遺跡である。

#### 3 出土遺物 (表8出土遺物集計、写真1)

調査の結果、14点の遺物が各層から出土した。耕作土である1 a層および1 b層からは近現代の磁器が13点、墓石の盛土から川原石(角閃石安山岩)が1点出土した。

#### 4 試掘坑掘削

##### 墓石直下の土坑

墓石の一部および盛土である0層を除去して1 a層(表土)を掘削したところ、試掘坑北および試掘坑南の2層上面よりほぼ同じ高さにある複数の礫とともに土坑の埋土と思われる土層(ST1-1層)を確認した(第4図・写真4・5)。なお、土坑の掘り込みの範囲を明確にするために、2層を精査し調査を完了した。その結果、墓石の直下に東西を長軸とする1.26m×0.95mの隅丸方形の土坑が発見され、墓石の直下であるため墓坑と考えられる。(以下、墓坑と表記)また、南北方向に試掘坑を延長して、周辺に遺構が存在するか否かを確認したが、新たな遺構は確認されなかった。墓坑埋土は掘削を行っていないため、正確な深さは不明であるが、ピンボールによるボーリング調査により1m以上の深さとなる可能性がある。

##### 墓石周辺の堆積状況

土層堆積を観察すると、墓石の下部構造の一部である0層と墓坑の掘りこみ面である2層の間に1 a層が堆積している。そのため墓石は造られた後、1 a層が堆積する間に崩壊し再度組み立てられ、畑耕作の繰り返しによって出土した礫が墓石周辺に寄せられるなどの近現代の行動の結果、現状の墓石が形成されたと思われる。0層からは近現代の陶磁器片が出土していることから、0層は近代以降に盛られた土層である。

上記の墓石直下の土層観察から、墓坑が造られた当初は0層の堆積はなく、2層の上部に直接墓石を積み上げていたことが想定される。なお、墓坑の埋土は柔らかく10cm程度の礫が標高120.63m付近で平行に並んで検出されており、当初建てられた際の墓石の裏込

め礫の可能性がある。

また、2層上面および3層上面の高さを試掘坑の南北で比較した際、北側が12cm程高く旧地形を物語る。圃場整備が行われたため、現在は試掘坑の南端から10m付近までは水平な地形であるが、圃場整備以前は試掘坑の東側に北から南へ下る坂が確認されるため、基本的には旧地形も現在と同様に北から南へ傾斜していた。

## 5 調査成果

ジブの墓の直下には素掘りの隅丸方形の墓坑があり、その埋土は深度が1m以上あることを確認した。過去の記録で墓石下部に対する掘削歴があることが判明しているが、2層の堆積状況には大きな乱れがないため、遺構の残存状況は必ずしも不良とは判断されない。

表7 基本土層

層位	層名	土色	註記
0層	淡灰褐色軟質土層	Hue2.5Y5.2 暗灰黄	ST1(墓石)の直下に黄褐色に堆積する軟質な土である。 層中に円礫が1点確認されたほかは遺物の出土はない。
1a層	暗赤褐色土層	Hue2.5YR4.3 にぶい赤褐	試掘坑周辺に堆積するやや軟らかい土である。試掘坑周辺の表土であり、畑の土と思われる。 層中から近現代の陶磁器が確認されている。 ST1の一部をなす0層と墓坑の傾りこみ面と思われる2層の中間に堆積していることから、 ST1は造られた後、1a層が堆積する間に崩された現状の形を形成したと思われる。
1b層	明赤褐色泥礫硬質土層	Hue5YR5.6 明赤褐	試掘坑の北部・南部・東部から確認される硬質な土である。 1a層と同様に試掘坑周辺の表土であり、畑の土と思われる。 5cmから20cm程の礫を含むほか、近現代の陶磁器が確認されている。
2層	暗赤褐色土層	Hue10R4.4 赤褐	炭化物およびパビスを含む安定した土である。 上面からはST1が傾り込まれていることから試掘坑周辺における遺構面と考えられる。 なお、2層はST1周辺の高層礫が確認される。 ST1周辺以外の2層は畑の造成などで擾乱された可能性が高い。
3層	暗赤褐色硬質土層	Hue10R4.3 赤褐	2層とよく似た土色だが2層に比べ炭化物が確認されないことに加えパビスの量が少なく粒も小さい。 遺物は確認されなかった。
4層	暗赤褐色硬質土層	Hue2.5YR3.6 暗赤褐	3層の下位に堆積する非常に硬質な土である。遺物は確認されない。試掘坑周辺の地山と考えられる。
ST1-1層	暗赤褐色泥礫土層	Hue10R3.3 暗赤褐	ST1の墓坑の埋土である。土はやや軟らかく10cm程の礫を含む。 なお、礫は標高120.63m付近で平行に並んで埋まっている。 遺物は確認されなかった。

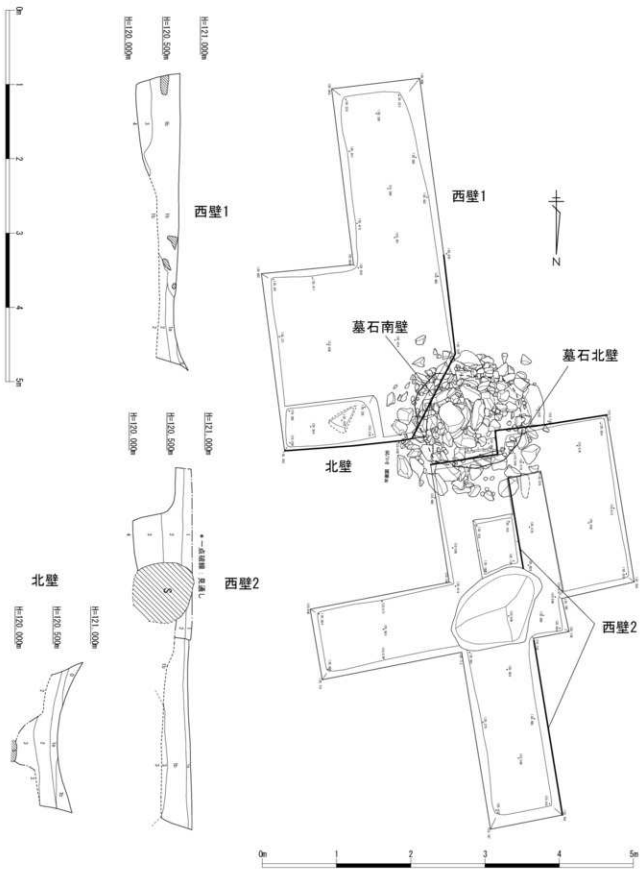
表8 出土遺物集計

層位	試掘坑	備考
0	1	墓石の盛土
1a	7	
1b	6	2点は同一個体
2	-	
3	-	
4	-	
ST1-1	-	
合計	14	*全点層位取り上げ

写真1 出土品



※遺物は層位取り上げで行った。取り上げた遺物はラベルに出土年月日・出土層位・出土地点（試掘坑の区分けおよび土層註記参照）を記載してビニール袋に格納した（写真1）。



第3図 調査区全体平面図 (1/50)

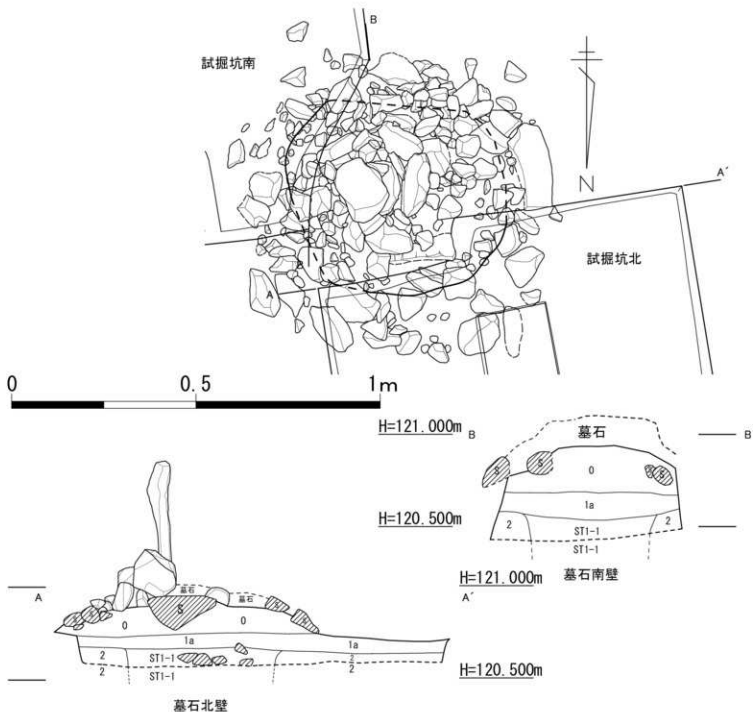


表 土層日記

0層	淡褐色軟質土層 (Hae2.5Y3/2 暗灰青) ST1 (墓石) の直下に遺体痕に堆積する軟質土である。層中から円筒が1点確認されたほかは遺物の出土はない。
1a層	暗赤褐色土層 (Hae2.5YR4/3 濃い赤紫) 試掘坑周辺に堆積するやや軟らかい土である。試掘坑周辺の表土であり、壁の土と思われる。層中から近現代の陶磁器が確認されている。ST1の一部をなす0層と墓坑の掘り込み面と思われる2層の中間に厚積していることから、ST1は造られた後、1a層が堆積する間に崩れて現状の形を形成したと思われる。
1b層	明赤褐色泥礫硬質土層 (Hae5YR5/6 赤紫) 試掘坑の北部、南側、東部から確認される硬質な土である。1a層と同様に試掘坑周辺の表土であり、壁の土と思われる。5cmから20cm程度の礫を含むほか、近現代の陶磁器が確認されている。
2層	暗赤褐色土層 (Hae10R4/3 赤紫) 炭化物およびパリスを含む安定した土である。上面からはST1が掘り込まれていることから、試掘坑周辺における遺構面と考えられる。なおST1周辺のみ厚積が確認される。ST1周辺以外の2層は壁の造成などで視認された可能性が高い。
3層	暗赤褐色硬質土層 (Hae10R4/3 赤紫) 2層とよく似た土色だが、2層に比べ炭化物が確認されないことに加えパリスの量が少なく粗も小さい。遺物は確認されなかった。
4層	暗赤褐色硬質土層 (Hae2.5YR3/6 暗赤紫) 3層の下位に堆積する非常に硬質な土である。遺物は確認されない。試掘坑周辺の地山と考えられる。
ST1-4層	暗赤褐色硬質土層 (Hae10R3/3 暗赤紫) ST1の墓坑の覆土である。土はやや軟らかく10cm程度の礫を含む。なお、礫は標高120.63m付近で平行に渾んで確認されている。遺物は確認されなかった。

第4図 遺構詳細図 (1/20)



写真2 トレンチ全体図



写真3 墓石部分の上空写真



写真4 墓坑掘り方 試掘坑南



写真5 墓坑掘り方 試掘坑北



写真6 墓石南壁



写真7 墓石北壁



写真8 トレンチ部分拡大



写真9 調査指導委員会現地指導



## 第2節 ジブの墓に関する文字資料

### 1 調査に至る契機と経過

1980年（昭和55）発行の『諫早史談』第12号に村井正明氏の「伊佐早とキリシタン」において、多久家文書所収の鍋島勝茂書状が紹介され、ジブの墓とビッチの墓とがある宇喜村において、次のようなキリシタンの事件があったことが記録されていることを報告している。以下は村井報告から引用した。

「有喜村に來た二藏夫婦は長崎奉行所の命によって捕らえられ長崎に於いて吟味の結果、有喜村に差返され逆つりの刑に処せられた。その上宿主・請人・五人組も両長崎奉行所の意向によって協議の結果、女房子供、縁者、散使に至るまで合計十二名が火あぶり等の極刑となってキリシタン弾圧は一層強化されていることがわかる。」

この村井報告の元になった史料は、長らく佐賀県史料集成所収の多久家文書であろうと言われていた。また、村井報告では宿主の名は「治郎左衛門」と翻刻されていた。

しかし、この多久家文書について、諫早市キリシタン関連遺跡等調査指導委員会の歴史資料の専門委員である織田委員により、元になった多久家文書の所在地が佐賀県多久市の多久市郷土資料館であることが指摘された。そして事務局で多久市郷土資料館へ問い合わせたところ、村井報告の元になった資料の名称が「肥陽旧章録（多久家資料1073）」であることをご教授いただいた。

「多久家資料」は佐賀県重要文化財に指定されており、日記類・法令関係・財政関係・絵図・書状・一般資料等の2,875件に及ぶ資料群である。多久家資料のうち文書群を多久家文書という。有喜村のキリシタン関連の記事が掲載されている「肥陽旧章録」は、「多久家文書」の内一つ（多久家資料1073）で、和綴じ冊子、法量は縦25.7cm 横18.5cmである。

また、「肥陽旧章録」のキリシタン処刑記事については、多久古文書学校の平野寅男氏（故人）により2010年（平成22）発行の『葉隠研究』70号に報告されていることも多久市郷土資料館よりご教授いただいた。平野報告では「肥陽旧章録」に収録された該当文書の年代を1640年前後（寛永末）とし、該当する箇所を次のように翻刻をしていた。

「一 右二藏宿主治部左衛門、其外請人・五人組、何も擯置候条、一省略—」

平野報告では宿主の名前が「治部左衛門」とあり、伝承地の「ジブの墓」と同一の発音であることが明らかになった。そのため「肥陽旧章録」の写真撮影等の調査をおこなった。

### 2 「肥陽旧章録」（多久家資料1073）（22～25頁：写真10～写真13）

写真撮影による記録作業は、多久市郷土資料館学芸員の志佐喜楽氏と同館館長の藤井伸幸氏にご指導いただきながら実施した。写真撮影の結果、村井報告の「宿主治郎左衛門」は、平野報告にある「宿主治部左衛門」と判読するべきことを確認した。

また、同史料中に登場する鍋島織部は1637年（寛永14）に有馬陣（島原の乱）における失態のため、翌15年に牢人となっており、寛永14年以前の記録であると思われる。

このため、「ジブの墓」伝承地に伝わる名称は、同時代の文字資料により裏付けができることが明らかになり、時代性や伝承の要因が寛永末に発生したキリシタンの捕縛とそれにかかわって捕らえられた有喜の住民が処刑された事柄であることが判明した。このことにより「ジブの墓」に関する伝承は、およそ380年間にわたり、諫早地域で長く語り継がれてきた潜伏キリシタンに関する伝承であることが明らかになった。さらに発掘調査を

行った結果により、墓石の地下には墓坑が存在することが明らかであるため、伝承地に所在する自然石の墓石に地下遺構が伴うことが確認された。22頁から25頁に、該当部分の史料写真と諫早市美術・歴史館所属の大島大輔専門員による翻刻文を掲載する。

### 3 『多久家文書』について

『多久家文書』については、2022年（令和4）に東京大学史料編纂所・多久家文書研究会により『多久家文書の「読みなおし」』と題した報告書が発行され、また、PDF形式のデータがWebで公開されている。本項ではPDFによる語句検索の結果を紹介し、今後の課題として、佐賀藩におけるキリシタン関連の史料を紹介する。

多久家は佐賀鍋島藩の重臣であり、藩主との関係において「親類同格」に位置付けられている家である。多久家文書は16世紀後半から17世紀中頃までに佐賀藩が作成し、重臣である多久家などへ送った文書を収録した古文書群であり、現在は佐賀県多久市教育委員会が所蔵している。『多久家文書の「読みなおし」』によれば、多久家文書の卷子本（巻物）に収録された文書746通の内、約6割を超える462通が佐賀藩初代藩主鍋島勝茂により作成された藩政に関わる書状である一方、多久家の親族宛ての書状も多いという特色を持つ。

同文書中にはキリシタンの取締りや処罰に関わる通達・命令も発せられている。キリシタン関連の語句には「きりしたん」「ゆるまん」「いるまん」「ばてれん（伴天連）」の4種類があり、記載された箇所数は72箇所である。内訳は「きりしたん」が50箇所、「ゆるまん」が4箇所、「いるまん」が5箇所、「ばてれん（伴天連）」が13箇所である。これらの語句が記載された記事からは17世紀中頃のキリシタン禁令が強化されていく過程の真っ只中の佐賀藩内の動きを確認することができる。

また同文書の17世紀初めから中頃までの記事の中に、佐賀藩諫早領主を表す名称が度々登場する。「諫早領主」関連語句には「(二代) 諫早直孝」、「(三代) 諫早茂敬」、「(四代) 諫早茂真」の3種類があり、記載された箇所数は154箇所である。内訳は「諫早直孝」を表す語句「右近」「石見」が合計28箇所、「諫早茂敬」を表す語句「豊前」「ふせん」「左衛門」が合計114箇所、「諫早茂真」を表す語句「豊前」「豊州」「諫早左衛門尉」が合計12箇所である。これらの多くは書状の宛先に併記されていて、書状の内容自体は諫早に関連する記事ではないことが殆どである。しかしながら、諫早領主は1699年（元禄12）には須古・多久・武雄と並び龍造寺系の四家の一つとして「親類同格」に位置付けられていることから、佐賀藩政を構成する主要なメンバーとして認識され、重要な情報が共有されていたと考えられる。

このように、諫早領内のキリシタンに関する文字資料が記録されている可能性があり、今後の課題である。

写真10 佐賀県多久市郷土資料館所蔵

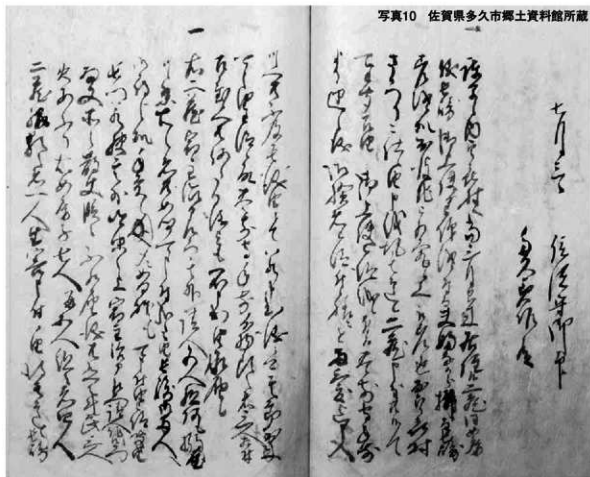
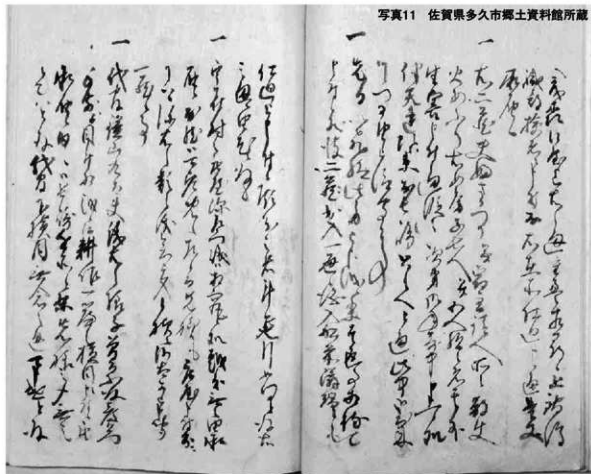


写真10

- 一 諫早之内宇岳村へ當三月己未居住候二藏同女房儀長崎御上使被仰越候付而夫婦ながら揃而長崎差越候処於彼地被為究候上被差返於宇岳村さかつり二仕候由申越得其意候二藏申分共候て可被聞召由御上使被仰越候付而豊前守手前より辺候儀御檢者被仰付候様二と兩三度込申入候へ共不及其儀由二て若申出儀二て其節到来可申由被仰候故豊前守手前分物頭之物三人相付召置候へ共何たる儀をも不申出由承届候
- 一 右二藏宿主治部左衛門其外請人五人組何も擲取候条右之者共如何可申付哉候之由長崎御同人へ御尋候処手前ノ二如何様候も可申付由被仰聞候由長門若狭其外吟味之上宿主治部左衛門請人作左衛門尚又所之散使段々不相届儀共有之付而此三人火あふり右女房子七人并五人組之者四人
- 二 二藏縁類之者一人生害申付候由得其意候長崎

写真11 佐賀県多久市郷土資料館所蔵



## 写真 11

へ茂森口屋迄右之通重畳相尋候□鍋嶋

織部検者二申付於右在所仕廻申候通是又

承届候

一右二藏夫婦さかつり并宿主請人所之散使

火あふり右女房子七人并五人組之者其外

生害申付候通段々次第御年寄申上候処

伴天連次郎兵衛於長崎とらへ被通此中御到来

候つる由被仰問候事

一先日以飛□此方被申越候条其通事相□て

申付候処彼二藏出入一通之儀入船前隣端候も

仕廻被申付候□分之者計延引如何と得右

之通候由尤二存候

一字岳村之庄屋深左衛門儀ハ相究候処越度無之由承

届候於然ハ可差免候左候而先□も庄屋申付書二

候ハ、弥右之類之儀念を入候様二沙太可被申問

可然候事

一代官鎌(陰)山九太夫儀右之様子曾而不存彦右衛門

手前今日付相越候□耕作一篇之横目二申付候□由

承届候内へハ長崎近所候条先様之ノ無之

候てハと存代官下横目無念之通可申遣と存

写真12 佐賀県多久市郷土資料館所蔵

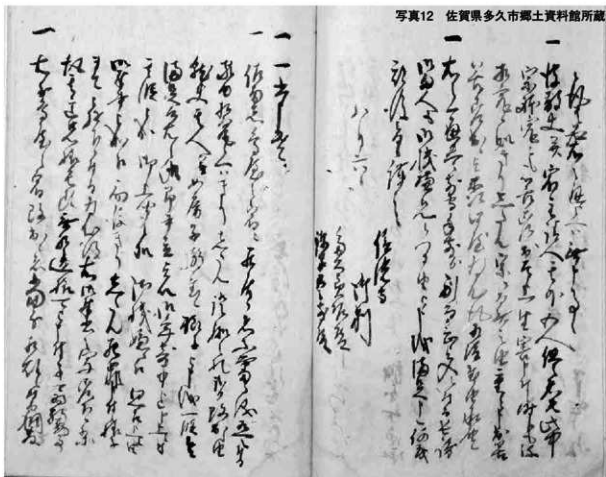


写真12

候儀者□右之通二候へハ無申事

一 彼散使并宿主請人其外五人組之者共此中

宗牀究二も管差出其上生害申付候時分も弥

相究候処きり志たん宗二而無之由重々申出答

管差出候を森口屋為心得相渡置由承届候

一 右之一通豊前守手前分別而念を入候付而長崎

御兩人も御機嫌見候つる由被申越満足申候何茂

□後□候謹言

八月六日 信濃守

御判

多久美作殿

諫早豊前殿

(中略)

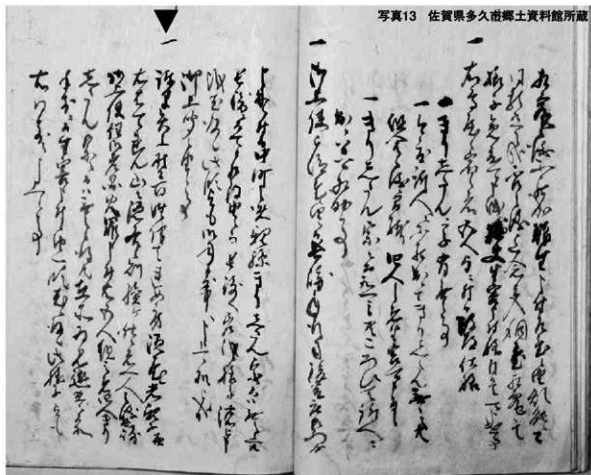


写真13

(中略)

一 諫早矢上村者百姓伴天連女房隱置シ者親子并

右者て連ん山二隠居候則□ケ仕候者一人之儀長崎

御上使任御差圖火罪申付右五人組之者四人きり

志たん宗二而ハ無之候得共在所為見□□兵衛

手前二而生害申付候由一□置候存候此様子をも

右同前二申上候事

### 第3節 ビッチの墓

#### 1 試掘坑の設定 (29頁6図)

調査対象の墓石は諫早市天神町の墓地内の北西部に位置する。墓地には江戸期の紀年が刻字された墓石が存在し、古くから墓地として利用されていた。写真14はビッチの墓がある墓地全体の上空写真で、第5図は上空写真をトレースした平面図である。

ビッチの墓(第5図の1)の東側に自然石が多数平積みされた円形の地上標識(第5図の⑦～⑮)が複数あり整然と並んでいる。また、切り石加工の墓石(第5図②～⑥)があり、集中して並んでいる。墓地の東端にも自然石が多数平積みされた円形の地上標識(第5図の55～66)がある。第5図の大型の四角は近代化の進んだ形態の墓地である。

江戸時代後半代の紀年銘を有する切り石加工の墓石があるため、かつては墓地全体に自然石の平積みされた円形の地上標識と切り石加工の墓石とがあったものと思われる。紀年銘を有する墓石の記録作業は今後の課題である。

墓石の実測作業については2019年(令和元)度を実施し、2021年諫早市教育委員会発行の文化財調査報告書第27集において周辺の写真などとともに地上部分の実測図は報告済で



写真14 天神墓地上空写真

ある。今回の調査では潜伏キリシタンの伝承をもつビッチの墓について墓坑の掘り込みを確認するため、墓石の周囲に試掘坑を設定して調査を行った。墓石の地下構造を確認するために墓石周辺の東西及び南に試掘坑を設定した。その結果、西側で土坑の掘りこみを確認し、東側と南側では遺構が確認されなかった。

## 2 基本土層（第6図 平面図・土層図、写真15～20）

調査の結果、試掘坑の土層を4つに分層した。1層は墓石の下部を覆う形で堆積し、墓石の最下部は1層の最深部となりその直下が2層で、それぞれ10cmほどの厚さである。3層はしまりと粘性があり、試掘坑全体に存在し、土坑の掘りこみが検出された。

## 3 出土遺物（写真21）

調査結果、2層から1点の磁器小片が出土した。江戸時代の磁器である。

## 4 試掘坑掘削

1層を除去したところ、2層直上で墓石中央の石碑の最深部が確認された。そのため、石碑は1層が堆積した後、または同時に建てられた可能性が高い。また、2層からは近現代のものと思われる磁器の小片が出土し、石碑は近代以降に再建された可能性が高い。

3層上面では、墓坑の埋土と思われる4層が確認された。4層は3層と土質が似ているが、やや軟質である。3層を掘り込んで墓坑とした後に埋めたためと思われる。3層の上面は墓坑が掘られた時期の地表面である可能性が高い。

なお、4層を確認後、3層および4層が重複する箇所サブトレンチを設定し、精査したところ、断面で掘りこみを確認し、土坑と判断した。

4層は調査範囲を超えて現在コンクリート張りになっている箇所へ拡がる。墓坑の規模および形状は想定では、南北約1.1m、東西約0.9mの隅丸方形をなす。また、4層に50cmピンボールを刺して深度を調べたところ40cm程容易に刺さったため、ある程度の深さを持つと推測される。そのため、墓坑となる可能性は高い。

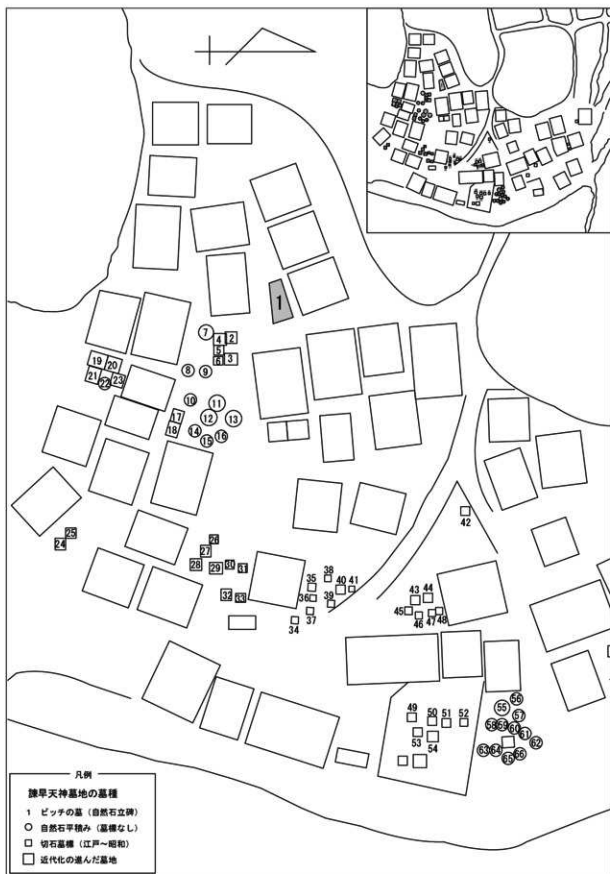
## 5 調査成果

3層上面で墓坑と思われる掘り込みを確認した。また、石碑は墓坑が掘られた時期より後に建てられた可能性が考えられることが判明した。ただ、墓坑が掘られた時期を示す遺物は検出できなかった。ビッチの墓が立つ場所は、墓地として利用されている区画の中心よりやや北側にあるため、墓地が利用され始めた当初からビッチの墓との伝承を持つ墓石が存在したことが想定できる。



現地視察の様子





第5図 天神墓地の平面図

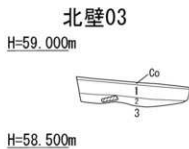
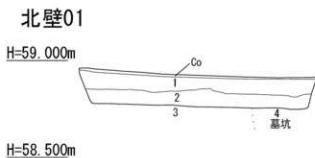
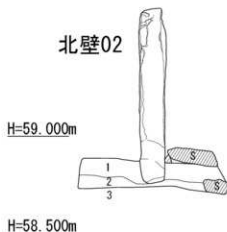
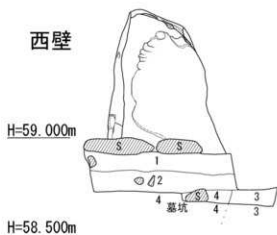
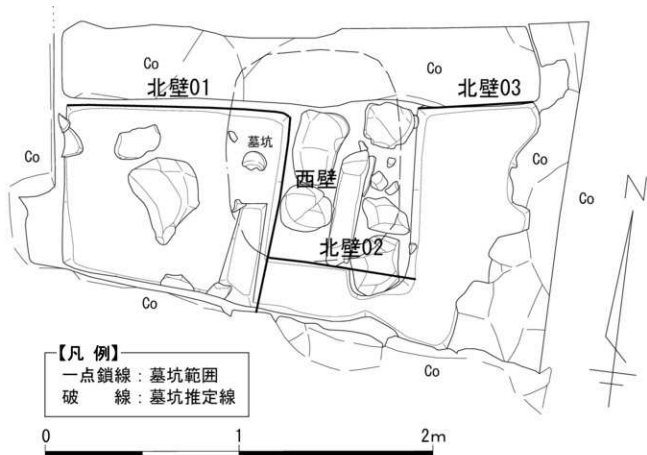


表 土層註記

層位	層名	土色	註記
1層	縮尺褐色軟質土層	Hue2.5YR4-2灰赤	試験坑周辺に堆積するやや軟らかい土である。遺物は出土していない。 石陣最下層は1層の最下部と一致する。そのため、石陣は1層が堆積した後で設置された可能性が高い。
2層	縮尺色泥礫土層	Hue5R4/6赤褐	やや締まった土であり、5cm-15cm程度の礫を含む。近現代の陶磁器が1点出土している。
3層	明赤褐色泥礫粘質土層	2.5YR4/6赤褐	やや締まった土であり粘性を持つ。3層の上面から墓坑の掘り込みが確認された。 墓坑が掘られた当時の地表面である可能性が高い。
4層	淡赤褐色泥礫粘質土層	Hue10R4/3赤明	3層上面で確認した墓坑に堆積する土である。3層によく似た土であるが若干軟らかい。 3層を掘り込み埋め戻したと思われる。層中に10cm程度の礫を含む。遺物は出土していない。

第6図 平面図・土層図 1/20



写真15 トレンチ全体図



写真16 土層西壁



写真17 土層東壁



写真18 土層北壁



写真19 土層北壁



写真20 土層北壁

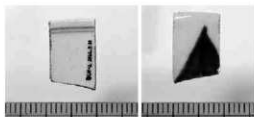


写真21 出土遺物 (左：内面・右：外面)

## 第4節 山川内遺跡分布調査及び地形図作成

### 1 ヒアリング調査(図7)

調査に先立ち、調査対象地内の土地所有者である野口氏に於て当地に所在したとされる石塔群について聞き取り調査を行った。その結果、「調査範囲内に石塔が多く所在したが、1995年(平成7)、軽トラック1台分の数量を供養の儀式に移設した」との証言を得た。

しかしながら、「昔、清水氏宅周辺でも石塔らしきものを見たことがある」との証言を得たため、清水宅周辺を重点的に踏査することとした。

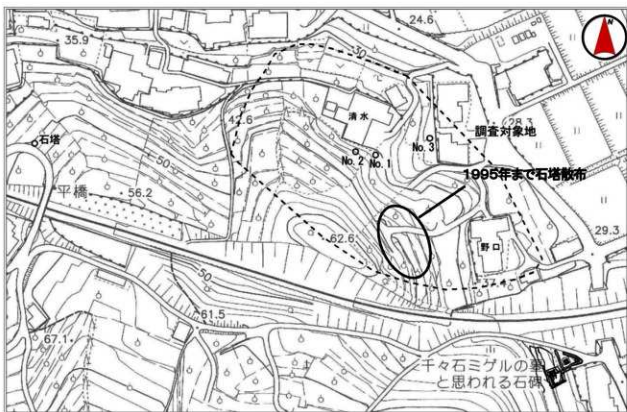
また、清水氏によると自宅の周辺及び千々石ミゲルの墓と思われる墓石あたりは、「ブッセキ」と呼ばれており、清水氏宅の西側にある広い平坦面は、「ブッセキチ」と呼ばれているとの証言を得た。

### 2 現地踏査

踏査の結果、聞き取り調査の結果通り、清水氏宅の敷地内2箇所および畑地1箇所の計3箇所から合計22点の石塔部材を確認した。なお、清水氏宅周辺以外からは石塔部材を確認することは出来なかった。

確認した22点の石塔部材は3箇所に分かれ分布していたため、確認した順に分布域の名称をNo. 1・No. 2・No. 3と区分けた上で、各部材には枝番を付して管理番号とし、以下は第1地点、第2地点、第3地点と呼称し報告する。また、部材別に種別(五輪塔・宝篋印塔・石碑)、部位、石材の種類、刻字、地点を記載したものが表9である。

地点別の数量は、第1地点から13点、第2地点から5点、第3地点から4点である。



第7図 石塔分布図

表9 分布石塔一覧表

番号	管理番号	種別	部位	石材種類	刻字	地点
1	1-1	五輪塔	火輪	緑泥片岩	無	No. 1
2	1-2	五輪塔	水輪	緑泥片岩	無	
3	1-3	五輪塔	地輪	砂岩	無	
4	1-4	五輪塔	水輪	安山岩	無	
5	1-5	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	無	
6	1-6	五輪塔	水輪	緑泥片岩	無	
7	1-7	五輪塔	火輪	緑泥片岩	無	
8	1-8	五輪塔	火輪	緑泥片岩	無	
9	1-9	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	有 道佛禪門	
10	1-10	五輪塔	地輪	緑泥片岩	無	
11	1-11	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	無	
12	1-12	五輪塔	地輪	緑泥片岩	無	
13	1-13	石碑	-	安山岩	有 【正面】佛說摩訶般若 / 一切諸無供養碑 【右面】大正拾貳年五月吉日 / 施主清水幸四郎	
14	2-1	五輪塔	地輪	安山岩	有 ○(月輪)	No. 2
15	2-2	五輪塔	有耳火輪	安山岩	無	
16	2-3	五輪塔	有耳火輪	安山岩	無	
17	2-4	五輪塔	風空輪	安山岩	無	
18	2-5	五輪塔	地輪	安山岩	無	
19	3-1	石碑		安山岩	有 【正面】 明治三(一に卅)七年ノ堤ノ丁工内シカ/ ニ トリ●今●ノ右●山川●太●	No. 3
20	3-2	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	無	
21	3-3	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	無	
22	3-4	宝篋印塔	基礎	緑泥片岩	無	

## (1) 第1地点の石塔散布

第1地点は清水氏宅の敷地の標高40mに位置し木造の祠の中に祀っており、祠の周辺にも部材が分布する。写真中の番号は表9の管理番号に対応し、13点の散布状況である。



写真22 第1地点石塔部材確認状況 (正面)



写真23 第1地点石塔部材確認状況 (正面下段)



写真24 第1地点石塔部材確認状況(右)



写真25 第1地点石塔部材確認状況(左)

## (2) 第2地点の石塔散布

第1地点と同様に清水氏宅の敷地内に所在し、第1地点から西に10m程離れた標高41mに位置する。第1地点と同じように石塔部材の一部が木製の祠の中に祀られており、祠裏にも部材が散布する。写真中の2-1～5であるが、2-1及び2-2はコンクリートの上に密着して安置されている。すべて五輪塔で部材は安山岩である。



写真26 第2地点石塔部材確認状況 (正面)



写真27 第2地点石塔部材確認状況



写真28 第2地点石塔部材確認状況 (祠裏)



### (3) 第3地点の石塔分布

第3地点は第1地点から約29m北東へ下った標高31mの地点に散布する。踏査した時点では大部分が地中に埋没している状況（写真30）であったため、清掃作業後に記録した。

清掃作業の結果、宝篋印塔の基礎3点と明治期の石碑1点を確認した。石碑はこの地点にある小さな堤の工事の竣工を1904年（明治37）に紀年したものである。

なお、石塔部材は調査後埋設せず写真29の通り、確認した地点に残置している。



写真29 第3地点石塔部材残置状況



写真30 第3地点石塔部材確認状況

### 3 地形図作成および石塔の残存状況

#### (1) 地形図作成

山川内遺跡全体の地形測量（等高線1m間隔）を行い、石塔の分布図（縮尺1/500）と断面図（1/200）を作成した。第8図及び第9図はその縮小版である。また、断面図の分析から地形の起伏は、断面A-A'では長さ約100mで15度の傾斜であるが、標高45m付近で平坦な部分があり、その前後は20度前後の急傾斜であり、断面B-B'では長さ約70mで15～20度の傾斜であることが判明した。

第1地点と第2地点とは断面B-B'と同類の地形上にあり、石塔の安置には段造成及び平場造成が必要な地点である。石塔安置当時段造成が行われていたもので、その段を利用しながら、現在のミカン畑特有の段々畑となる景観が形成されたのであろう。地下構造がどの地点にあるかについては、考古学的な調査を主体とした今後の課題である。

第3地点は字「山川内」と「野川内」との境になる小さな谷の東側の人口造成の小さな用水池の堤上にあり、谷奥の標高32mの地点には湧水がある。第3地点の西側には標高34m及び31mに段造成されたミカン畑があり、地下構造が存在する可能性がある。

#### (2) 石塔及び部材の残存状況

分布調査を行った結果、遺跡南東側の1995年（平成7）に移設された分布地点以外にも、石塔の部材が3箇所に分かれて22点残存していた。

##### 第1地点の石塔数

宝篋印塔の基礎が3点、五輪塔では地輪・水輪・火輪がそれぞれ3点ある。石材別では緑泥片岩がもっとも多い10点、砂岩と安山岩が各1点である。また、安山岩製の石碑は1923年（大正12）に建立された供養碑で、土地所有者（清水氏）に縁故のある人物により、開墾にともなう石塔群の発見とその魂を鎮めるために安置されたものであろう。

##### 第2地点石塔の数

安山岩製の五輪塔の地輪と火輪が各2点、風空輪が1点あり、火輪の特徴から江戸時代初頭の有耳五輪塔の部材である。2-3及び2-4は同一の石塔であり、この周辺に2基分の五輪塔に伴う地下構造が存在する可能性が非常に高い。

##### 第3地点石塔の数

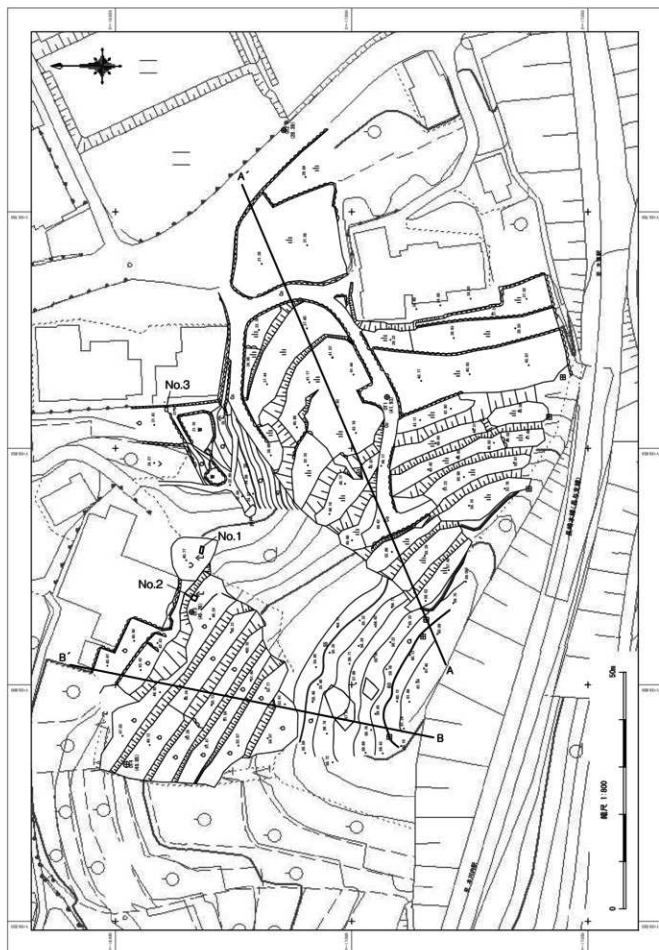
明治の石碑の他に、緑泥片岩製の宝篋印塔の基礎が3点あり、大きさは3種ある。

#### (3) 調査結果

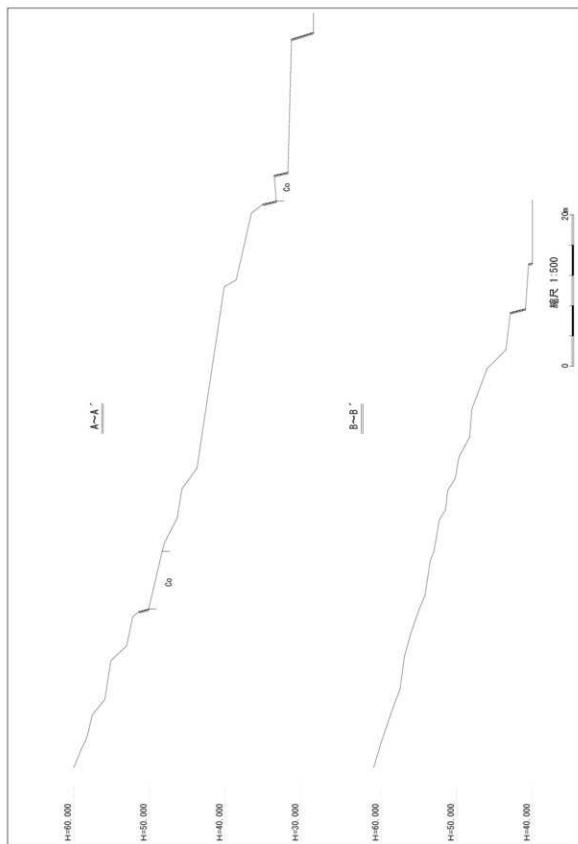
今回の調査で分布を確認した石塔類は22点、そのうち江戸時代以前の石塔は20点である。第1地点は標高40.77m、第2地点は標高45.76m、第3地点は標高31.43m、標高31～45mの6mの高低差に、東西40m南北15mの範囲に分布する。

標高は40～41m、31m付近との2種あり、いずれも傾斜地を造成して墓地としての平場を作り出し、その中に地上標石として五輪塔と宝篋印塔からなる墓所が営まれたと考えられる。石塔の種別は、第1地点は五輪塔と宝篋印塔とが混在し、第2地点は五輪塔のみ、第3地点は宝篋印塔のみの構成となる。数量は宝篋印塔の基礎が6点、五輪塔の地輪が5点あり、少なくとも11基の石塔が存在したことが判明した。

現地はミカン畑として利用されているが、所有者の証言や現地踏査の観察から、大型重機等による機械掘削による造成ではなく、人力掘削のみによる造成と思われ、地下に遺構が残存する可能性は高い。



第8図 地形図及び石塔分布図 1/800



第9図 地形断面図2本 1/500

## 第5節 山川内遺跡分布の第1地点石塔群

### (1) 石塔群の特徴

本節では、第1地点の13点の石塔のうち9点について借用し、実測・写真・採拓等の作業を行った。第1地点には中世期の銘文と思われるもの「道佛禪門」があり、江戸時代以前の石塔が20点あり、伝承名である「ブッセキ」や「ブッセキチ」という言葉は、仏教にかかわるこのような石塔があることからの伝承であるという仮説が成立する。

また、第1地点の1923年(大正12)の清水氏建立の石碑は、正面に「佛說摩訶般若一切諸無供養碑」とあり、土地の開墾と石塔の発見、その収集供養に係わった大正時代の住民が石塔に宿る魂を鎮める行為を反映したものである。

第10図の1から8及び第11図の9は、第1地点石塔群の1/5縮尺の正面図である。また、43頁から47頁の写真は、石塔9点の各面の展開写真である。表10には石塔の寸法を記録した。「道佛禪門」銘の石塔は、正面幅25.1cm 高さ13.0cmである。

1は緑泥片岩製の五輪塔で火輪である。二角を欠くが、上面平坦面の中央に方形のホゾ穴が彫られている。屋根部の反りがほとんど見られない形態である。2は緑泥片岩製の五輪塔の水輪で、完全な形で遺る。下面に方形の低い突起をもち、側面にはノミ痕が良好にみられる。球体の上下を大きくカットした形態である。3は砂石製の五輪塔の地輪であり、完全な形で遺る。立方体に削り出し表面の仕上げは丁寧である。底面中央に方形の穴を彫り、上面は平坦である。4は安山岩製の水輪であり、完全な形で遺る。球体の下部が膨れる形態である。上面・底面ともにホゾが作られず平坦である。

5は緑泥片岩製の宝篋印塔の基礎であり、ほぼ完全な形で遺る。上面に削り出された段は一段で低く、側面観は2のように直立する立方体ではなく、中央部が膨らみ下部がやや小さくなる丸みのある形態である。6は緑泥片岩製の五輪塔の水輪であり、半分が欠損する。上面に1cmほどの丸い機械穿孔と思われる穴があり、この穴が生じた際に欠損したと思われる。7は緑泥片岩製の五輪塔の火輪であり、ほぼ完全な形で遺る。屋根部の反りはほとんど見られない形態で1と類似する形である。上面の平坦部中央に方形のホゾ穴を彫られる。8は緑泥片岩製の五輪塔の火輪であり、3分の1ほどが欠損する。上面の平坦部中央に方形のホゾ穴が彫られる。高さは低く少し小型であるが屋根の反りは1や7よりも強い。9は緑泥片岩製の宝篋印塔の基礎で、ほぼ完全な形で遺る。正面に刻字があり「道佛禪門」と楷書の線彫りで刻字される。上面には段が2段あり、上段が高い。上面平坦面には方形のホゾ穴が彫られ、側面の下半は欠損箇所が多いが接地面は広く安定する。

### (2) 石塔群の時代性

山川内遺跡に散布する石塔の時代性について、過去の発掘調査成果(第2章第6節50頁に編年図掲載)と近隣の紀年銘を有する資料を参考にして検討する。

2の水輪や9の基礎に類似する資料が大村市乾馬場町にある大村館墓地の石塔群にある。大村館墓地の石塔群は、1300年代から1500年代まで営まれた石塔群である。以下は、実測図と編年案とを今回報告の第1地点石塔群9点と比較した結果である。

2の水輪に類似する同じ石材の資料が複数点報告されており、形態や寸法が類似しており、「うろこ状の削り痕」と表現されるノミ痕が側面全面に残るものである。大村館墓地の報告書掲載の編年案では、第4段階(室町後期：戦国時代)に位置づけられる一群である。

同じく、9の基礎と類似する資料があり、方形の段の高さ形態が類似し、寸法と石材も

表10 第1地点石塔寸法一覧 単位：cm

	種別	部位	高さ	横	奥行	幅	細部の構造 ほぞ穴深さ
1	五輪塔	火輪	9.7	21.0	19.3	21.2	上にホゾ穴あり 2.8
2	五輪塔	水輪	13.4	20.8	16.3	16.8	下に正方形ホゾ(突起)あり
3	五輪塔	地輪	16.0	28.5	27.7	28.5	上に納骨穴あり 6.5cm
4	五輪塔	水輪	10.6	18.5	18.5	18.7	ホゾ穴なし
5	宝篋印塔	基礎	19.4	29.0	29.3	29.5	ホゾ穴なし
6	五輪塔	水輪	10.3	18.5	10.4	18.4	ホゾ穴なし
7	五輪塔	火輪	16.3	32.5	32.4	32.5	上にホゾ穴あり 4.0cm
8	五輪塔	火輪	10.4	26.5	22.0	25.0	上にホゾ穴あり 3.2cm
9	宝篋印塔	基礎	13.0	25.1	26.4	26.2	上にホゾ穴あり 2.4cm

ほぼ同じものが1点あり、そのほかに同じ石材で寸法が近いもので円形の段を有するものが一点報告され、編年案から1500年代～1600年の範囲に位置づけられる。円形の段を有する基礎は、正面に線彫りで「飯真永給禪門」が楷書で1行刻字され、類似する。

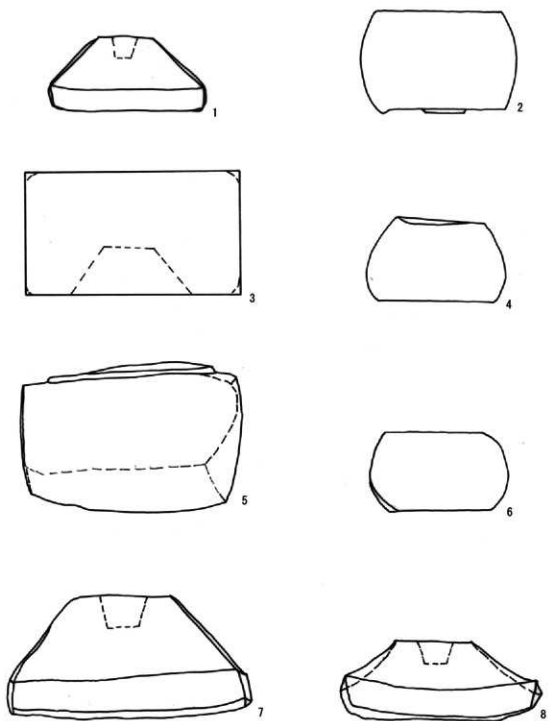
5の宝篋印塔基礎に寸法や形態が類似する資料には、1441年(応永18)銘のある円形の段を有する基礎、1443年(嘉吉3)銘のある単弁反花座を刻む基礎がある。また、干支の紀年銘を有する宝篋印塔の基礎で1498年(明応7)あるいは1558年(永禄元)に比定されている。

さらに5の宝篋印塔の基礎については、やや大型であり比較材料が多い。諫早市多良見町所在の伝円通寺跡の緑泥片岩の宝篋印塔群の基礎にも紀年銘があり、1424年(応永31)銘の寸法は幅35cm高さ24cm、1397年(応永4)銘の寸法は幅31.7cm高さ22.3cm、1474年(文明6)銘の寸法は幅33.3cm高さ19.0cmである。同じ石材であるがやや大きな部類である。また、隣接する西彼杵郡長与町には、寺屋敷跡石塔群があり、緑泥片岩の宝篋印塔群があり、基礎に次のような紀年銘を有する。1391年(明德2)、1440年(永享12)、1462年(寛正3)、1494年(明応3)、1541年(天文10)である。明德2年銘の正面横幅は約31cmである。このため、5の宝篋印塔基礎は、1400年後半～1500年の時代性をもつ可能性がある。

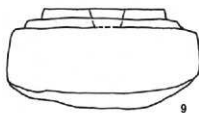
上記の比較検討から山川内遺跡に散布する石塔群は、1400年代後半から1600年初頭までの時代性を想定できる。

本遺跡のような石塔の集中分布は、伊木力川流域ではこの遺跡のみであり、戦国時代前後の有力豪族の墓地と考えられる。中世前期の彼杵庄伊木力に割拠した豪族には伊木力氏が13世紀代の記録から登場するが1363年(正平18)以降は不明である。石塔群は14世紀後半から江戸時代初頭までの伊木力の歴史的空白を埋める考古資料となる。

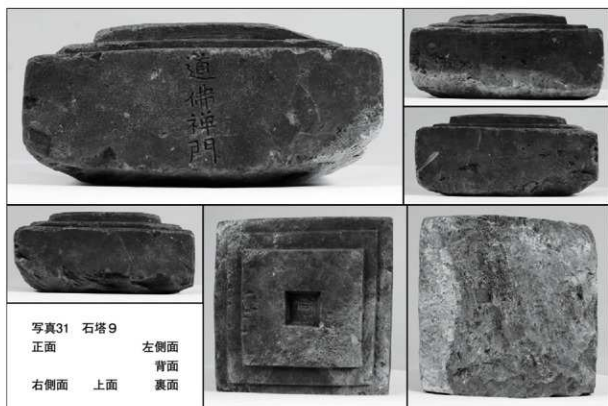
江戸時代初頭頃に位置づけられる第2地点の安岩製の五輪塔2基の他は完全に組み合わせが出来る数量ではないため、第2地点の石塔が建立された時点で、第1・3地点の石塔(基礎と地輪は9基分)は完全に倒伏し、部材が散在していた可能性がある。



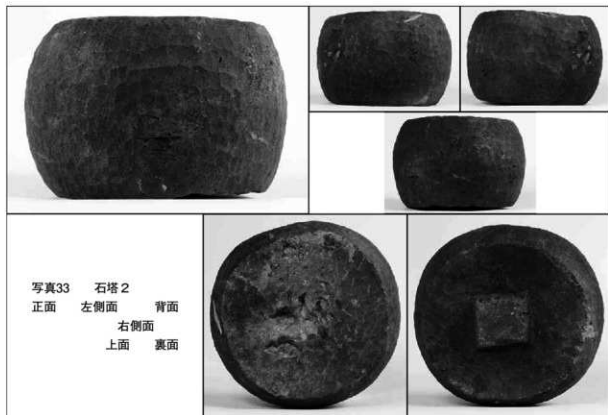
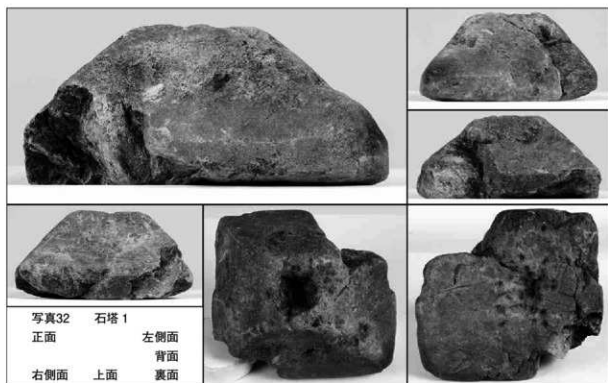
第10図 第1地点石塔1～8実測図(1/5)

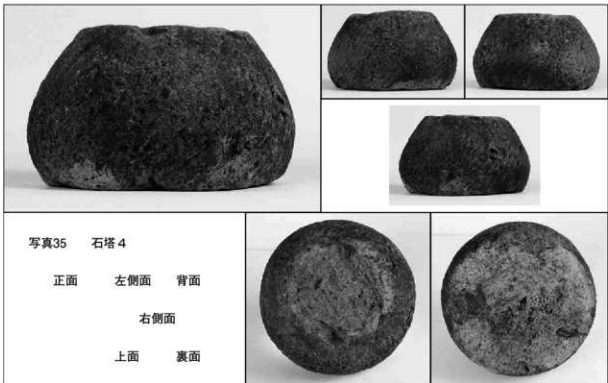
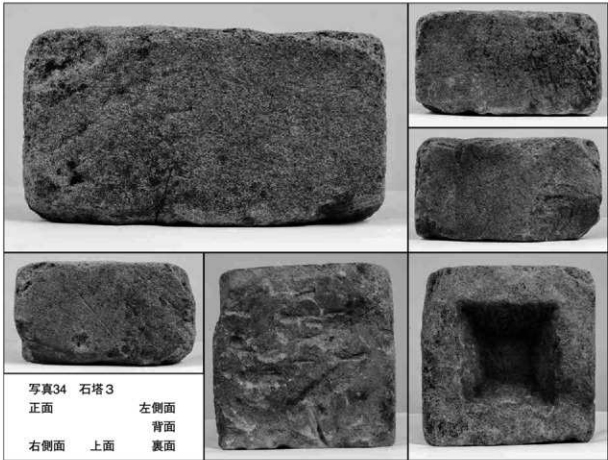


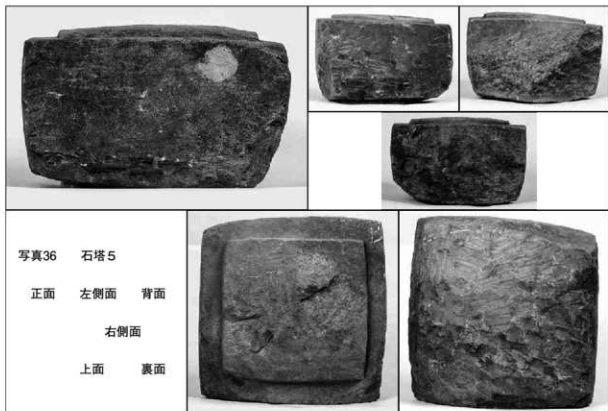
第11図 第1地点石塔9実測図 (1/5)

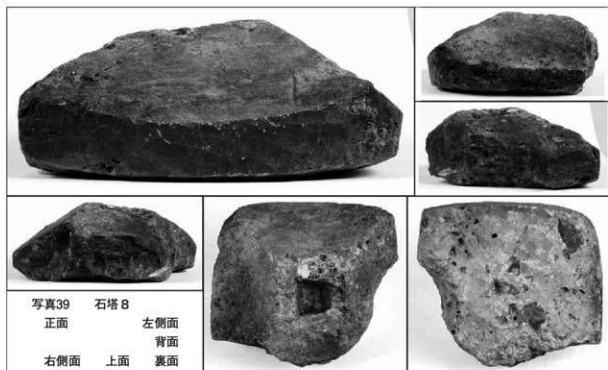
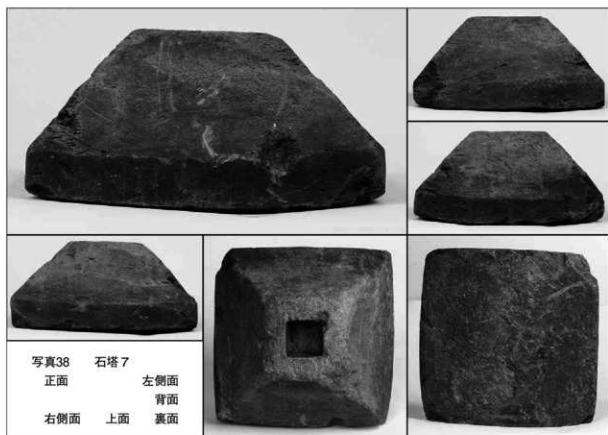












## 第6節 山川内遺跡

### 1 山川内遺跡の概要 (51頁第13図)

山川内遺跡は中世期の石塔が多数分布する墳墓で、南端で明治期の鉄道建設に伴う工事により人骨が多く出土した記録(1971多良見町)がある。今回の調査では旧地形と遺跡範囲として遺物包含層の有無を確認するために令和3年度に8箇所、同4年度に4箇所の試掘坑を設定した。野川内郷と山川内郷と二つの郷の境界を含み、境界にある谷底には、湧水があり現在でも多くの水が得られる。この泉から南と北には急峻な小道がそれぞれ延びている。

### 2 試掘坑の設定 (第14図)

令和3年度は、東から西へ傾斜する山地裾地形及び隣接する千々石ミゲル墓所推定地のとの間にある谷地形に試掘坑を配置した。東から斜面を上がる小道の北にある尾根上に東から試掘坑2・7・1、小道南側の3段の造成面に試掘坑6・8、さらに南に試掘坑5・4・3を設定した。

令和4年度は遺跡範囲の西側を確認するため遺跡の西端にあたる段々畑に南から北へ試掘坑9・10・11を設定した。また、令和3年度の調査において、五輪塔の部材(火輪)が出土した試掘坑1の西側へ12m且つ約2.5m高位の地点に試掘坑12を設定した。

### 3 基本土層

試掘坑1の1～4層が山川内遺跡の基本土層となる。1層の暗褐色軟質混礫土層は表土、2層の暗褐色土層は近現代の堆積土、3層の明褐色粘質土層で黒曜石片や五輪塔の火輪などが出土する遺物包含層で、4層の明赤褐色粘質土層は遺物が確認されないため地山層となり、上面は遺構検出面である。

試掘坑1の4層は堅く粘性をもつ特徴から千々石ミゲル墓所推定地で確認された地山層に含まれる明赤褐色粘質土に類似する。試掘坑1の4層と同質の土層は、試掘坑6・8・12の4層である。それよりも下位になる明褐色硬質混礫土層が、試掘坑2の2層、試掘坑3・4・5の3層、試掘坑7の2層、試掘坑9・10・11の4層である。試掘坑2及び7付近は土壌の流出が他の地点よりも強いいため、遺物包含層となる上位の土層が確認されない。試掘坑1の3層と同一の土層は、試掘坑6・8・12の3層である。試掘坑12の3層が40cmほどの厚さであり、遺物包含層である3層が試掘坑1の周辺とその南に広めに存在することが確認できた。

### 4 山川内遺跡の旧地形復元 (第15図)

遺跡中央にある「東へ下る尾根地形」は試掘坑1・2・7・12から復元する。第15図に図示した範囲は直線距離37m標高差8mで、西から東へなだらかに下る。試掘坑12の西側に傾斜変換点があり、標高46m以上は急傾斜で、それ以下は緩傾斜となる。標高46m以上はミカン栽培のために段々畑に造成されており、その造成の際に多数の石塔が出土したという伝承がある。遺物包含層は試掘坑1と12とで約40cmの厚さで確認され、尾根の先端に設定した試掘坑2と7とでは、遺物包含層は流出しており、表土下はすぐに地山となる。尾根の南側にある平場に設定した試掘坑6・8でも良好に遺物包含層が遺っていることが確認でき、尾根から南には平坦面が存在し、鉄道付近の谷地形へ変換する。

遺跡南側にある「鉄道に沿う谷地形」は図示した範囲で直線距離約24m標高差7m、西から東に下る。地山となる3層の傾斜もほぼ同じ勾配である。3層の上に堆積する土は造

表11 試掘坑の出土品種別一覧

試掘坑 NO	面積 ㎡	土量 ㎡	層位	点数	種 別	遺物 ID		
1	4.6	3.0	1	8	土師器片1、近代磁器片7	YMK2021-003		
				6	江戸～近代の陶磁器片5、ガラス片1	YMK2021-004		
				5	江戸～近代の陶磁器片5	YMK2021-005		
						小計	19	
			2	8	瓦片1、近現代の陶器2、近現代陶磁器5	YMK2021-006		
			2-3	5	瓦片1、近現代の磁器片4	YMK2021-007		
			3	2	灰色の黒曜石	YMK2021-008		
				1	火輪(点取#12)	YMK2021-001		
				1	磁器片(点取#13)	YMK2021-002		
						小計	17	
2	4.0	1.3	1	5	近現代の陶磁器片	YMK2021-009		
				1	近現代の磁器片	YMK2021-010		
3	2.1	1.2	1	5	釘片1、現川片1、磁器(江戸か)3	YMK2021-017		
				2	6	近現代の磁器片	YMK2021-011	
4	4.0	1.8	1	5	江戸1、近現代陶器2、近現代磁器2	YMK2021-012		
5	4.0	2.0	2	12	レンガ片2、土師器片1、近現代陶磁器片9	YMK2021-013		
6	2.0	1.1	1	10	瓦片1、近現代の磁器片3、時期不明土器6	YMK2021-014		
				3	3	黒曜石1(薄い剥片)、縄文土器小片2	YMK2021-015	
7	2.1	0.4			出土品無し			
8	2.0	1.0	1	4	黒曜石1、近現代の磁器2・陶器1	YMK2021-016		
9	1.1	2.2			出土品無し			
10	1.1	2.2	2	2	近代磁器片	YMK2022-001		
					2	残瓦片	YMK2022-002	
11	0.7	1.4	1	11	網文磁器片1 土師器片1 江戸磁器片2 近代陶磁7	YMK2022-003		
12	0.6	1.2			出土品無し			

成による盛土で、明治期の鉄道掘削及びミカン栽培のための造成である。試掘坑3と試掘坑4との間に1.5mほどの段差があるが、土層の状況から畑造成にともなうものである。この地点は西側上方に存在する湧水点からの出水が想定され、それにより何度も表土が流出し掘削された痕跡が確認された。現在、湧水点からの水流は線路地下に設置された暗渠を通り、石造りの溝を流れている。線路開削前の旧地形として、千々石ミゲル墓所推定地との間に湧水点からの水流による小さな谷が存在したことが確認できた。

「遺跡北側斜面の地形」は図示した範囲で直線距離25m標高差11m、南から北に下る。試掘坑9・10はミカン栽培による段造成で1～2mの段差があり、上記の谷地形よりもやや強い勾配となる。試掘坑10と11とは直線距離8m標高差は6mで、標高46m以上の傾斜

と比べ急な勾配を示し、不自然な地形であるため人工による造成要因を想定できるが、その説明は今後の課題である。

### 5 遺構・遺物

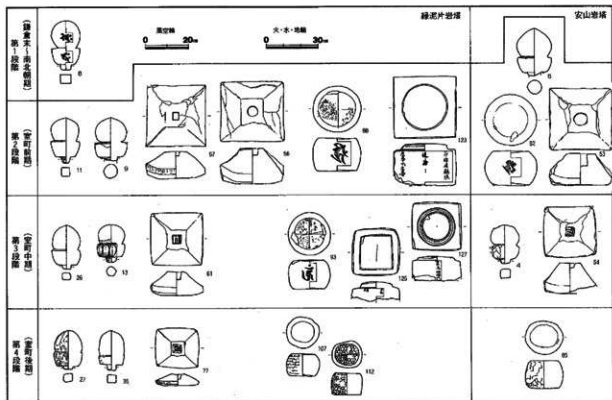
遺物は、試掘坑1で石塔を1点、遺構は試掘坑6でP i tを1基、他の試掘坑では検出されなかった。まず、石塔が検出された試掘坑1の状況を具体的に報告する。

調査前に野口氏への聞き取り調査で「榊の脇に石塔があり、祖父がお参りしていたらしい」との証言を得た地点に試掘坑1を設定した。2層上面で平石を確認、その周囲に同じ高さで小礫を複数配置した遺構を確認した。検出地点と平石の状況、お参りをしていた時期が現代で、確認した高さが表土下10 cm程であることを考慮すると地元住民の聞き取りにあるという平石と同一のものである。

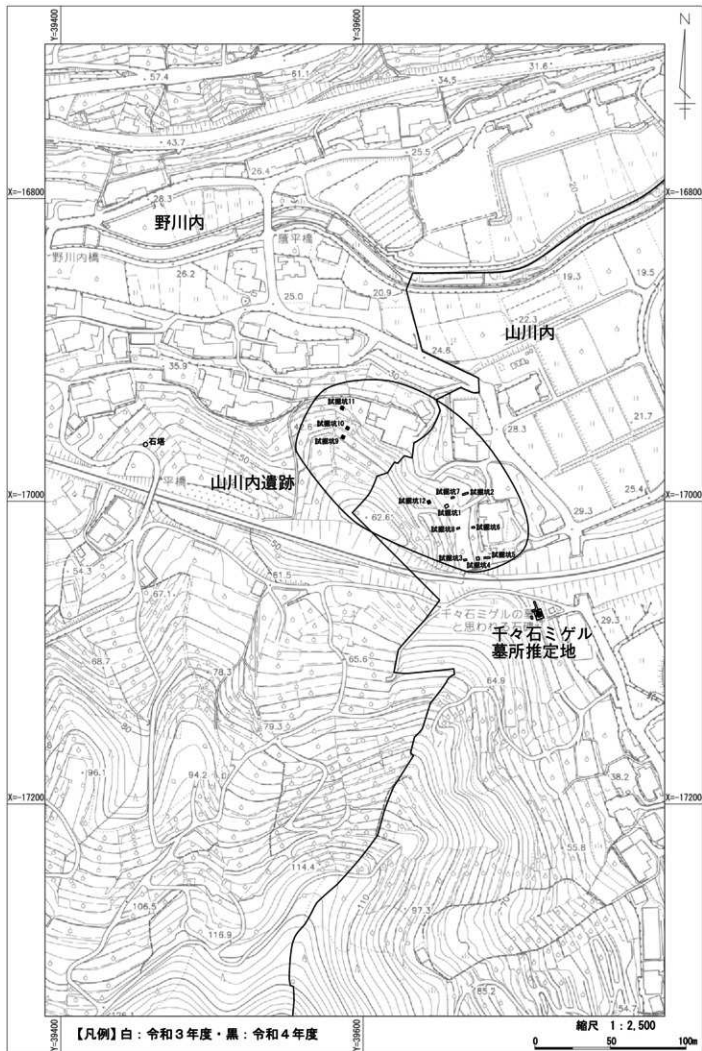
3層からは五輪塔の部材（火輪）が出土したほか、近世の磁器片、黒曜石片および土器片が出土している。火輪の出土は、当地に石塔類が存在していたことを示すものである。

(写真41)

第23図・写真40は試掘坑1で出土した石塔の実測図と写真である。明るい灰色の緑泥片岩製の火輪で、幅23.8 cm高さ7.8 cmで上面に方形のホゾ穴が穿孔される。第12図の大村館跡地の編年案に照合すると77に形態や大きさが類似しており、室町後期の年代が想定できる。

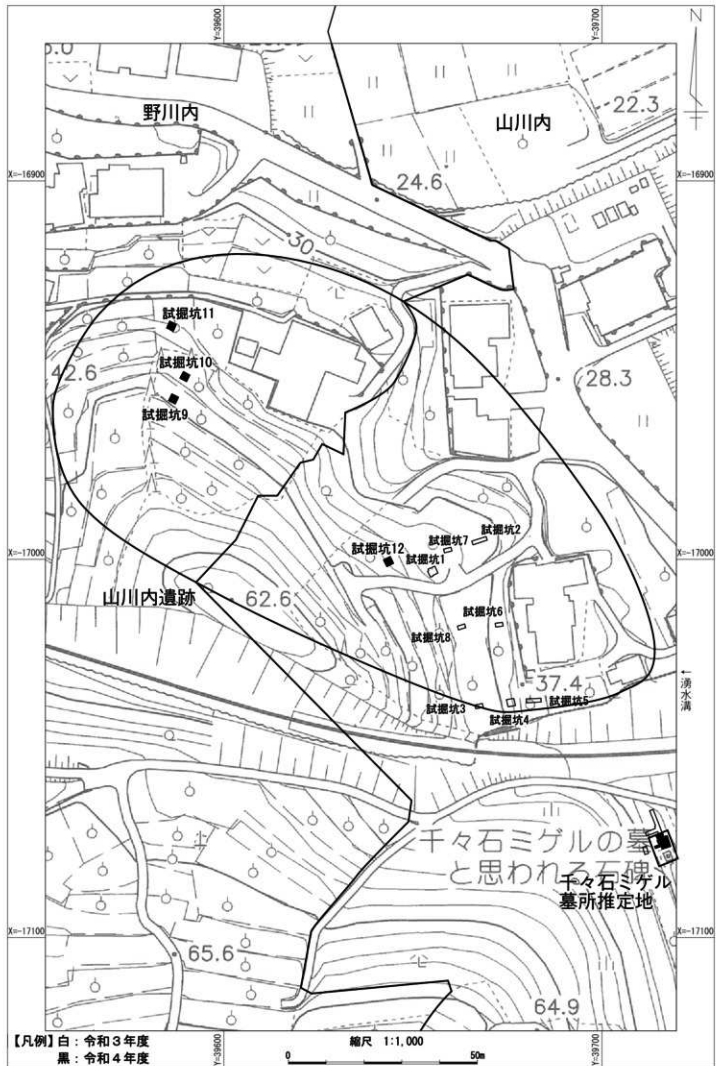


第12図 大村館跡地出土五輪塔の編年案（1998 大村市教育委員会『大村館墓地』より）

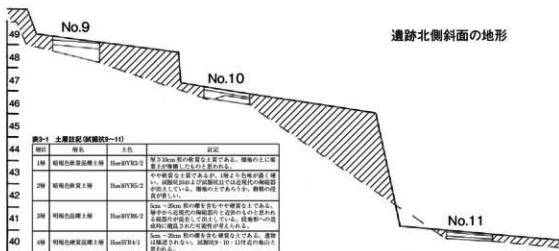
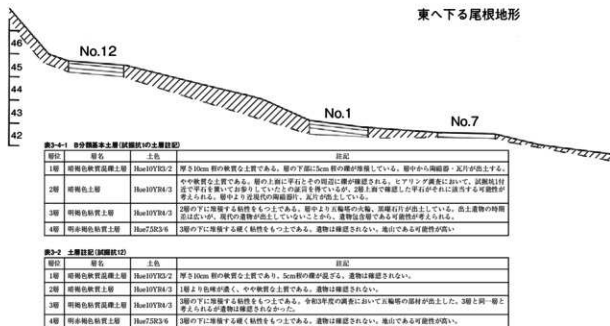
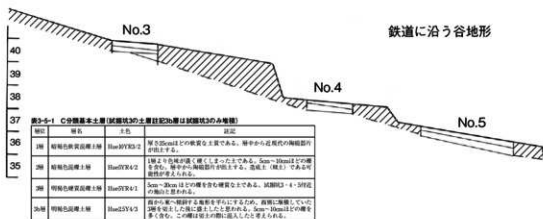


第13図 試掘坑配置図 1/2,500

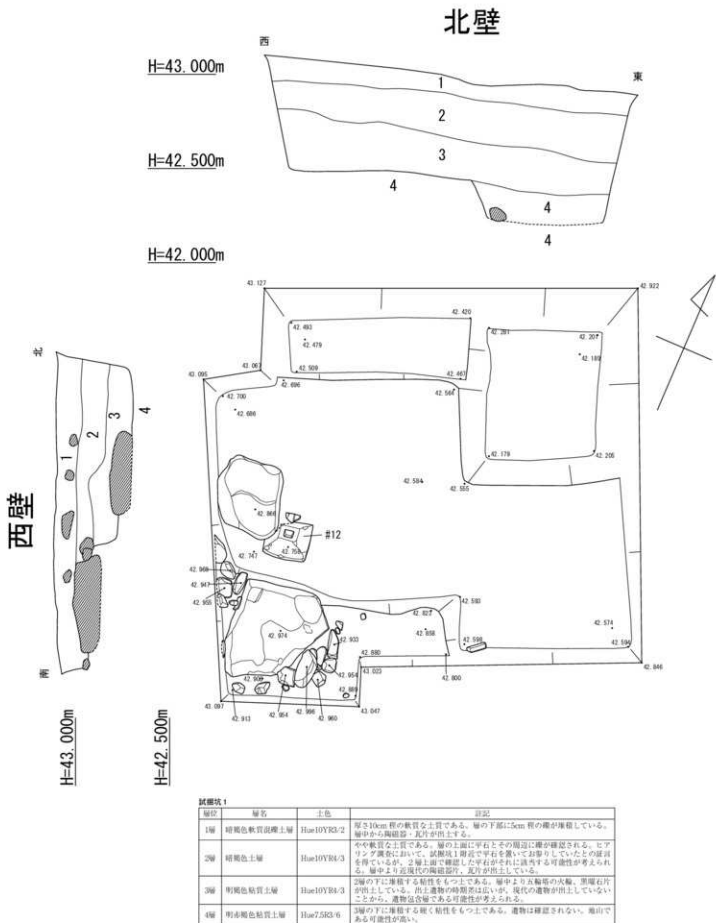




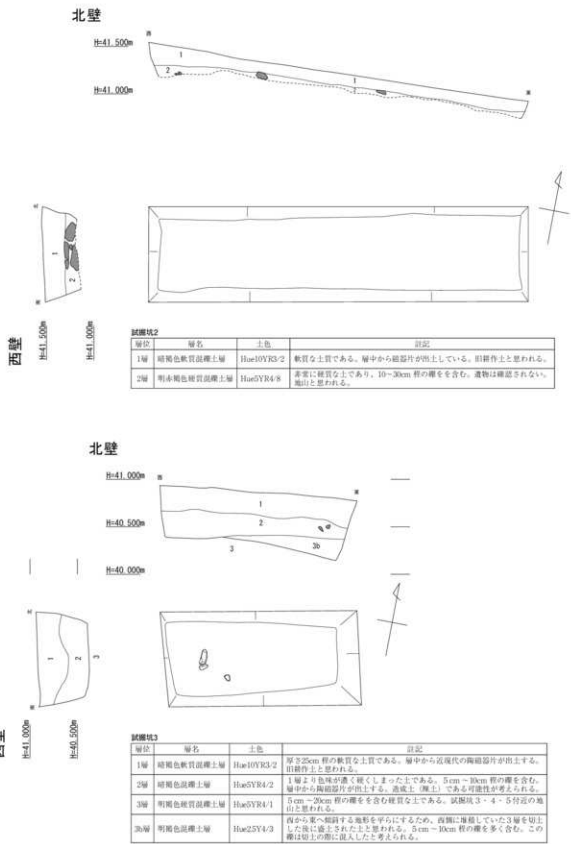
第14図 試掘坑配置図 1/1,000



第15図 地形状況概念図 (1/150) (No.3などは試掘坑番号)

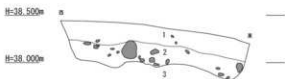


第16図 試掘坑1詳細図 1/20



第17図 試掘坑2・3詳細図 1/40

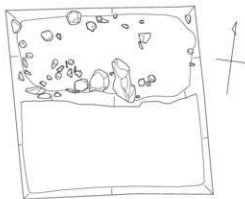
## 北壁



## 西壁

H=38,500m

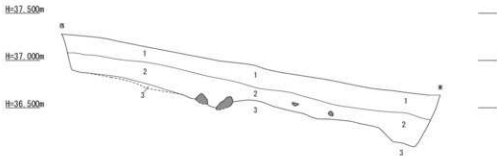
H=38,000m



試掘坑4

層位	層名	土色	記述
1層	暗褐色軟質泥礫土層	HaeSYR3-2	厚さ20cm程の軟質な土質である。層の下部に4cm程の礫が埋積している。層中から近現代の陶磁器片が出土する。旧耕作土と思われる。
2層	暗褐色泥礫土層	HaeSYR4-2	1層より土味が濃く硬くしまった土である。10cm～30cm程の礫を含む。遺物は確認されていない。造成土（埋土）である可能性が考えられる。
3層	明褐色硬質泥礫土層	HaeSYR4-1	5cm～20cm程の礫を含む硬質な土である。試掘坑3・4・5付近の地山と思われる。

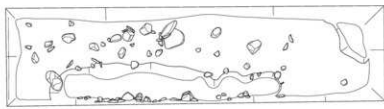
## 北壁



## 西壁

H=37,500m

H=37,000m

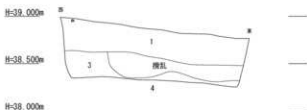


試掘坑5

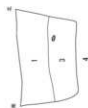
層位	層名	土色	記述
1層	暗褐色軟質泥礫土層	HaeSYR3-2	厚さ15cm程の軟質な土質である。3cm程の礫を含む。旧耕作土と思われる。
2層	暗褐色泥礫土層	HaeSYR4-2	1層より土味が濃く硬くしまった土である。層中から煉瓦片・陶磁器片が出土する。10cm～30cm程の礫を含む。造成土（埋土）である可能性が考えられる。
3層	明褐色硬質泥礫土層	HaeSYR4-1	5cm～20cm程の礫を含む硬質な土である。試掘坑3・4・5付近の地山と思われる。

第18図 試掘坑4・5詳細図 1/40

## 北壁



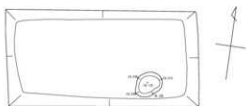
## 西壁



H=39,000m

H=38,500m

H=38,000m



試掘坑6

層位	層名	土色	記述
1層	暗褐色軟質面礫土層	Hae10YK3-2	厚さ30cm程度の軟質な土質である。層中から陶磁器片・瓦片・土器片・土師器片が出土する。旧耕作土と思われる。
3層	明褐色粘質土層	Hae10YK3-4	粘質をもつ土である。層中から黒曜石片・土器片が出土している。土質は試掘坑1の3層に近い。近現代の遺物は出土していないことから遺物包含層である可能性が高い。
4層	明赤褐色粘質土層	Hae7.3R3-6	2層の下に厚積する硬く粘質をもつ土である。地山である可能性が高い。上面からPbが検出されている。

## 北壁

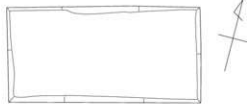


## 西壁



H=43,000m

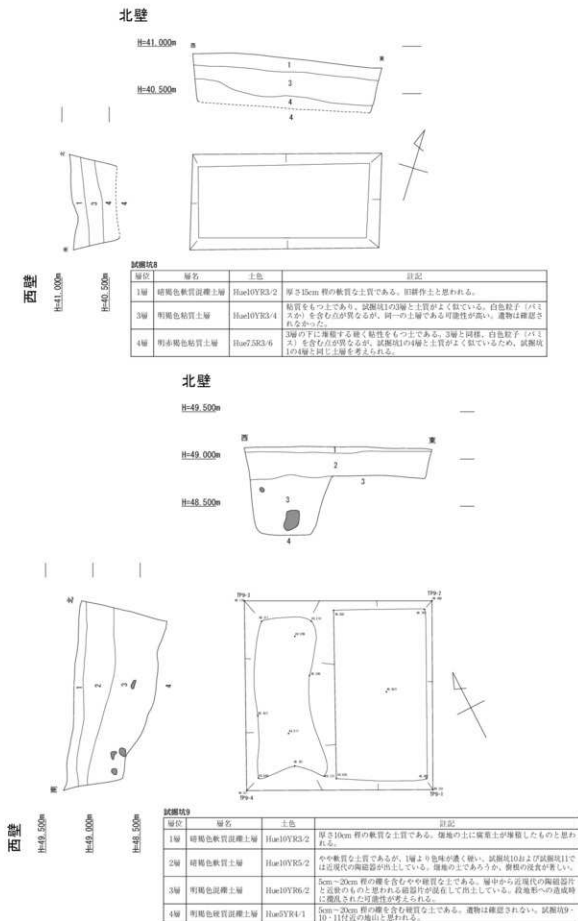
H=42,500m



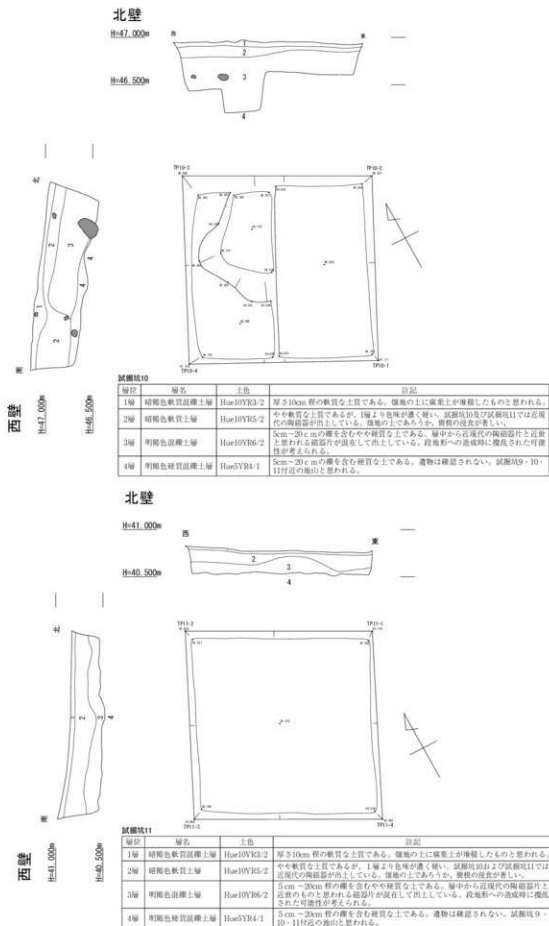
試掘坑7

層位	層名	土色	記述
1層	暗褐色軟質面礫土層	Hae10YK3-2	軟質な土質である。層中から現代の磁器片が1点出土している。旧耕作土と思われる。
2層	明赤褐色粘質面礫土層	Hae5YR4-8	非常に硬質な土であり、30-30cm程度の礫を含む。遺物は検出されない。地山と思われる。

第19図 試掘坑6・7詳細図 1/40



第20図 試掘坑8・9詳細図 1/40



第21図 試掘坑10・11詳細図 1/40

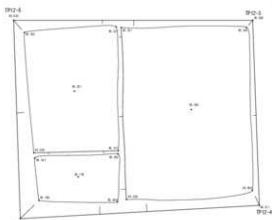
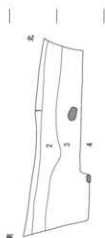


北壁

H=46,000m

H=45,500m

H=45,000m



西壁

H=46,000m

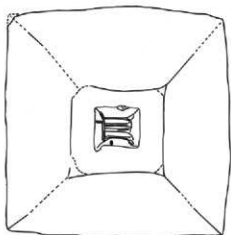
H=45,500m

H=45,000m

試掘坑12

層位	層名	土色	記号
1層	暗褐色軟質泥礫土層	Hae10YR3/2	厚さ10cm程度の軟質な土質であり、5cmほどの隙が見ざる。遺物は確認されない。
2層	暗褐色軟質土層	Hae10YR4/3	1層より色味が濃く、やや軟質な土質である。遺物は確認されない。
3層	明褐色粘質泥礫土層	Hae10YR4/3	3層の下に埋積する粘性をもつ土である。令和3年度の調査において五輪桶の部材が出土した3層と同一層と考えられるが遺物は確認されなかった。
4層	明赤褐色粘質土層	Hae7.5R3/6	3層の下に埋積する硬く粘性をもつ土である。遺物は確認されない。地山である可能性が高い。

第22図 試掘坑12詳細図 1/40



第23図 試掘坑1出土の石塔実測図1/40



写真40 試掘坑1 出土石塔

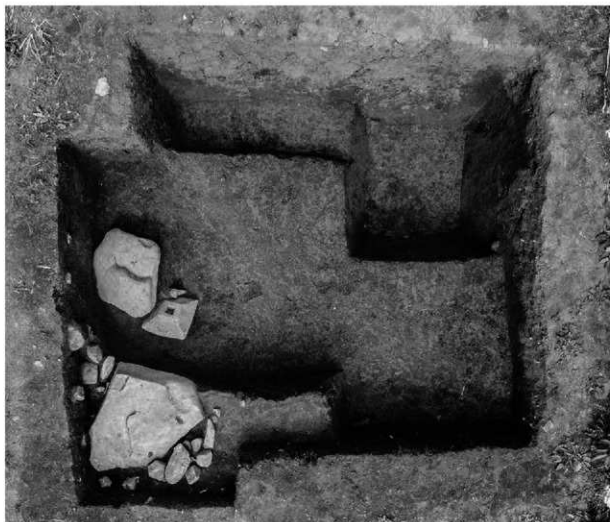


写真41 試掘坑1完掘状況 上：真上から（上が北） 左下：南東から 右下：北から



写真42 試掘坑1北壁オルソ



写真43 試掘坑1西壁オルソ



写真44 試掘坑2完掘状況(西から)



写真45 試掘坑2完掘状況西壁



写真46 試掘坑3 完掘状況と北壁



写真47 試掘坑4完掘状況(東から)



写真48 試掘坑4 西壁



写真49 試掘坑5完掘状況(西から)



写真50 試掘坑5 西壁



写真51 試掘坑6 Pit 確認状況

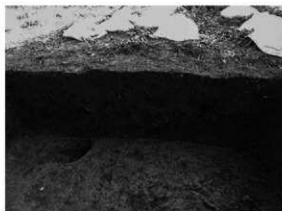


写真52 試掘坑6 Pit 完掘・南壁



写真53 試掘坑7完掘状況



写真54 試掘坑7 西壁



写真55 試掘坑8 完掘状況



写真56 試掘坑8 北壁



写真57 試掘坑9 完掘状況



写真58 試掘坑9西壁オルロン



写真59 試掘坑10 完掘状況



写真60 試掘坑10 西壁オルソ



写真61 試掘坑11完掘状況 (東から)



写真62 試掘坑11完掘状況 (西から)



写真63 試掘坑12完掘状況 (東から)



写真64 試掘坑12 (北東から)



写真65 試掘坑12西壁オルソ

## 第7節 千々石ミゲル墓所推定地

### 1 これまでの調査履歴

千々石ミゲル墓所推定地の地上標石である「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」は、1971年（昭和46）『多良見町郷土誌』及び1995年（平成7）『多良見町郷土誌』において、「玄蕃さん」及び「ゲンバさん」と紹介された自然石の板碑である（第13図）。具体的には「千々石玄蕃充」という人物名と「寛永九年」という1633年の紀年銘の刻字についてクローズアップして紹介している。

2005年（平成17）『千々石ミゲルの墓石発見』において大石一久氏は、千々石玄蕃が千々石清左衛門の子息（四男）であること、そして、紀年銘の左右にある法名「自性院妙信霊」と「本住院常安霊」の2人が、千々石玄蕃の父母であることを発表した。墓碑に刻まれた1633年（寛永9）に亡くなった千々石清左衛門は、戦国時代に現在の雲仙市で活躍した千々石城主千々石直員の次男として1569年（永禄12）に生まれた。その後、天正遣欧使節の4少年のうちの1人の千々石ミゲルとして、1582年（天正10）に長崎から旅立ち、帰国後の1591年（天正19）に天草でイエズス会に入会するも、1601～03年（慶長6～8）イエズス会を脱会し、その後、名を改め千々石清左衛門として大村藩へ仕えた人物である。この発見から18年が経過する現在、大石氏の論考に反論する研究等は無いことから、石碑に刻まれた人物が千々石清左衛門夫妻であることは、ほぼ定説となっている。

この発見により、それまで「玄蕃さん」と呼ばれていた石碑は「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」と呼称されるようになり、行政により案内表示や説明板が設置され、伊木力地域の文化財として親しまれるようになり現在にいたる。

千々石ミゲル墓所推定地の発掘調査はこれまでに4回実施されている。2022年発行「千々石ミゲル夫妻伊木力墓所」パンフレット等を参考に紹介する。2014年（平成26）に行われた第1次調査では、墓石周囲の土砂が除去され、一辺2.8mの切石を組んだ方形基壇が検出され、瓦の集積、高さ110cmほどの自然石の細長い石碑（無銘）1基と自然石の小型石碑2基、敷石遺構等が新たに検出された。2016年（平成28）に行われた第2次の発掘調査では、「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」の基壇内側の東側を掘り下げ、集石遺構を確認したが、安全が確保できないために作業が中止、翌年に延期された。

2017年（平成29）に石碑のある土地は、長崎県遺跡地図に「千々石ミゲル墓所推定地」という名称で近世の遺物包含地として登載され、文化財保護法による周知の埋蔵文化財包蔵地に登録された。

同年8月20日～9月19日の期間で、千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会による第3次調査（学術目的）では石碑が移動され、石碑の下にある方形石組基壇は明治期の構築物であることが明らかになった。そして、墓石の地下遺構として石蓋の土坑1基の中から長持を棺に転用した未盗掘の埋葬痕跡（1号墓坑）が発見され、人骨と板ガラスやガラス玉等の副葬品が副葬された当時の位置を保ったままの状態で見出された。出土した人骨の分析から、膝を折り曲げた側臥屈葬の状態の女性が埋葬されていたことが判明した。首元付近で出土した板ガラスは半分ほどに割れた状態で、ガラス玉は5種類ほどの色や形がある。いずれもキリシタン信仰遺物の一部と思われるが、信仰具として完全な形に復元できるまでの数量は出土していないため、部分的に欠けた状態の信仰具が副葬されたことが明らかである。長持は鍵をかけられたままの状態でも方形土坑に埋納され、有段の土坑肩部に板石

3枚が並べられ、その上に礫が敷き積まれるという厚重な埋葬の仕方である。発掘調査後は、出土品類は諫早市美術・歴史館へ寄託後に保管・展示され、検出遺構は真砂土等により埋め戻され保存措置が行われた。

2021年（令和3）8月23日～9月28日の期間で、千々石ミゲル墓所調査プロジェクトによる第4次発掘調査（学術目的）が実施された。1号墓坑の南側に2号墓坑が発見され、さらに西側で最初に石碑が建立された痕跡と調査区全域において整地層が確認された。2号墓坑は素掘りの長方形の土坑で、多数の鉄釘を利用した木製の棺に男性を埋葬したことが確認されたが、副葬品は検出されなかった。整地層は石碑の建立と同時に、調査区外側に広がることを確認された。1号墓坑及び2号墓坑は整地層を切り込む形で掘り込まれているが、墓所としての造成、ある程度の広さの整地作業、石碑の建立から2人の人物の埋葬までが、時間的に短い期間で完了していることが確認された。なお、2021年（令和3）調査後も同様に、出土品類は諫早市美術・歴史館へ寄託後に保管・展示され、検出遺構は真砂土等により埋め戻され保存措置が行われた。

これまでの調査により千々石ミゲル墓所推定地は、17世紀代の大型の自然石の石碑を伴う保存状態の良い墓地遺跡であり、その被葬者は石碑にある文字や大村藩の文字資料から千々石清左衛門とその妻である可能性が極めて高いことが判明している。また、第1次から第4次までの発掘調査によって、墓碑と地下遺構とが強く関係し、未盗掘であり、人骨や副葬品が検出されるなどから遺跡としての状態は非常に良好であることが確認された。

今回の第5次となる調査は、千々石ミゲル墓所推定地の石碑西側にある段差の地下の状況と北側平面での遺構の有無を確認するため、2021年度（令和3）に調査区1と2の2箇所を設定し、2022年度（令和4）には調査区1を部分的に再度発掘してその西側を拡張する保存目的の発掘調査を行った。

## 2 地形の現況（西から東へ下る山地斜面裾）（第24図）

千々石ミゲル墓所推定地は、南西約1.3kmにある標高363mの猪見岳の尾根から派生する東向き山地斜面の裾部にあたり、西から東へ下る斜面の下部の標高38m付近に位置する。諫早市作成の2,500分の1地形図が示す38m～52mの傾斜角度は複数あり、38m～42mが23度、42m～48mが38度、48mから52mが22度である。また、遺跡のすぐ西の標高40m～46mに東へ開く小さい谷地形がある。50m～56mの等高線が同じ間隔となるの地点は36度で、この角度が山地斜面の自然傾斜と考えられる。

38mから42mまでには平坦面が二段あり、石碑の建つ平坦面1とその上段のミカン畑に利用された細長い平坦面2である。平坦面1は南北20m東西5mの長方形で、平坦面2は南北23m東西3mの長方形で北側に傾斜する。平坦面1と2の段差は50cmから2mほどの高低差で部分的に石垣が確認できる。

遺跡周辺は上記の傾斜の分析にみるように傾斜が一定しない点、そして平坦面が二面あり、その間に石垣が存在する点から、人工的な造成が行われたことが明らかである。要因の一つは第4次調査で判明した墓地の整地を伴う造成行為であり、その造成範囲を確認することが今回（第5次）の調査の目的の一つである。

明治期以降の土地履歴は、千々石ミゲル墓所推定地は明治期から現在まで地目が墓地で、本書で報告する発掘調査を行った北側と西側の地目は明治前半から山林、1975年（昭和50）代に畑（＝ミカン）に変更される。土地履歴から明治期の景観を復元すると、墓地で

ある千々石ミゲル墓所推定地より南はミカン畑、北と西は山地（山林）で、千々石ミゲル墓所推定地が景観の変換点となる。

その後、昭和期になり北側がミカン畑に改変され、2004年（平成16）に多良見町（現諫早市）が見学者の休憩用地として購入、東屋や生垣、説明板などが整備され現在に至る。東屋と石碑のある平坦面とでは3mほどの段差があるが、工事当時の写真と比べて段差の変更は行われていない。今回の発掘調査は、この市が所有する石碑北側の土地を中心に試掘坑を設定した。

### 3 試掘坑設定（第24～第28図）

平坦面1の北側、石碑が建てられている地点の北側に南北に長い「調査区1」を設定し、上段の平坦目2に「調査区2」を、そして「調査区1」西側の斜面に「斜面調査区」を設定した。調査区1は、第3次調査において3号墓と報告された集石土坑について平面形態の確認、それより北側での遺構の有無の確認を目的に発掘調査を行った。平坦面2に設定した「調査区2」と「斜面調査区」とは旧地形の状況の把握と造成範囲の確認を目的に発掘調査を行った。

2021年度（令和3）は、調査区1で整地層である2層とその下から複数の土坑（土坑1～4）を検出し、その北側で整地層と同じ標高となる地山層及びび岩盤を確認できた。（第25図：検出遺構平面図、第26図：土層図）

土坑1と土坑2とでは検出面で平面方形となる集石遺構を確認し、その上で土師器小皿や磁器片などを検出し、それぞれ座標と標高の基本的な情報を記録し取り上げた。いずれの土坑も上部に地山に含まれる礫を充填して、その上場は水平に整えられていた。令和3年度はこれら表面検出までの調査で完了した。

この結果について、調査指導委員会により「調査区の拡張と土坑上面の精査による平面形態と構造の把握」という現地指導を得たため、いったん埋め戻し、次年度に追加の調査を計画し実施した。

2022年度（令和4）は調査区1の西側を拡張し、土坑1～4について検出面での精査を行った結果、3号墓・4号墓という平面方形の2基の墓坑を確認した。3号墓には平面L字型の小試掘坑を1箇所、4号墓には北側半分を30cmほど掘り下げ構造を確認した。（第27図：遺構配置図、第28図：土層図）

さらに3号墓の精査時に墓坑北辺において碗類を主とした複数の磁器を埋納した小土坑を検出し、座標などの情報を記録して取り上げた。検出した遺構の詳細については「5 千々石ミゲル墓所推定地北側で検出された遺構」の項（79頁）で紹介し、検出し取り上げた出土品の詳細については「6 千々石ミゲル墓所推定地北側で検出された遺物」の項（81頁）で紹介する。

### 4 基本土層と2面の平坦面の状況（第26図、第28図、第29図）

まず、調査区1と斜面調査区で確認された土層堆積の状況を解説する。

1層である暗褐色硬質土層（1a・1b・1c）は調査区の表土で、ミカン栽培に伴う造成土と考えられる。また、試掘坑1の中間部分西壁では1a層を掘りこむ攪乱層が存在し、東壁では1a層の下にあり1b層を掘りこむ攪乱層が確認され、1a層は非常に新しい表土である可能性があり、試掘坑1の北側半分では良好な土層堆積が確認できなかった。この地点は第3次調査及び第4次調査では、石碑の仮置き場など発掘調査のバックヤード



として利用された部分である。

2層である暗赤褐色硬質土層は赤色の粘質土がブロック状に混じるやや軟質の土で、調査区1では均質ではないが面的に分布し、斜面調査区では部分的に薄い堆積が確認できた。南北方向の試掘坑の東西壁で2層の分布する範囲が確認でき、その範囲は土坑6の南側までであることが判明した。2層はその色調と性質及び分布する範囲から、第4次調査で確認された整地層と同一の目的をもつ土層である。試掘坑の西断面で2層を観察すると第4次調査の整地層と比べやや軟質であり異質の土層である。しかし、東断面では、第4次調査の整地層とはほぼ同質の土層である。3号墓と4号墓は西側断面に近い2層の下で検出された。このため、2層は石碑の建立と同時期となる整地層である部分もあるが、3号・4号墓周辺を覆う2層は新たな墓坑を埋設する際に整地された土層で、当初の整地層に使われていた暗赤褐色硬質土を用いている。そのため両者の面的な判別は難しい。

3層である暗褐色土層(3a・3b・3c)は斜面調査区に分布する土層で、斜面の平坦な部分と平坦面1に部分的に確認できる。3層は2層の上に堆積することから江戸時代を通じて堆積した土層と考えられる。

4層である暗赤褐色硬質土層は3層及び2層の直下であり、斜面調査区では2段の段状に造成された痕跡が確認できる。この2つの平坦面の間には、斜面調査区において0.6m未満の幅の狭い平坦面があり、現在の石垣との位置の関係から、石垣の基礎石を置くための細長い平場の痕跡と考えられる。

なお、斜面調査区の3a層と3b層は炭化物を多く含み、1c層が堆積する直前に焼却行為が行われたことを示しており、ミカン畑に造成される際の樹木伐採と焼却行為の痕跡と考えられる。

調査区2の土層堆積は南北方向が水平に堆積し、東西方向はやや東に下る緩い傾斜堆積を示す。

1層である淡褐色混雑土層は10cmほどの礫を含むややわらかい土層で、南から北に傾斜しており、ビニール片などが混ざる。

2層である暗褐色混雑土層は5～10cmの礫を含む土層で、水平に堆積する。これらの1・2層はミカン栽培による造成土と考えられ、西側の斜面上部からの流土を利用した埋土である。

3層である暗褐色硬質混雑土層は15cmほどの礫を含むやや硬質な土層である。水平な堆積で層中から江戸期の磁器が出土したが、調査区2の掘削深度が約80cmになり作業の安全を考慮するため、それより下の掘削を停止した。調査区2の3層は、斜面調査区の最上段の4層直上の土層と共通点があり、同一の土層であることを確認した。このため、調査区2で確認される3層は、斜面調査区の最上段の標高38.5m付近まで約50cm堆積しており、斜面調査区最上段では薄くなることが確認され、西側斜面上部からの自然流土による堆積作用に左右された可能性が高い。

基本土層の中で江戸期以前の遺構検出面となる土層は調査区1の2層下面、江戸時代の遺物包含層となる土層は調査区2で確認された3層である。

現在の平坦面1の表土は標高38m付近で、平坦面2の表土は標高39.5m付近である。調査区1北壁、調査区2北壁、斜面調査区南壁等の土層の状況から、江戸時代の造成による平坦面1と2との状況を復元する(第29図)。調査区1南側サブトレ南壁と斜面調査区南

壁とは約4m離れているが、江戸時代の表土の高さで、平坦面1は標高37.5m付近で整地層が旧表土となり、平坦面2は標高38.5m付近が旧表土となり、平坦面1の東西幅は約6m、平坦面2の東西幅は4mで、その間には石垣が存在した。復元した図面で確認すると、平坦面1における旧表土と現在の表土との高低差は約50cm、平坦面2における旧表土と現在の表土との高低差は約1mとなる。平坦面2は堆積が厚くなるのは、谷地形による流出作用によって3層が堆積した結果で、平坦面1は墓所としての維持・管理が江戸時代から明治まで継続され、清掃などの環境整備が繰り返された結果、3層の堆積が抑えられたことが明らかである。



写真66 指導委員会現地視察



写真67 斜面調査区 南壁のオルソ画像

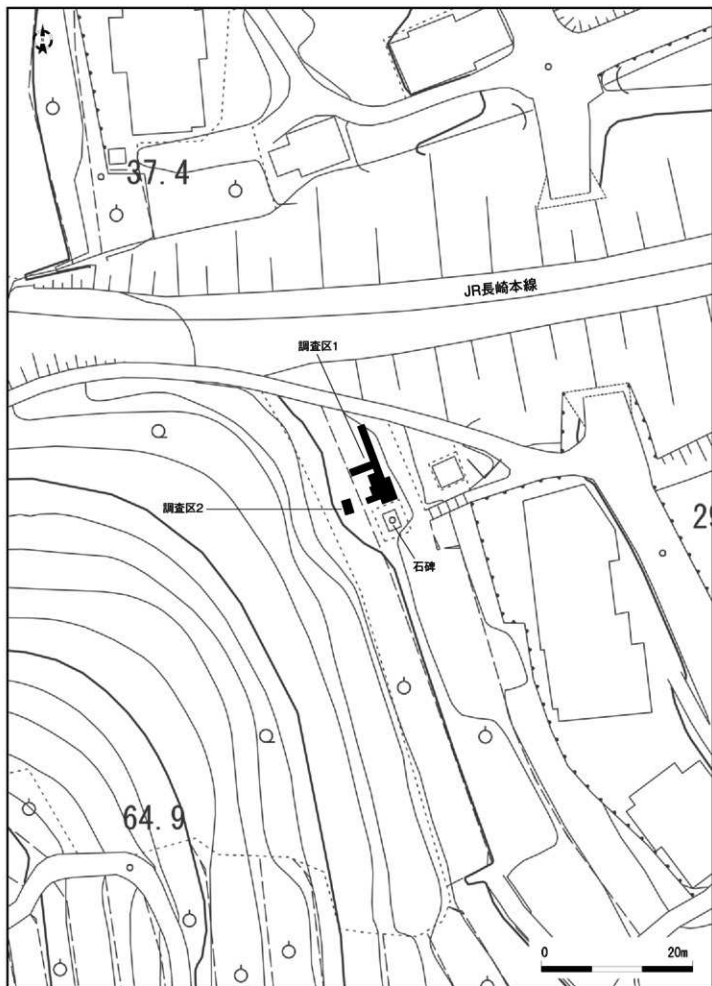
写真68 調査区1東側北壁オルソ画像



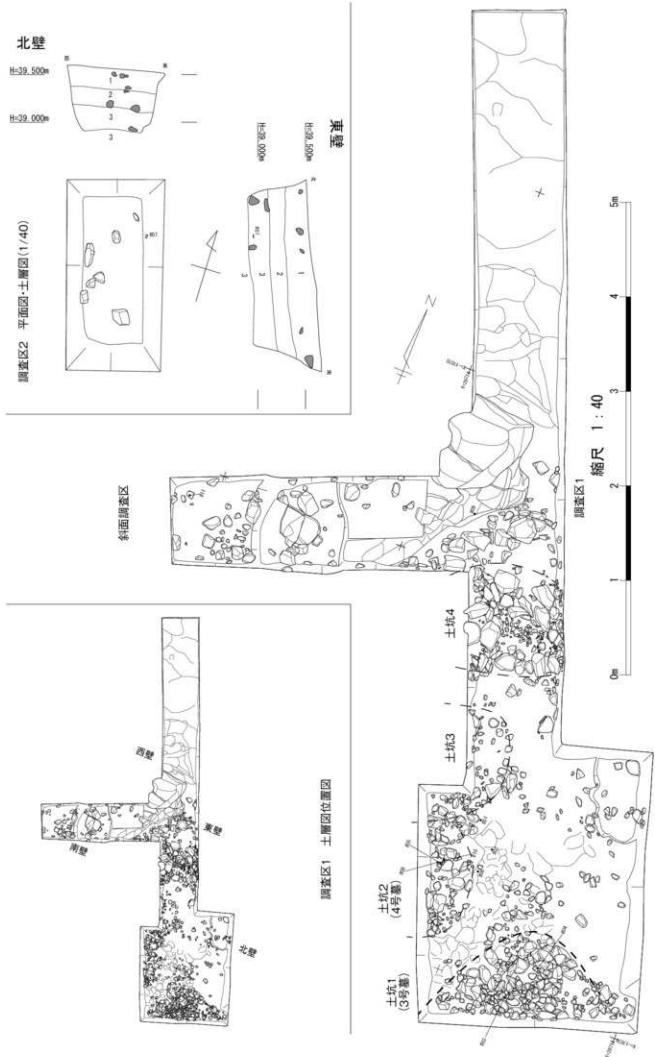
写真69 調査区1 西壁オルソ画像



写真70 調査区1 東壁オルソ画像



第24図 周辺地形図と調査区配置図 1/500



第25図 令和3年度平面図 1/40

調査区	層名	土色	H52
1a層	暗褐色粘質土層	Hm5YR6/2	10
1b層	暗褐色粘質腐土層	Hm5YR4/2	15
1c層	暗褐色粘質腐土層	Hm5YR6/2	20
2層	暗赤褐色粘質土層	Hm6.5R3/2	25
3a層	暗赤褐色土層	Hm2.5YR3/1	30
3b層	暗赤褐色土層	Hm2.5YR2/1	35
4層	暗赤褐色土層	Hm2.5YR3/1	40

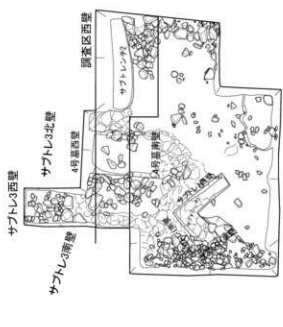


第26図 令和3年度土層図 1/40



調査区1 北壁 北壁土層図(1/40)

調査区1 東壁 東壁土層図(1/40)



0m 1 2 3 4 5m

千々石ミカル墓所推定地 令和4年度調査土層図位置図

斜面調査区



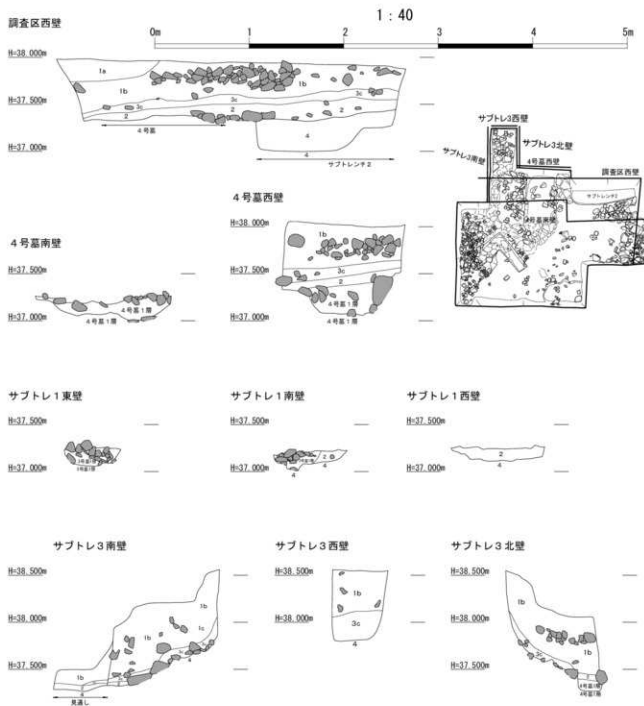
+

縮尺 1:40



+

+



層位	層名	土色	注記
1a層	暗褐色硬質土層	Hae5YR4/2	千々石ミゲル墓所推定地に調査区1の南側に堆積する表土であり、非常に硬く締まっている。層中には近現代の陶磁器・瓦片が多く確認されている。近代以降の造成土と考えられる。
1b層	暗褐色硬質混雑土層	Hae5YR4/2	5cmから30cm程度の層を多く含む細い土である。層中に近現代の土に混ざって江戸期の磁器片が確認される。元々は江戸期に造成した際の上で近代の造成時に攪乱された土である可能性が考えられる。
2層	暗赤褐色硬質土層	Hae7.5R3/2	赤色の粘質土がブロック状に混じる。やや軟質な土である。層中からは江戸期の磁器片、土師器片が出土している。土層の特徴が過去年度調査における「A層」に似ているのが特筆される。同一の土層である可能性が高い。江戸期に墓地とするために造成した際の上である可能性が考えられ、近代の造成が行われる以前に堆積した土と思われる。
3a層	暗黒褐色土層	Hae2.5YR3/1	2層と1b層の間に堆積する土である。層の下部に20cm程度の層が攪乱されているほか、小礫が数多く認められている。鉄鋤を造成した際の雑土と思われる。黒色が強い色調であり、炭化物を多く含むいと考えられる。西側の山の土であるのみで、層中から江戸期の磁器片が出土している。
4層	暗赤褐色硬質土層	Hae2.5YR3/4	2層または1b層の下に堆積する非常に硬質な土である。当地の地山と考えられる。2層よりも色相が強い。
3号墓1層	暗赤褐色混雑軟質土層	Hae10R3/2	3号墓の雑土である。層中からは江戸期の磁器片、土師器片を出土している。墓穴と繋がる際に2層と4層が混ざった土と考えられる。2層よりも色相が強い。
4号墓1層	暗赤褐色混雑軟質土層	Hae10R3/3	3号墓の雑土である。層中からは江戸期の磁器片、土師器片を出土している。墓穴と繋がる際に2層と4層が混ざった土と考えられる。基本色には3号墓1層と同土質性の土層であるが色相がやや弱い。

※土層記述は令和3年度調査後に修補しを行った。

第28図 令和4年度土層図 1/40







写真71 調査区1 完掘 上空写真 右が北



写真72 調査区1 遺構検出状況 右が北



写真73 調査区1 遺構検出 上空写真右が北



写真74 調査区1 土坑3・土坑4 検出東から



写真75 3号土坑土師器小皿検出状況1 北から



写真76 3号土坑土師器小皿検出状況2 北から



写真77 3号土坑土師器小皿(#4)検出状況

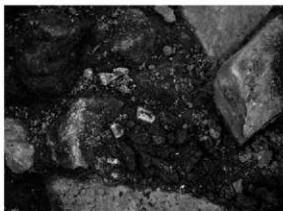


写真78 4号土坑土師器小皿(#10)検出状況



写真79 調査区1 西壁土層 4号土坑・5号土坑



写真80 調査区1 4号土坑 西壁土層



写真81 調査区1 東壁土層 南半分



写真82 調査区1 北壁土層



写真83 斜面調査区 上空写真 上が北



写真84 調査区1と斜面調査区の接点部 右が北



写真85 斜面調査区造成段検出状況 東から



写真86 斜面調査区平坦面1下層検出状況北から



写真87 斜面調査区造成段中位の南壁土層堆積状況



写真88 斜面調査区 南壁土層のオルソ画像

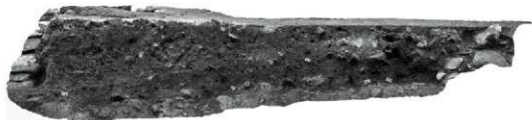


写真89 調査区1 西壁土層 (南半分のオルソ画像)



写真90 調査区1 東壁土層 (南半分のオルソ画像)

## 5 千々石ミゲル墓所推定地北側で検出された遺構

### (1) 調査区1の3号墓・4号墓・小土坑 (第29図・第31図・第32図)

調査の結果、調査区1からは第3次調査で確認されていた平面方形となる3号墓の北側半分の他、隣接して同じく平面方形となる4号墓が確認された。

いずれも2層の直下で礫を方形に集石した土坑上面が確認されたため、遺構の検出を確認し精査し、2基の墓坑と判断し、検出面での詳細図(第31図)を作成した。3号付近の2層は薄く均質ではなく上部の1層が落ち込むなど、2層の堆積状況は良好なものではなかった。4号墓付近の2層の状況も同じで薄い堆積であったが、調査区1の西壁付近では10cmほどの2層の堆積を確認できた。なお、3・4号墓に係る2層の詳細については本節4項に記述している。

第31図は2021年度(令和3)検出面と3号墓と4号墓の礫上で検出された土師器小皿などの検出状況図、第32図は2022年度(令和4)に拡張した部分を含む遺構検出状況図である。第32図では3号墓と4号墓の墓坑に充填された礫を濃い実線で図示し、地山の礫交じりの褐色粘質土層に含まれる礫を薄い実線で表現している。3号墓と4号墓及び3号墓を切り込む形で検出された小土坑の平面形態と出土品を点線で表現した詳細図である。

遺構に伴うものとその周辺で検出した遺物は、出土した位置に取り上げ番号を記録し詳細図に図示した。そして遺構との関係性を検討できるように座標と標高を記録したうえでそれぞれの出土品の取り上げを行った。(表14)

第31図に記録した3号墓に伴う礫の上場標高は、37.371m～37.242mの間にあり、北側の2層精査面の標高は37.336m～37.246mの間にある。2層上面の標高は37.4m前後で、第4次調査で確認された整地層の上面標高は37.4m付近であるため、3号墓の築造時の周辺の地表面標高は37.4m付近であった可能性が高い。4号墓についても第31図に図示したように平面での検出標高は3号墓と同じ状況である。

3号墓の北隅付近に平面L字型に設定した小試掘坑(サブトレ1)において、有段の墓坑であることを確認した。その結果、検出した集石の平面方形よりも小さい方形土坑が遺体の埋納坑となることが確認できた。礫の範囲は、長軸1.5m、短軸1.3mの長方形で長軸の方位は北22度東である。

4号墓は北側半分の覆土を20cmほど掘削し、有段の土坑ではなく垂直に掘りこまれた平面方形の素掘り土坑であることを確認した。長軸は東西方向で長さ1.4m、短軸は南北方向で長さ1.3m、長軸の方位は西16度南である。

4号墓の西側の壁面での2層下面(=4号墓覆土の上場)の標高は37.4mで、東西方向の覆土掘削部分の土層図最深部の標高は37.0mであり、墓坑の深度は40cm以上に復元できる。

また、3号墓を切り込む形で碗類を主体にした磁器を埋納した小土坑を検出した(第32図)。遺構の切り合い関係は、3号墓の築造後に3号墓の北側隅を掘り込む形で小土坑が確認されたため、前後関係は3号墓の築造後にある程度の時間を経た段階で小土坑が掘り込まれたことが明らかである。

第30図にあるように、2021年(令和3)の調査時の遺構精査の際に、3号墓に伴う礫の直上で土師器小皿2点(取り上げ番号#03、#04)を検出した。#03は完全な形を保ったままで口縁部を上にして底部を下にした安置状態で発見(巻頭カラー、写真76)されたた

め、供えられた位置を保ったままの状態に近いと判断できる。#04は4分の1ほどが欠けた状態で、口縁部を上にして底部を下にした状態で破片となって出土した。

遺構詳細図(第31図)の右には土師器小皿3点の実測図(1/2)を掲載した。上から2点が3号墓に伴う土師器小皿、下の1点が4号墓に伴う土師器小皿である。また、第31図下には、遺構に伴う出土品の写真を掲載した。

このほかに、4号墓に伴う礫の直上で土師器小皿の破片(#05、#06、#10)を40cmほどの散布範囲で検出した。

3号墓に伴う土師器小皿の検出標高は37.2m~37.3mで、2層上面の標高は37.4m付近である。

4号墓に伴う土師器小皿や磁器類の検出標高は、表14に掲載している。土師器類は礫検出面の標高に近い部分で検出され、磁器類は2層上面の37.4mより下で、37.1mの間まで出土しており、4号墓の覆土北側を掘り下げた際に検出した遺構覆土に含まれる出土品である。

これらの土師器小皿の接合状況は、完全な形で出土した#03や、4分の3ほどまでに接合復元できた#04、同じく4分の3ほどまでに接合復元できた#10で、いずれも礫の上やその間に落ち込む状態での検出である。これらの土師器小皿に比べて、磁器類は小片で出土しており礫の間や覆土中からの検出である。このことから、土師器小皿は墓坑が完成した後に礫上面に安置された可能性が指摘できる。このため墓前で行われた魂を鎮める祭祀行為にかかわる道具であることは明らかである。それに対して、覆土から出土する磁器小片類は、墓坑を掘削する際や埋納する際の土に含まれていたものであると判断できる。

1号墓及び2号墓と検出された墓坑の構造的な部分を比較すると、墓坑上面を覆う集石遺構(墓坑上面への人頭大から拳大の安山岩礫の充填)を伴わないことと有段墓坑とならないことが最も異なる点である。3号墓と4号墓はそれぞれの墓坑を覆う集石群を伴うが、墓坑上部に敷き詰める程度の規模で、それぞれの墓坑をふさぐ機能をもつだけである。また、使用された礫も3号墓と4号墓に利用された礫は、地山を掘削したときに得られるような風化の進んだ角礫であるのに対して、1号墓と2号墓の上面を覆う礫は地山の礫も含むが、大きな角礫を含んでおり周辺から持ち込んだ礫が多くある。3号墓と4号墓とは現地調達できる地山に含まれた礫を利用したにとどまる点は、1号墓と2号墓に費やされた労力と比べ投入された労力がはるかに少ないことを物語っている。

## (2) 調査区1 斜面トレンチで確認された造成痕跡 (第29図)

斜面トレンチは特筆すべき遺物の出土はなかったが、「4 基本土層と2面の平坦面の状況」で述べた通り、段状地形の造成痕跡が確認できた点が注目される。上段となる平坦面2は標高38.5mを平坦面の上場標高とし、東西方向の幅は4mほどに復元できる。下段となる平坦面1は37.4m付近を平坦面の上場標高とし、東西方向の幅は5.5m~6.0mに復元できる。2つの平坦面の間には、幅1mほど高低差60cmほどの段差があり、その延長の南北には石積みが存在し、段差には石積みの構造物が構築され平坦面1と2の境界としていたと想定できる。下段の平坦面1は石碑の建立された土地と同じ平坦面として隣接するため、整地層の北側から石碑のある土地の南にある石垣までの南北方向の長さは12m~13mと想定できる。このため、下段の平坦面1についてはその造成の計画規模は、東西6m、南北13mの規模に復元できる。上段の平坦面2の規模は長さを確定できる情報は少な

いが、同程度の長さを想定しておく。

## 6 千々石ミゲル墓所推定地北側で検出された遺物

### (1) 調査区1の3号墓・4号墓

第31図の1から3は、3号墓及び4号墓で検出された土師器小皿の実測図と底面の拓本である。また、表14は、3号墓及び4号墓に関連する出土品で、調査現場では座標や標高などの情報そして時代性を記録したものである。4号墓の時代性を特定できる出土品は、4号墓の覆土から出土している調査区1の点取り上げNo103の磁器小片で、網目文を持つ碗で長与産の18世紀前半代の白磁である。このため、4号墓は18世紀後半代以降の年代が想定できる。4号墓上面で検出された土師器小皿（第31図の3）は18世紀前半代以降に墓坑上面の礫の上に供えられたことが分かる。

3号墓の時代性を特定できる出土品は、上面及び覆土からの遺物はないが、礫上面に供えられた状態で出土した土師器小皿（第31図1・2）の形態的特徴が、4号墓上面で出土した土師器小皿と類似することから、同時期と考えられる。

### (2) 土師器小皿の形態的特徴

1は口縁部径6.1cm、高さ1.1cm、底部径4.3cmの完全な形で出土した土師器小皿である。外面は横方向のナデ仕上げで、端部直下にあわい稜線があり、底部は糸切離しのままである。口縁部端部は断面が丸くなるように仕上げている。内面はナデ仕上げで、見込み部分と口縁部の立ち上がり部分との間が同心円状にくぼむ。口縁部と底部付近とは断面の厚みがそれほど変わらないが、底部中心と見込み中心は薄くなり、底部外面の中心部は接地しない。口唇部外に煤の付着が6箇所あり、燈明として利用された痕跡である。胎土はきめ細かで、色調は赤みのある橙色（Hue2.5YR6/6-6/8）である。口縁部上面の正円を3等分する位置に幅7mmほど深さ1～2mmの切り込み状のくぼみが焼成後に施される。

2は口縁部径6.1cm、高さ1.1cm、底部径4.4cmの12点の破片による接合品で、70%近くまで残存する1とはほぼ同じ形態の土師器小皿である。外面は横方向のナデ仕上げで、端部直下にあわい稜線があり、底部は糸切離しのままである。口縁部端部は断面が丸くなるように上に持ち上げている。内面はナデ仕上げで、見込み分と口縁部の立ち上がり部分との間が同心円状にくぼむ。それに従い器壁も薄い箇所と厚い箇所が存在する。口縁部は底部より薄く仕上げている。底部は中心部のごく一部が接地しない。色調は赤みのある橙色（Hue2.5YR6/6-6/8）で、胎土はキメ細かく、赤い粒子と雲母粒子が入る。1と同じ形態・調整であり、色調も同じである。

3は、6点の破片の接合資料で全体の80%まで接合された土師器小皿である。口縁部の直径6.0cm、高さ1.25cm、底部径4.0cmである。外面は横方向のナデ仕上げで、端部直下にあわい稜線があり、底部は糸切離しのままである。口縁部端部は断面が丸くなるように仕上げている。内面はナデ仕上げ、見込み中心はややくぼんでいる。底部付近と口縁部とは断面の厚みにそれほど変化がないが、底部は中心部のごく一部が接地しない。口唇部外面に黒斑があり、内部も黒斑あり、焼成時のムラによる色調の変化である。胎土はきめ細かで、雲母粒子や赤色粒子が入り、色調は浅黄橙色（Hue10YR8/3-8/4）で、1や2のように赤みは無く薄い肌色である。

1と2とは形態・調整・色調・胎土がすべて同じであるため、同じ時期に製作された土師器小皿である。3は形態・調整・胎土は同じであるが、色調が異なるため、1と2との

製作時期とは若干の時間的な差が想定できる。

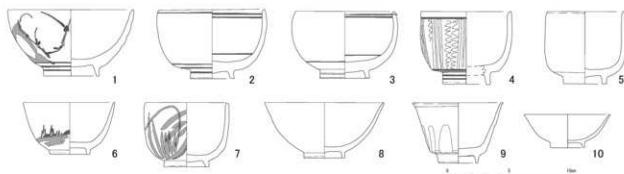
### (3) 調査区1の小土坑 (SK101) から出土した遺物

第30図1から10は小土坑の覆土から出土した磁器類の実測図で、属性は表12に掲載した。これらの他に小土坑の覆土から出土した陶磁器類は92・93頁に写真を掲載した。第30図に図示した陶磁器は18世紀後半から19世紀の埴類である。表14に掲載した小片には、18世紀初頭となるものもあり、小土坑に埋納された磁器類の時代性は18世紀初頭から19世紀までとなる。

## 7 千々石ミゲル墓所推定地の小結

第1～第5次までの調査で得られた主な遺構を、諫早市作成2500分の1地形図をもとに100分の1地形図に配置したのが第33図である。表13は検出された墓坑の一覧である。本節で報告してきた内容を加味しながら、墓地の選定から明治に鉄道が敷設されるまでの変遷について簡単に次のように整理する。

1633年(寛永9)に1枚の自然石の墓碑と2つの墓(1号墓と2号墓)を築造するための用地として、山川内郷の標高37.4m付近の山地裾の東向き斜面が選定された。小さな谷を挟んですぐ北には山川内遺跡があり、そこは中世末から近世初頭にかけての石塔群が分布する墓地であった。今回の調査成果の報告(第3章第1節)で、山川内遺跡は「ブッセキ」及び「ブッセキチ」という伝承があるため、『長墓改覚』に記載の「佛石墓所」であ



第30図 小土坑出土品実測図 1/3

表12 小土坑出土品属性表

番号	口径	器高	高台	注記・接合関係	時代性
1	10	5.1	4.4	CMR2022 #110を4点接合	18世紀後半
2	8.2	5.4	3.5	#107を2点 #108 #109の5点接合	19世紀前半 幕末
3	7.8	5.2	3.9	#106を2点 #110の合計3点接合	19世紀前半 幕末
4	7.0	5.6	3.6	#110を4点接合	19世紀前半 幕末
5	6.4	5.8	3.2	#110 #111 II SK 上1014の合計3点接合	19世紀前半 幕末
6	7.1	4.1	3.1	#113の1点	19世紀
7	6.7	5.2	3.6	#112 #114 #115の合計4点接合	19世紀 波佐見か
8	9.4	4.3	3.1	#110 #117の合計4点接合	19世紀前半 幕末
9	7.0	4.7	3.0	#116 合計2点接合	19世紀 コバルト
10	7.0	2.7	2.4	#115を2点、#117の合計3点接合	

※1のみ CMR2022 # 番号で表示以下は CMR2022を省略

る可能性を指摘したが、大石氏は、千々石ミゲル墓所推定地周辺を「くは墓所」である可能性があると指摘しており、今後の課題である。

墓地の用地は、東西6m、南北13mの南北に長い長方形の平地として計画され、平坦面1を形成するために切土造成が行われた。西側の平坦面2は、平坦面1と同時に造成されたかは不明で、江戸時代のいずれかの時期にミカン畑として造成された可能性もあり、今後の調査の課題である。

その後、すぐに石碑の建立、2基の墓の築造と埋葬が行われた。そして少なくとも100年が経過したあとに、3号墓と4号墓が築造された。明治期には墓前にて水の供献に利用されるなどして、周辺に散布していた碗の陶磁器類が集められ、それらを小土坑に埋納した。

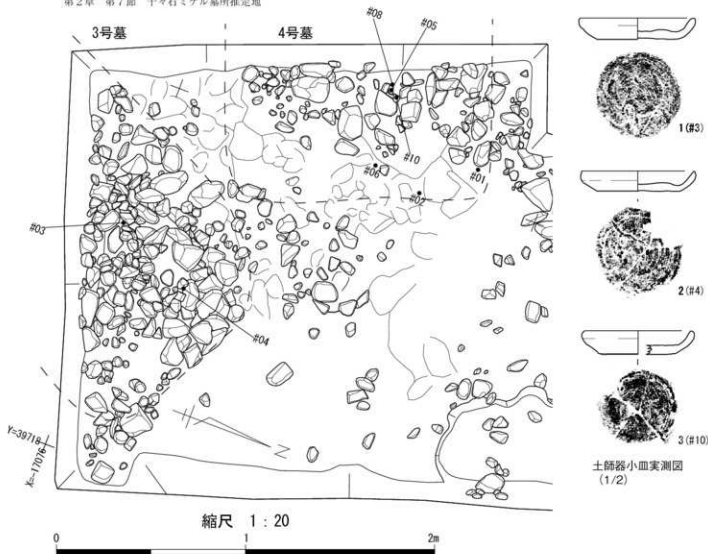
墓地の使用期間を1633年（寛永9）に墓碑が建立されてから1898年（明治31）に鉄道が開通するまでと仮定すると266年間となる。発見されている埋葬遺構は現在のところ4人分で、碗類を主体とする磁器には18～19世紀までの複数の時期があり、埋葬人数は極めて少ないが長い時間継続して碗類が供えられてきた。地上には「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」の他に、地上高110cmの自然石の石碑と31cm～36cmほどの小型の自然石の石碑があるのみで、多数の墓標は確認できない。地上標石が少ないにもかかわらず長期間にわたり墓地が利用されているため、千々石ミゲル墓所推定地は多人数を埋葬するために営まれたのではなく少人数を埋葬し長期間供養するための墓地である可能性が高い。

千々石ミゲル墓所推定地とその周辺は、千々石清左衛門夫妻のために造成され、その二人を長く供養するための墓地として営まれた可能性が高い。

表13 検出された墓坑の概要一覧

名称	形状	軸方向	長軸	短軸	墓坑上部の状況
1号墓	方形	東西	1.6	1.2	2つの墓坑を覆う厚い集石
2号墓	方形	東西	2.5	1.3	有段墓坑、土器類の供献無し
3号墓	方形	北東 北22度東	1.55	1.20	土師器小皿の供献
4号墓	方形	東西 西16度南	1.46	1.23	土師器小皿の供献



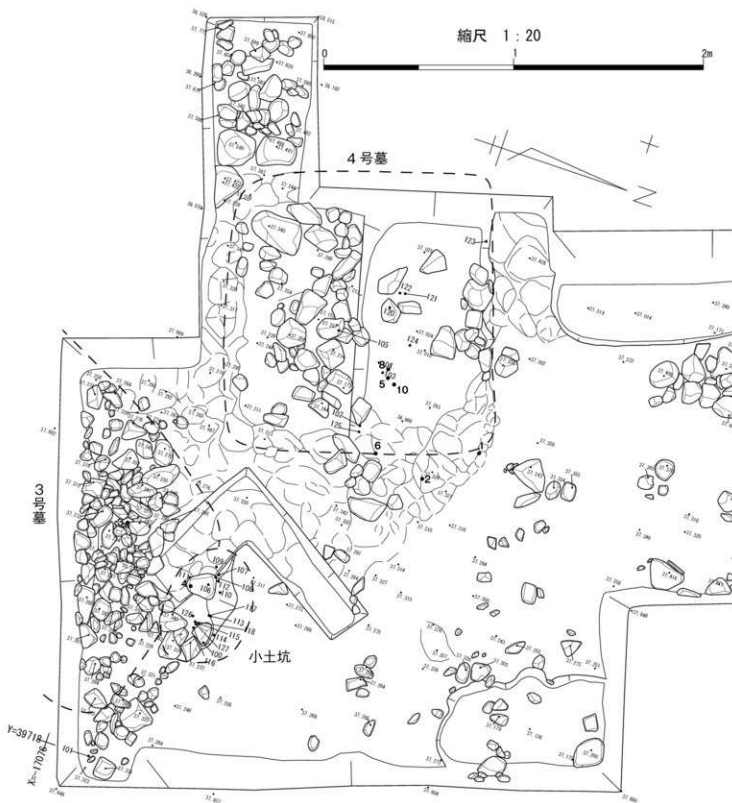


第31図 令和3年度3号墓・4号墓詳細図 1/20



千々石ミゲル墓所推定地4号墓関連の点取り上げ遺物情報

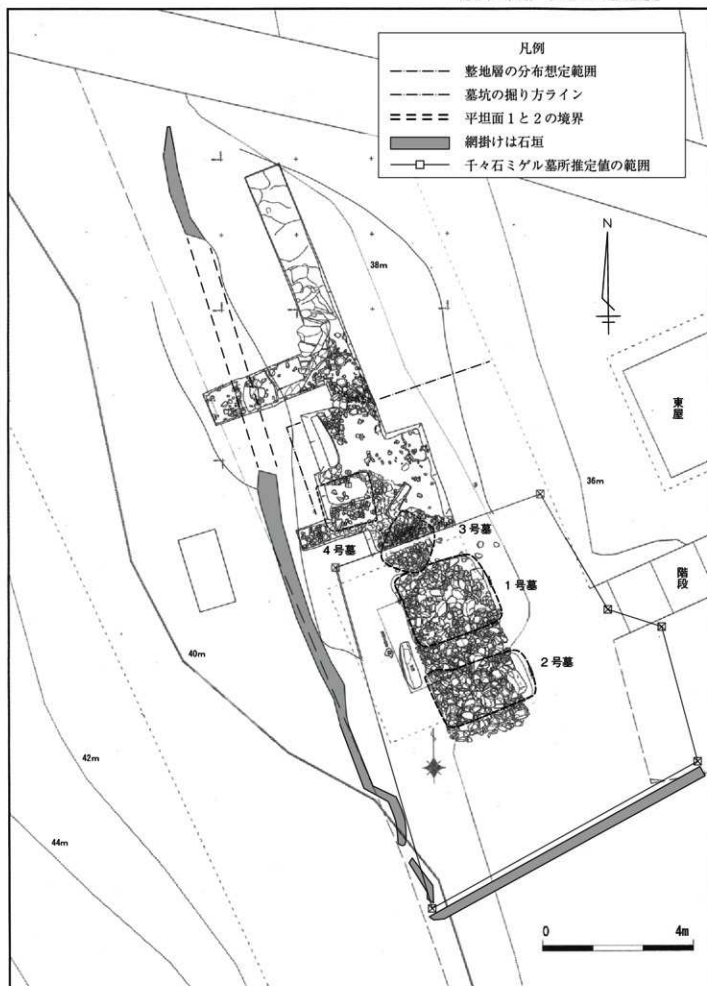
No	遺構・層位	種別	特徴や時代性	No	遺構・層位	種別	特徴や時代性
102	4号墓	磁器	小片 0.6g	121	4号墓	磁器	陶胎染付碗の小片 4.3g
103	4号墓	磁器	網目文 長弁18世紀前半 3.5g	122	4号墓	石英	小さい白い川原石 4.4g
104	4号墓	土師器	小片 0.9g	123	4号墓	磁器	磁器の塊 小片 2.2g
105	4号墓	木炭	2点 0.6g	124	4号墓	磁器	磁器の塊 小片 0.6g
120	4号墓	土器	土師器もしくは弥生土器片 4.8g	125	4号墓	土師器	小片 0.5g



第32図 令和4年度3号墓・4号墓詳細図 1/20

表14 3号墓・4号墓関連出土品の基本情報一覧

区	No	遺構・層位	x	y	z (m)	種別	特徴や時代性	日付
1	#1	1層	-17074.377	39715.845	37.331	磁器	小丸塚の口縁部片	20220131
1	#2	1層	-17074.623	39716.069	37.276	磁器	白磁小片	20220131
1	#3	3号墓直上	-17076.026	39716.765	37.223	土磁器	小皿	20210714
1	#4	3号墓直上	-17075.608	39716.977	37.314	土磁器	小皿	20210714
1	#5	4号墓直上	-17074.94	39715.603	37.267	土磁器	小皿 #10に接合	20220228
1	#6	4号墓直上	-17074.887	39716.002	37.297	土磁器	小皿 小片 2点接合	20220228
1	#8	4号墓直上	-17074.957	39715.575	37.261	土磁器	小皿 #10に接合	20220228
1	#10	4号墓直上	-17074.911	39715.631	37.286	土磁器	小皿 #5・8が接合	20220228
2	#7	3層	-17076.437	39711.767	38.957	磁器	網目文塚の口縁部片 18世紀代	20220228
斜	#9	4層上	-17071.399	39714.602	37.424	磁器	#2と同一破片	20220228
斜	#11	4層上	-17072.319	39711.735	38.467	瓦	近代	20220303
1	100	小土坑	-17075.373	39717.28	37.269	玉石	扁平な丸い川原石	20221020
1	101	小土坑	-17075.764	39717.998	37.295	磁器	#117の白磁に接合	20221020
1	102	4号墓	-17074.969	39715.893	37.146	磁器	小片 0.6g	20221020
1	103	4号墓	-17074.945	39715.59	37.228	磁器	網目文 長号18世紀前半 3.5g	20221020
1	104	4号墓	-17074.979	39715.546	37.25	土磁器	小片 0.9g	20221020
1	105	4号墓	-17075.235	39715.454	37.195	木炭	2点 0.6g	20221020
1	106	小土坑	-17075.456	39716.941	37.202	磁器	磁器の塊 19世紀前半 幕末	20221020
1	107	小土坑	-17075.42	39716.875	37.166	磁器	笠と人、雪輪の磁器塊 19世紀前半 幕末	20221020
1	108	小土坑	-17075.433	39716.892	37.161	磁器	107に接合	20221020
1	109	小土坑	-17075.446	39716.839	37.18	磁器	107に接合	20221020
1	110	小土坑	-17075.385	39716.961	37.167	磁器	染付磁器の塊 19世紀前半 幕末 陶胎染付 18世紀前半 35.4g 染付磁器 18世紀後半 42.6g	20221020
1	111	小土坑	-17075.561	39716.936	37.154	磁器	染付磁器の塊 19世紀前半 幕末	20221020
1	112	小土坑	-17075.411	39716.908	37.161	磁器	染付磁器の塊 19世紀 渡佐見蔵か	20221024
1	113	小土坑	-17075.391	39717.095	37.164	磁器	19世紀代の小さい坏 (染付磁器)	20221024
1	114	小土坑	-17075.344	39717.183	37.192	磁器	112に接合	20221024
1	115	小土坑	-17075.44	39717.151	37.155	磁器	112に接合	20221024
1	116	小土坑	-17075.458	39717.181	37.169	磁器	磁器の塊 (コバルト) 19世紀	20221024
1	117	小土坑	-17075.401	39717.094	37.14	磁器	19世紀代の小さい坏 (白磁) 片 8.3g 運転唐草文 17~18世紀初 22.8g 染付磁器	20221024
1	118	小土坑	-17075.46	39717.148	37.107	磁器	#125の2点と#117と接合 6.7g	20221024
1	119	欠番	—	—	—	—	—	—
1	120	4号墓	-17075.02	39715.254	37.178	土器	土器もしくは弥生土器片 4.8g	20221116
1	121	4号墓	-17074.966	39715.158	37.067	磁器	陶胎染付塊の小片 4.3g	20221116
1	122	4号墓	-17074.993	39715.164	37.071	石英	小さい白い川原石 4.4g	20221116
1	123	4号墓	-17074.65	39714.761	37.16	磁器	磁器の塊 小片 2.2g	20221116
1	124	4号墓	-17074.855	39715.408	37.011	磁器	磁器の塊 小片 0.6g	20221116
1	125	4号墓	-17074.963	39715.925	37.052	土磁器	小片 0.5g	20221116
1	126	小土坑	-17075.481	39717.123	37.152	磁器	白磁 無紋 5.0g	20221121
1	127	小土坑	-17075.452	39717.159	37.134	磁器	#116, #111, #110に接合、小片 0.4g	20221121



第33図 遺構配置図 1/100



写真92 調査区1 令和4年度 完掘 上空写真



写真93 調査区1 完掘状況 上空写真



写真94 調査区1 完掘状況 東から



写真95 3号墓サブトレ1検出状況 東から



写真96 小土坑遺物検出状況① 東から

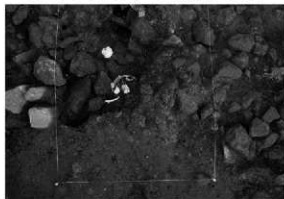


写真97 小土坑遺物検出状況② 東から



写真98 小土坑遺物検出状況③ 東から

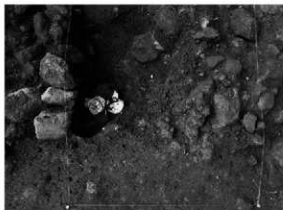


写真99 小土坑遺物検出状況④ 東から



写真100 小土坑遺物検出状況⑤ 東から



写真101 3号墓サブトレ1完掘 東から



写真102 3号墓サブトレ1完掘 西から



写真103 3号墓 南北方向断面 西壁面土層



写真104 3号墓 南北方向断面 南-西壁面土層



写真105 3号墓サブトレ1北面土層 (2層)



写真106 3号墓サブトレ1南面土層 (2層)



写真107 4号墓 検出状況(東北東から)



写真108 4号墓 北側半範囲の設定(東から)

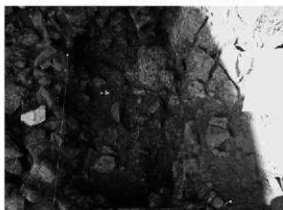


写真109 4号墓北側掘り下げ遺物検出状況(東から)

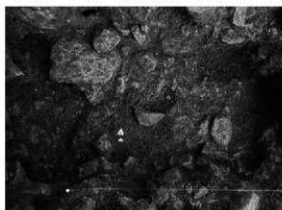


写真110 4号墓北側掘り下げ遺物検出状況(南から)



写真111 4号墓北側掘り下げ遺物検出状況拡大



写真112 4号墓北側掘り下げ遺物上げ状況



写真113 4号墓北側掘り下げ未完掘で埋戻し(東から)

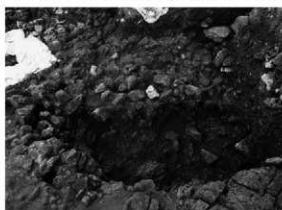


写真114 4号墓北側掘り下げ未完掘で埋め戻し(北から)



写真115 4号墓断面土層



写真116 調査区1西壁面土層①(右端はサブトレ2)



写真117 調査区1西壁土層(4号墓西側土層)



写真118 調査区1サブトレ2西壁土層(4層確認)



写真119 調査区1のサブトレ3完掘状況(東から)



写真120 調査区1のサブトレ3南壁土層(北東から)



写真121 調査区1のサブトレ3南壁土層



写真122 調査区1のサブトレ3西壁土層





写真123 現地指導及び説明会遺構明示状況



写真124 調査区1 埋め戻し状況①



写真125 調査区1 埋め戻し状況②



写真126 調査区1 埋め戻し状況③



写真127 調査区1・調査区2の点取り遺物① 1/2



写真128 小土坑出土品

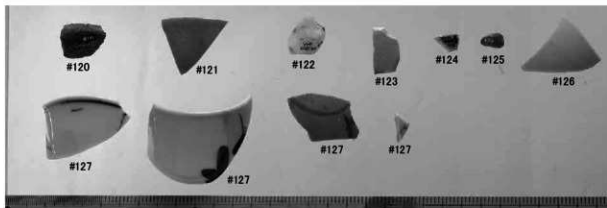


写真129 上段左から6点：4号墓覆土中 上段右端と下段4点は小土坑出土品 1/2



写真130 4号墓上面直上出土品 1/2



写真131 左3点は調査区1のサブトレ2の2層出土品、右3点はサブトレ3の3C層出土品 1/2

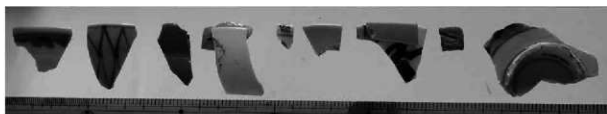


写真132 山川内遺跡 試掘坑11 表土出土品 1/2



写真133 山川内遺跡 試掘坑10 2層出土品 1/2

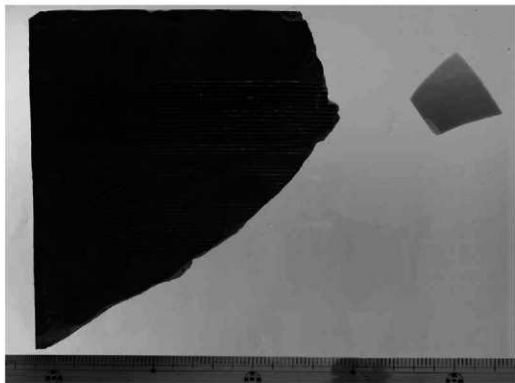


写真134 斜面調査区西端の上段造成面3層出土品 1/2



写真135 調査区1 トレンチ3の3層出土品 1/2

### 第3章 キリシタン関連遺跡等の踏査・採集品及び分析・測量調査

#### 第1節 伊木力・佐瀬地区の墓所と「長墓改覚」について

##### 1 伊木力・佐瀬地域にある墓所の悉皆調査

いわゆる「長墓改覚」と呼ばれている古文書は、大村市所蔵の「大村彦右衛門日記」中のキリシタン関連の一部であり、1657年（明暦3）に禁教後の大村藩で多くのキリスト教の信者が顕在化した「郡崩れ」という事件がきっかけとなり、大村藩が実施した宗教政策（踏絵、墓改め、宮改め）の一つである「墓改め」の記録である。（1964大村史談）郡崩れの翌年1658年（明暦4／万治元年）に実施され、キリシタン墓である「長墓」と「古墓」について、墓石の数量と掘り起こした際に出土した物品類についての数量と発見後の措置についての報告である。

現在の諫早市伊木力地域は、「長墓改覚」に記載された当時には「伊木力村」「させ村」「さきへた村」の3つに区分されていた。そして伊木力村に「志げ尾」、「佛石」、「くぼ」、「辻ノどう」、「だい屋敷」、させ村に「なりやうづ」、さきへた村に「むしやこ」、「上とこ」、計8つの墓所があったことが記録されている。（巻頭カラー3）

本節では記載された「長墓改覚」8つの墓所と現在の伊木力地域にある墓所について実施した悉皆調査の結果を報告する。

##### 2 先行研究事例

「長墓改覚」記載の墓所と現在の伊木力・佐瀬地区の墓所を比較する先行研究として、2014年（平成26）に発表された相川・加藤・野村・白濱による報告（以下2014報告）がある。2014年報告は、「長墓改覚」とそれに関する研究史を紹介、大村藩領「向地」の範囲を明示し、西彼杵郡長与町齊藤・大越・下木場の3墓所、諫早市多良見町の重尾・野川内・須ノ瀬の3墓所に残る墓石を写真で紹介しており、主な調査結果は以下の通り引用する。

「長墓改覚」に記載された数は長与村で178基、高田村が87基、時津村が77基、伊木力村65基である。この「墓改め」によりキリシタン墓碑はことごとく破壊されたため、藩内に典型的なキリシタン墓碑が残っていることが珍しい。」

「自然石立碑様式の墓碑が大村藩内には多く存在する。それが全てキリシタン墓碑とは限らないが、向地においても存在する。」

「今後も調査を継続していく予定であるが、潜伏していたからこそ、明瞭なキリシタンであった物証に乏しいことが現状なので、今後の研究が困難なことが、予想される。」

特に、次の指摘と掲載された写真が伊木力・佐瀬地域に関する成果である。

##### ○伊木力地域で確認された墓石の特徴

不定形の伏碑状の板石の上に自然石の立碑がのせられている。

不定形の伏碑状の板石の背後に自然石の立碑がある。

掲載された写真は今では確認できないものを含んでおり貴重な写真である。

##### 3 長崎県実施の1882年（明治15）の字調査

調査指導委員会に所属する文献専門の織田委員から、長崎歴史文化博物館所蔵の『肥前国西彼杵郡各村字調 明治15年6月』（長崎県庶務課編集）を紹介された。資料の大きさは23.6cm×15.7cmの近代化に関する公的文書で冊子仕立てである。（101頁第34図）

縦書きで右に縦1列1段の罫線がありその中に「西<sup>にし</sup>彼<sup>かの</sup>杵<sup>き</sup>人<sup>びと</sup>」、その右列から縦10列・横5段の罫線に分かれ一列目に上から「村名」「郷名」「字」「小名」「小字」と書かれ、対応する段に右から村名は「伊木力村」、郷名は「野川内」「山川内」「舟津」「佐瀬」と書かれる。野川内の列の小名の段に「重尾」、山川内の列の小名の段に「大山」と書かれる。舟津の列には字の段に「中通」「田中」「舟津」、小名の段に「黒崎」「鹿嶋」と書かれ、いずれの郷も小字の段には何も書かれていない。これとは対照的に、矢上村の項では、村名に矢上村が書かれ、その列の郷名に「中尾名」、字の段に「田川内」「権ノ木」「行足」、小名の段に「薩摩城」「平床」「砂古」、小字の段に「山ノ神」「川良」等が書かれている。

『長墓改覚』（1658年）にある村名や墓所名と1882年（明治15）の記録にある村・郷・字名とを比較してみると共通項は多い。「いきりき村」は村名の「伊木力」、「させ村」は郷名の「佐瀬」、さきへた村は字の「崎辺田」、墓所名の「志げ尾」は小名の「重尾」とそれぞれ照合ができる。『長墓改覚』に書かれた「伊木力村」「させ村」「さきへた村」の範囲は、1882年に報告された伊木力村と同一であることが理解でき、地名も継承されていることが明らかである。

特筆すべき事項は、『長墓改覚』の江戸時代前半には「させ」と「さきへた」の二つに分かれていた佐瀬郷が明治期の調査では一つになっていたことである。

河川や岬の名前などの地理的な情報と整理すると、伊木力川の中流域より上流域を「野川内」と「山川内」の郷に分け、その中にそれぞれ「重尾」と「大山」という字名があり、伊木力川の河口に面する一体と河口西側の岬や島を含む地域が「舟津」郷で、その中に「中通」、「田中」、「舟津」の字があり、小字として黒崎、鹿嶋がある。その西の北向きの岬と小さな谷地形のある地域が「佐瀬」郷、字が「百石」と「五十石」と「崎辺田」で、小字に「須ノ瀬」、「大浦」がある。

明治期の様相は、現在でも継承されており、104頁第36図の国土地理院作成（1991年6月発行）地形図にあるように地名や字名の情報は近似する。地形図掲載の地名は、野川内郷に「重尾」「野川内」「琴ノ尾」、舟津に「中通」「舟津」「田中」、佐瀬郷に「浦川内」「城山」「丸山」「木場」「田平」「勢女」「上床」「崎辺田」「須瀬」がある。『長墓改覚』記載墓所名に発音が一致するものがある。

#### 4 現在確認できる墓所と字名等の比較作業（104頁第36図）

現在の伊木力地域は、伊木力川流域に面して、山川内郷、野川内郷、舟津郷、大村湾側に面して佐瀬郷があり4地域に区分され、現在の墓所は第36図に示すように11箇所あり、郷と字の情報を示したのが表16である。また、現地踏査で観察した墓石類などの属性と地形図と隣接する字図と現地の状況を示す写真を106頁から130頁までに掲載した。

所属する現在の字名を墓所の名称にあてると表16にあるように、野川内郷には梅木地Aと梅木地B、平の3墓所、山川内郷には長野の1墓所、舟津郷には田頭と葛根原の2墓所、佐瀬郷には徳木宇都（宇大平にも分布）、小崎、上セメ、大久保、須ノ瀬の5墓所となる。佐瀬郷のうち、須ノ瀬は地理的に旧崎辺田村に属する。

その中で、1900年（明治33）の地理院発行地形図に記載された墓所は9箇所であり、掲載されていないものは、『長墓改覚』記載墓所と比較対象から除外する。

次に、『長墓改覚』に記載された墓所8か所の名称と1971年（昭和46）発行『多良見町郷土誌』（文献②）の字図（103頁第35図）と比較し、それぞれに類似する小字名を検索し、

表15 「長墓改覚」記載の墓所名と字名の比較

村名	墓所名	類似する字名		字隣接の墓所
		郷	字	
伊木力	志げ尾	野川内	本重尾 尾崎	梅木地A・B
		舟津	尾上 丸尾	
	仏石	野川内	仏石 幸仏	※山川内遺跡
	くほ	舟津	大久保、上大久保	田頭
	辻ノだう	野川内	辻柴	
	だい屋敷	野川内	小屋敷平	平
佐瀬		屋敷坂 元屋敷		
させ	なりやうづ	佐瀬	宇都谷、穂木宇都、成仏	穂木宇都
さきへた	上とこ	佐瀬	上床、上須ノ瀬、上セメ	※須ノ瀬A・B のいずれか
	むしやこ	類似する小字名が無い。		

音読みで一文字でも該当する場合も表15のように拾い出した。1971年発行『多良見町郷土誌』の記録で字名の数量は、山川内郷に18、野川内郷に20、舟津郷に36、佐瀬郷に50がある。

表15のように「長墓改覚」記載の墓名と現在の字名とが類似し、それらの字名に隣接する現在の墓所は、梅木地A≦本重尾（もとしげお）、平≦小屋敷平（こやしきびら）がある。田頭の北にある字「雀岩」にまで江戸時代の墓地在存在し、その北に「上大久保（かみおおくほ）」が隣接する。佐瀬郷の穂木宇都は、字名に「なりやうづ」の「うづ」を含み、隣接する「成仏（じょうぶつ）」には「なり」の音を含む。

田頭に隣接する「雀岩」は、雀を「しずめ」からくる音として魂や霊を鎮める意味があり、「大久保」「下大久保」の久保には「くほち」=谷のような生産性の低い土地という意味や墓地という意味があることが指摘できる。

上記の整理から、現在ある墓所の中で、梅木地は「志げ尾」、田頭は「くほ」、穂木宇都は「なりやうづ」に比定できる可能性が高いことが確認できた。

## 6 伊木力・佐瀬墓所の考古学的特徴（106頁～130頁）

踏査による各墓所の詳細な記録は、101頁からの地形図と字図などを交えた個別報告にかえ、本項では踏査した墓所の考古学的な整理を行う。まず、立地の形態と面的な広がり方は、以下のように分類できる。

山地や丘陵斜面などの斜面立地指向型と、岬や丘陵頂部のような平地立地指向型とに分類でき、面的な広がりも地形の指向性に左右されることが判明した。以下では1900年地形図に記載の無い、梅木地B、上セメ、大久保は比較の対象から除外し整理する。

斜面立地指向型は、梅木地A、平、長野、田頭、穂木宇都の5箇所、平地立地指向型は、葛根原、小崎、須ノ瀬A、須ノ瀬Bの4箇所である。

斜面立地指向型の場合、敷地面積が1,200㎡から6,000㎡と大きく、地形に沿って複数の段造成を行っている。高低差では梅木地は約10m、平は約25m、長野と田頭は約15m、穂

木宇都は約30m、それぞれの敷地に段造成が施され、それぞれ傾斜のある道を通じて墓所にアクセスし、同じ段にある墓所は通路を共有する。斜面立地指向型は段造成が行われているため、整然と墓所を配置していく必要があり、墓石の方向性も一定の方向性を共有する。墓所内の道の配置は、穂木宇都のように中央に道が一本あり左右に段が配置される場合と平のように墓所の敷地の端に一本道がありそこから左右片側のみ段が配置される場合とがある。この類型は1,200㎡以上と規模が大きく、墓所の選定段階から高い計画性が必要である。

平地指向立地型には、敷地面積が320㎡から2,500㎡で、高低差は0mから4mの敷地で、丘陵や岬の頂部平坦面を選定した葛根原、小崎、須ノ瀬Bや、丘陵鞍部平坦面を選定した須ノ瀬Aがあげられる。墓所自体には道でアクセスできるが、墓所内部での小道ではなく、無秩序に外側へ広がったようで、斜面立地指向型のように整然と並ぶというような配置計画はうかがえない。

この二つの指向型の確認と共に、山川内遺跡に営まれていた五輪塔などの中世的様相の強い墓所とその西側にある平墓所との関係性を整理しておく。山川内遺跡の墓所も平と同じように山地斜面を利用して営まれた墓所であるが、段造成の形跡はなく、自然地形でも平坦な面を選定したものと思われる。山川内遺跡で確認される石塔の時代性は15世紀から17世紀前半までであり、平墓所の採集品が示す年代は18世紀以降である。この二つの墓所は野川内という地域的な同一性もあり連続する墓所群と考えられ、中世的な山川内遺跡の墓所から、平墓所にみるような計画的な段造成の墓所への変遷が確認できる。これは、調査指導委員会の中でも再三指摘されていた寺請制度が浸透し、墓所を整然と営むことがこの地域の決まり事として定着した結果であろう。このような分析から、斜面立地指向型の歴史的な背景は、寺請制度の浸透による墓所築造の定着が発生要因の一つであることが理解できる。

次に詳細な部分であるが、墓石の在り方を検討する。葛根原の墓所以外において、2014報告にあるような伏石の上や脇に自然石の墓碑が付属する類例と、切石加工の石塔が付属する類例がある。多数ある切石加工の石塔には18世紀代の紀年銘が確認される。おそらく自然石の墓石は17世紀代のものを含むと思われるが、それ以降の場合もあろう。18世紀代に入ると自然石の墓石から切石加工の墓石への変換期が存在するようである。この点は、それぞれの墓所の詳細な銘文調査が必要であり、今後の課題である。

また、紀年銘をもつ石塔で特筆すべきは、穂木宇都墓所の東端、最上段にある切石加工の墓石にある「享保二十年 妙法朝長収大藤原正貞之墓」である。『長墓改覚』記載の「なりやうづ」を報告した庄屋である「朝長庄左衛門」に関連する銘文で、穂木宇都墓所と「なりやうづ」墓所の類似性を補強する成果である。同墓所には40個近くの石塔が存在する。

採集品の総数及び時代性は第3-1-3表に示すとおりである。また、採集品で特徴的なものの実測図と観察表を126頁から127頁に掲載したが、その他については128頁から129頁に写真と注記・重量の一覧表を墓所ごとに掲載した。

採集陶器類の時代性の分析を行っていただいた波佐見町教育委員会の学芸員（波佐見町歴史文化交流館）である中野雄二氏による墓所の採集品に関する所見を紹介する。

・近世（江戸時代）、近代（明治～昭和20年）、現代（昭和20年～）の陶磁器が存在する。

磁器が主体で陶器は少ない。

- ・近世代では17世紀代のはほとんどみられず、18世紀以降～19世紀前半を主体とする。
- ・近世代の製品は、碗（飯碗）を主体とする。江戸の終わり頃には湯呑み碗もみられる（深小丸碗）。
- ・18世紀前半代のものでは、長与町所在の長与皿山窯の製品（鋸歯状の一重網目文碗、印判手碗など）と想定されるものが多くみられる。
- ・文様では、雪輪草花文、二重網目文、二十四孝の孟宗竹文（筍掘り文）などがよくみられた。
- ・近代以降は、飯碗は少なくなり、湯呑み碗が多くなるようである。また、潤徳利や猪口なども多くなる。
- ・太平洋戦争中に波佐見で作られた「統制陶器」が含まれている。
- ・近現代では、波佐見の「幸山陶苑」や「小吉陶苑」の製品もみられる。

採集された陶磁器類の時代性から伊木力・佐瀬地域の墓所は、江戸時代前半から現在まで継続して利用されていることが明らかになった。

最後に、平墓所の東にある山川内遺跡は、第2章第4節で報告したように「ブッセキ」や「ブッセキチ」という伝承名もつこと、そして第2章第5節で報告したように15世紀から16世紀代の墓石が多く散布し「古墓」としての認識が江戸時代前半にもあったことが考えられる。「長墓改覚」の調査では、蒲鉾型の「長墓」の他に、「古墓」も掘り返しの対象としているので、山川内遺跡に散布する石塔群はこの時にも掘り返しの対象になったことが想定され、現在散在する状況の一端は、その時「佛石」墓所の掘り起こし作業によるものとも考えられる。「長墓改覚」の記載では、「佛石」は長年使われていない様子で「藪」になり果てて、墓石ともつかない石が散在するという「古墓」としての認識が記録されており、山川内遺跡は『長墓改覚』記載の「佛石」墓所が該当することが確認できる。

また、千々石ミゲル墓所推定地にある墓石を研究し、墓石の建立者が千々石玄蕃であることから、千々石清左衛門夫妻の供養塔であることを明らかにした大石氏の報告で、千々石ミゲル墓所推定地周辺には「くぼ」という伝承があることを指摘している。この地域の「くぼ」伝承については今後の課題である。

## 7 『長墓改覚』記載墓所と現在の墓所との比較結果（105頁第37図）

1～6で行った作業から、『長墓改覚』記載の墓所について、現在、確認される11箇所の墓所から、次のように4箇所（志げ尾、佛石、だい屋敷、なりやうづ）の候補等を絞り込むことができた。

伊木力村記載の「志げ尾」、「佛石」、「くぼ」の3箇所

「志げ尾」は隣接する字名が「本重尾（もとしげお）」であることから、「梅木地墓所」（Aが候補）が該当する。

「佛石」には、「ぶっせき」「ぶっせきち」という伝承と、15世紀から16世紀の石塔が多く散布する状況から、山川内遺跡が該当する。

「くぼ」には隣接する字名が「くぼ」となる「田頭墓所」が該当する。

「だい屋敷」には隣接する字名が「小屋敷平」となる「平墓所」が可能性あり。

させ村記載の「なりやうづ」の1箇所

「なりやうづ」は字名に「うづ」があることと現地朝長姓を刻む墓碑が建立され



ていることから「穂木宇都墓所」が該当する。  
さきへた村記載の「上とこ」「むしやこ」の2箇所  
須ノ瀬A・Bがどちらかに該当する可能性あり。

#### 8 第3章第1節の小結

本節では、字名などの地名情報と考古学的成果より江戸時代初頭に利用されていた墓所について現在の墓所との近似性を指摘し、『長墓改覚』記載の墓所の特定作業を行ったが、現在ある資料での状況判断に負うところが大きく、今後、現地での石塔銘文の詳細調査や寺院所有の古文書類の調査などを行い、その成果により、再度検討する必要があることを課題として記しておく。



表16 伊木力・佐瀬墓所属性

図	郷名	字名	標高	面積	隣接字名と M33地形図掲載の有無
①	野川内	梅木地 A	170m	1,700㎡	字の本重尾と仏石が隣接 Aは M33掲載、Bは未掲載
		梅木地 B	125m	550㎡	
②		平	50~75m	1,600㎡	M33掲載 藪平・神平が隣接
③	山川内	長野	45~60m	1,200㎡	M33掲載
④	舟津	田頭(雀岩)	75~90m	3,200㎡	小字大久保・上大久保が隣接 M33掲載
⑤		葛根原	115m	1,800㎡	M33掲載
⑥	佐瀬	穂木字都	100~130m	6,000㎡	M33掲載 成仏が隣接
⑦		小崎	42m	500㎡	M33掲載
⑧		上セメ	160~165m	400㎡	M33未掲載
⑨		大久保	197m	500㎡	M33未掲載 小字の上床が隣接
⑩	※須ノ瀬 は崎辺田	須ノ瀬 A	86~90m	2,500㎡	M33掲載
⑫		須ノ瀬 B	68m	320㎡	M33掲載

表17 伊木力・佐瀬墓所採集品集計

図	郷名	墓所名	数量	採集品の時代別点数					
				17C	18C	19C	江戸	近現代	その他
①	野川内	梅木地 A	29	0	2	3	0	24	0
		梅木地 B	46	0	7	7	4	27	不明 1
②		平	34	0	7	1	0	26	0
③	山川内	長野	3	0	3	0	0	0	0
④	舟津	田頭(雀岩)	67	1	13	21	0	28	その他 4
⑤		葛根原	72	0	8	25	0	39	0
⑥	佐瀬	穂木字都	39	0	11	24	0	4	0
⑦		小崎	1	0	0	1	0	0	0
⑧		上セメ	0	0	0	0	0	0	0
⑨		大久保	0	0	0	0	0	0	0
⑩	※須ノ瀬 は崎辺田	須ノ瀬 A	15	0	13	2	0	0	0
⑫		須ノ瀬 B	20	0	2	18	0	0	0
合計			326	1	66	102	4	148	5

第35図 字名配置図 昭和46年多良見町郷土誌掲載分

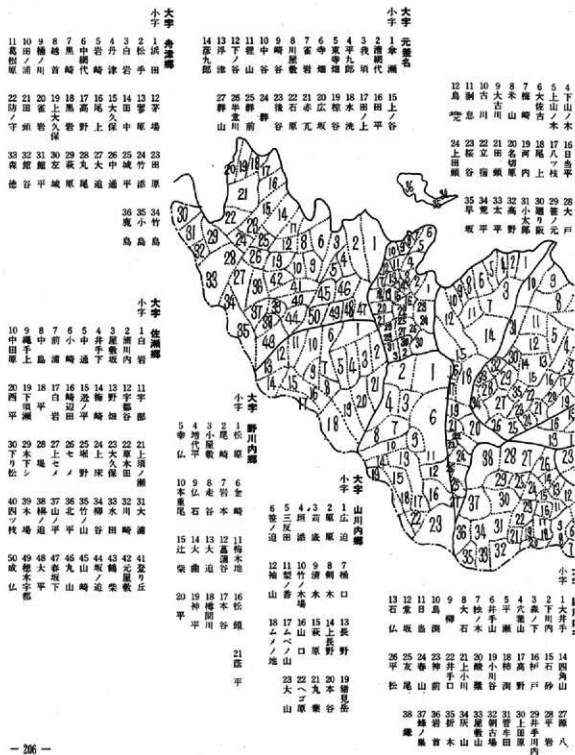
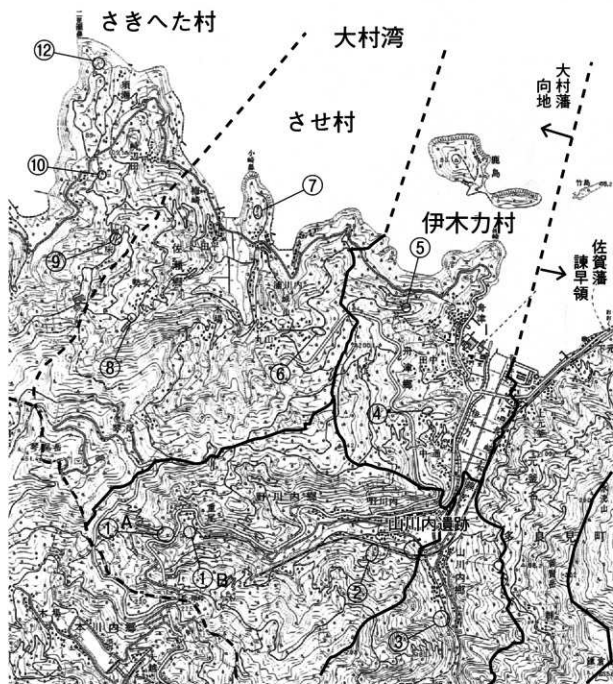


図	郷名	墓所名	図	郷名	墓所名
①	野川内	梅木地 A	⑥	佐瀬	徳木宇都
②		梅木地 B	⑦		小崎
③		平	⑧		上七メ
④	山川内	長野	⑨	奈須ノ瀬は崎辺	大久保
⑤		舟津	⑩	田	須ノ瀬 A
		葛根原	⑫		須ノ瀬 B

大 村 湾



第36図 墓所分布図 1/25,000



第37図 長墓改覚記載墓所の想定地 1/30,000

①梅木地A：多良見町野川内郷 字梅木地754-1 (1,659㎡)

立地：傾斜地、丘陵南向き斜面、標高152m～170m、集落との距離は200m以上、標高差は50m  
 造成：段造成（5～7段）、奥行き3m未満の細長い段

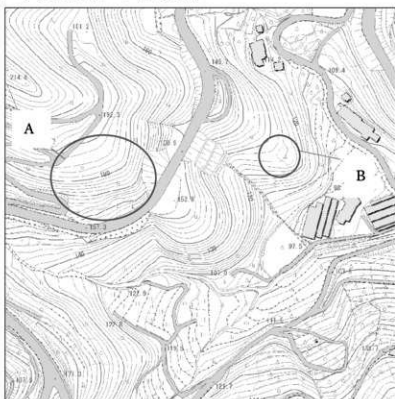
道程：下（南東）から  
 墓所の区切り：山林と現道  
 変遷：ひとつ前の墓所の上に築造

墓石：切石加工墓石、自然石立碑あり

年号：自然石立碑：文政3年（1820）

切石石塔：天保9年（1838）、  
 改化3年（1846）、  
 文政11年（1828）

調査：2020年12月23日



第38図 梅木地A 地形図 1/2,500



第39図 字図：梅木地A

①梅木地B（重尾）：多良見町野川内郷 字梅木地740（547m）

立地：傾斜地、丘陵南東向き  
 斜面、標高124～127m、  
 集落との距離は100m  
 以上、標高差は30m

造成：段造成なし

道程：下（東）から

墓所の区切り：山林と現道

変遷：江戸時代の墓と現代の

墓が混在

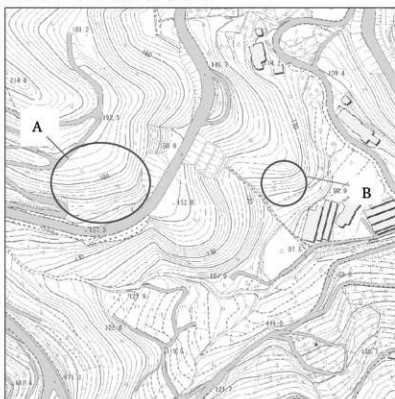
墓石：切石石塔、自然石立碑  
 あり

年号：切石石塔：宝暦3  
 （1753）年

文献：H26報告に写真掲載  
 長墓改対象地の「志げ  
 尾」墓地

特記：西側が字重尾に隣接

調査：2021年3月20日



第40図 梅木地B 地形図 1/2,500



第41図 字図：梅木地B



②平：多良見町野川内郷 字平1312 (1,540m<sup>2</sup>)、平1313 (66m<sup>2</sup>)

立地：傾斜地、丘陵斜面、南向き、標高50m～75m、集落近く(50m未満) 標高差20m

造成：段造成  
3～5mの直線的な段造成

道程：下(北側)からであったが、鉄道で切断

墓所の区切り：道、谷、畑(みかん)

変遷：同じ場所にひとつ前の墓所を整理して築造

墓石：切石加工した墓石あり、自然石立碑あり、石製仏像あり

年号：切石石塔 文化10年(1813)

文献：H26報告に写真掲載

特記：東の谷に石塔類が散布

調査：2020年12月22日



第42図 平 地形図 1/2,500



第43図 字図：平

③長野：多良見町山川内郷 字長野238 (1,095m)、238-2 (38m)、222-4 (10m)、222-5 (41m)

立地：傾斜地、丘陵東向き斜面、標高45m～60m、集落（山川内）近く（100m）標高差なし、山川内川に面する

造成：段造成、3m未満の広さ

道程：下（東）から  
墓所の区切り：畑、溝

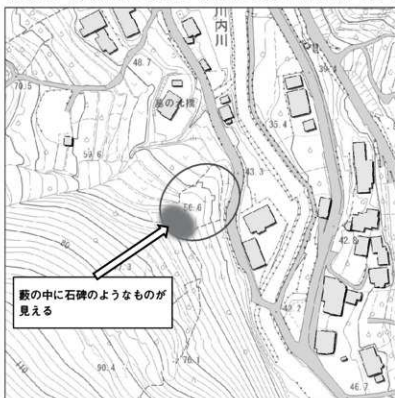
変遷：同じ場所でひとつ前の墓石などを整理して築造

墓石：切石加工した墓石あり、大型の自然石立碑2基あり、石製仏像あり

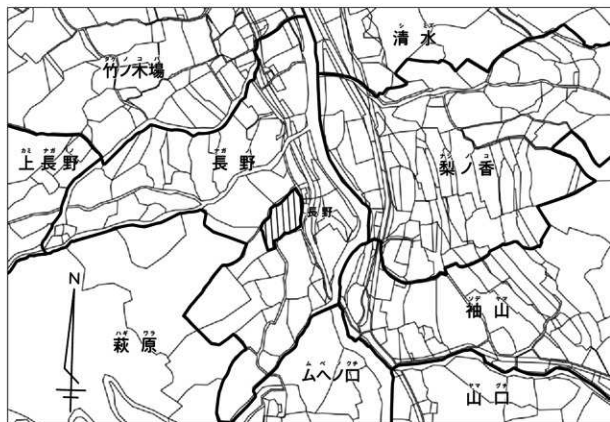
年号：自然石立碑：寛政3年（1791）、天明7年（1787）

特記：上段（西斜面）に墓地あり

調査：2021年1月12日、2月22日、3月20日



第44図 長野 地形図 1/2,500



第45図 宇図：長野

④田頭：多良見町舟津郷 宇田頭1205 (3,165㎡)

立地：傾斜地、丘陵東向き斜面、標高75m～90m、集落との距離400m、標高差55m

造成：段造成、80m～75mは平坦地、5～8mの帯状

道程：下（北東）から、溜池の堤を通る道あり

墓所の区切り：北側の谷と道、東は畑、南は谷

変遷：ひとつ前の墓所の上に新しい墓所を築造

墓石：切石加工墓石、自然石立碑あり、石製仏像あり

年号：元文3年(1738)、延享4年(1747)、明和2年(1765)、寛政10年(1790)

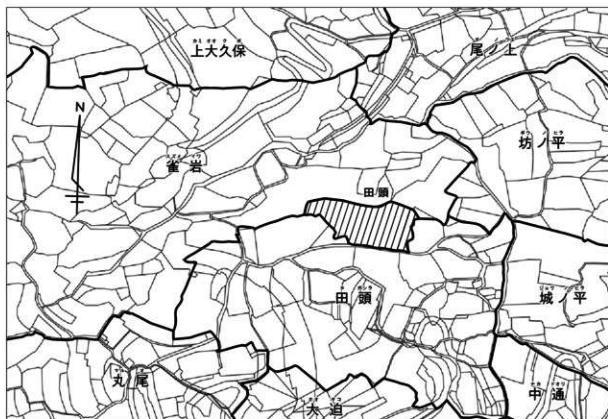
特記：字名久保が隣接する。田中ため池側に江戸時代の墓地あり(字雀岩)寄せて集積された墓石(切石加工江戸期)が多い

採集品：11点 18C 初頭～中頃

調査：2020年12月23日、2021年3月20日



第46図 田頭 地形図 1/2, 500



第47図 字図：田頭

⑤葛根原：多良見町舟津郷 字葛根原422 (1,795㎡)

立地：平坦地、丘陵頂部東向き、標高115m、集落との距離400m、標高差90m

北は字越首、東は字舟津、西は字高野、南は字蓼原字越首・字高野は墓地と隣接

造成：平坦、南北30m、東西70m

道程：下(南)からの道あり  
墓所の区切り：道、畑との段変遷：ひとつ前の墓所の上に新しい墓所を築造

墓石：切石加工あり、石製仏像あり

年号：切石石塔：嘉永3年(1850)、安政3年(1774)、文化5年(1808)

調査：2020年12月23日



⑥穂木宇都：多良見町佐瀬郷 字大平2222 (1,983m)、穂木宇都2193 (3,859m)

立地：傾斜地、丘陵北西向き斜面、標高100m～130m、集落から離れている

造成：段造成、3～5mの帯状

道程：下（西）からの道

墓所の区切り：道、谷

変遷：一つ前の墓所を残して、  
下に新しい墓所あり

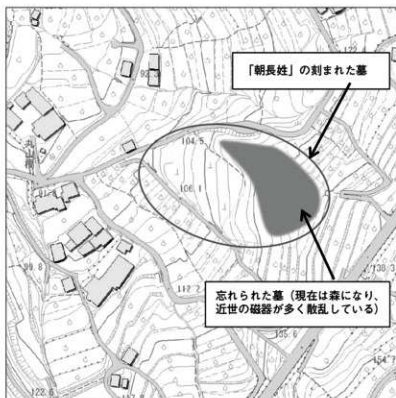
墓石：切石加工と自然石立碑  
あり、石製仏像あり

年号：切石石塔：文久2年  
(1862)、宝暦5年  
(1755)、享保14年  
(1729)

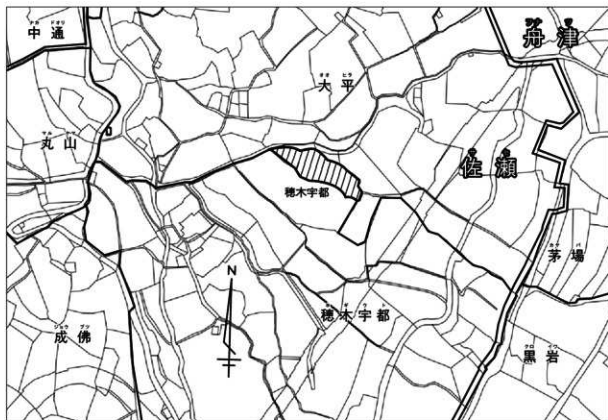
自然石立碑：享保8年

文献：長墓改対象地「なりやうづ」墓所の庄屋（朝長庄左衛門）の子孫の墓確認「法名釈 教山 信士 靈位 / 享保八年」「享保二十年 / 妙法朝長 収大藤原正貞之墓」(1735)

調査：2020年12月23日



第50図 穂木宇都 地形図 1/2,500



第51図 宇図：穂木宇都



第52図 穂木宇都 地形略測図 1/1,000

⑦小崎：多良見町佐瀬郷 字小崎870-1 (449m)

立地：岬の頂部、平坦地、標高42m

造成：平坦

造成範囲：南北30m、東西15m

道程：尾根上の南地道

墓所の区切り：道、畑

変遷：同じ場所にひとつ前の

墓所を整理して築造

墓石：切石加工した墓あり、自然石立碑あり

年号：自然石180cm→享保8年(1723)享和(1801~1804)、文化5年(1808)、安永6年(1777)

調査：2020年12月22日



第53図 小崎 地形図 1/2,500



第54図 宇図：小崎

⑧上セメ：多良見町佐瀬郷 字上セメ1287-2 (380㎡)

立地：丘陵平垣、東向き丘陵、  
標高160m～165m

造成：平坦造成

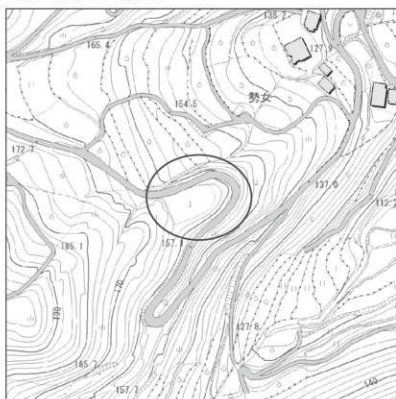
造成範囲：南北20m、東西40  
m

道程：下（北東）から

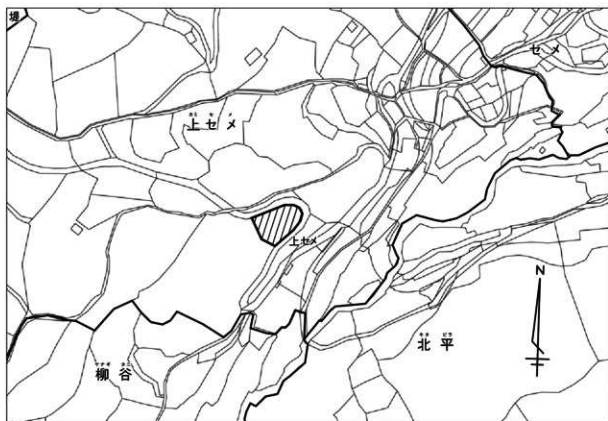
墓所の区切り：谷、切岸

墓石：切石加工、自然石立碑  
あり

調査：2020年12月22日



第55図 上セメ 地形図 1/2,500



第56図 字図：上セメ



⑨大久保：多良見町佐瀬郷 字大久保414 (504m)

立地：丘陵平地、標高197  
m

造成：小規模平坦、20m<sup>2</sup>

道程：下（南）からと上（北）  
からと道あり

墓所の区切り：畑

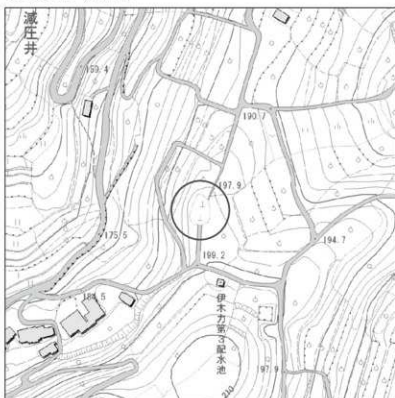
変遷：新しい土地に新しい墓  
所を築造

墓石：切石加工あり、自然石  
立碑あり

年号：昭和の墓所建立碑あり  
(柴田家他)

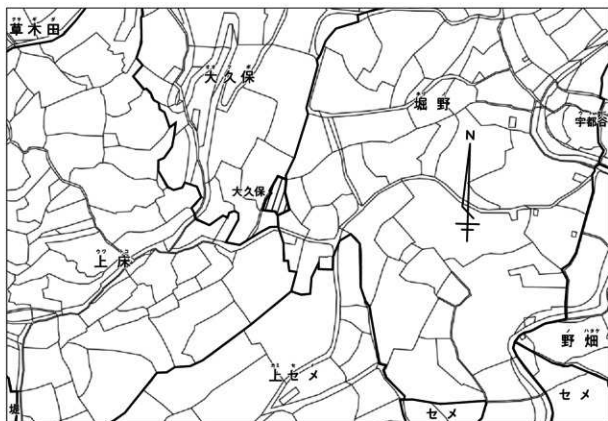
特記：字名の上床が隣接する  
明治33年地形図は未掲  
載

柴田さん他数名で新し  
い墓所をつくった（昭  
和）



第57図 大久保 地形図 1/2,500

調査：2020年12月22日



第58図 宇図：大久保

⑩須ノ瀬A（崎辺田）：多良見町佐瀬郷 字須ノ瀬447-1（2,447m<sup>2</sup>）

立地：平坦地、北向き丘陵の平垣部、標高86m～90m、集落から離れている

造成：平坦地造成

道程：東からの道あり、溜池あり

墓所の区切り：道、切岸

変遷：同じ場所にひとつ前の墓所を整理して築造

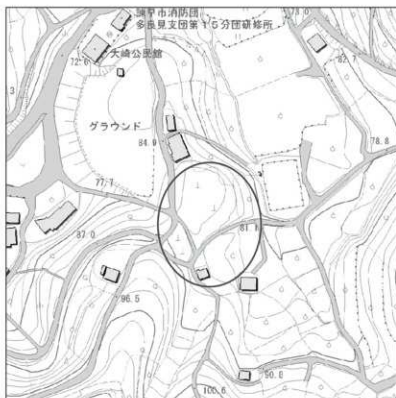
墓石：切石加工した墓石あり、自然石立碑あり（170mくらい）

年号：享保8年（1723）、享保10年（1725）、安永2年（1773）

文献：多良見町郷土誌（平成7年発行）782～784ページ「今道助右衛門の墓」（古い庄屋の一族）

特記：明治33年地形図あり  
自然石を立てて、そのまゝに板状石をならべる墓地あり

調査：2020年12月22日



第59図 須ノ瀬A 地形図 1/2,500



第60図 字図：須ノ瀬A

⑫須ノ瀬B：多良見町佐瀬郷 字須ノ瀬524 (315㎡)

立地：岬の頂部平坦地、標高68m

造成：平坦造成、20㎡

道程：南から

変遷：同じ場所にひとつ前の墓所を整理して築造

墓石：切石加工あり、自然石立碑あり

年号：明和6年(1769)楠木家

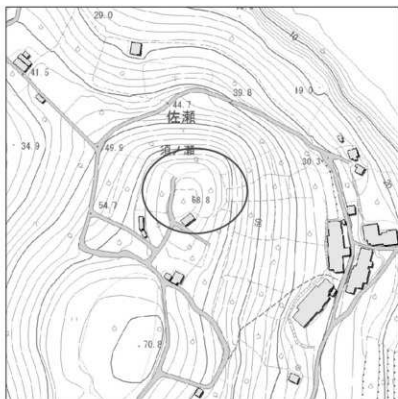
文献：多良見町郷土誌(平成7年発行)782~784ページ

楠本五郎助の墓 生前の業績を記す

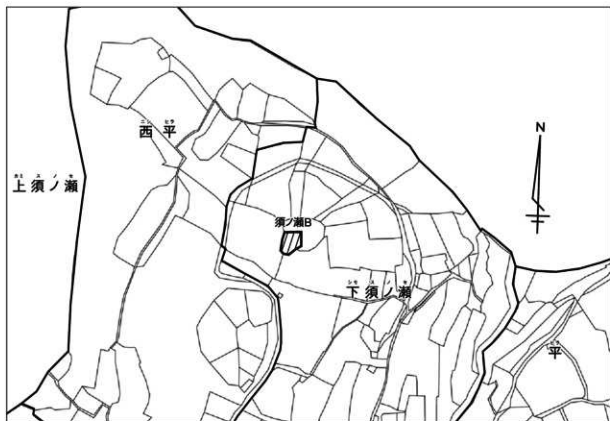
特記：明治33年地形図掲載あり

近年、墓所整理された様子(2021現地)石板を並べた墓地あり、近年、墓地改修が行われたため遺物の散布が多い

調査：2021年1月12日



第61図 須ノ瀬B 地形図 1/2,500



第62図 字図：須ノ瀬B



写真136 伊木力・佐瀬墓所（梅木地A）自然石墓碑紀年銘「文政3年6月10日」



写真137 伊木力・佐瀬墓所（梅木地B）自然石立碑2基、切石加工墓碑紀年銘「宝暦3年」



写真138 伊木力・佐瀬墓所（平）斜面上の段造成や自然石立碑と切石墓碑の並立状況



写真139 伊木力・佐瀬墓所（長野）紀年銘（左 標柱状墓碑：天明7年、右 板碑：寛政3年）



写真140 伊木力・佐瀬墓所（田頭）（右上：切石墓碑紀年銘（元文3年）、右下寛政10年）



写真141 伊木力・佐瀬墓所（葛根原） 遠景と近景



写真142 伊木力・佐瀬墓所（穂木宇都） 右上：墓所内通路  
右下：紀年銘（宝暦5年）、側面銘文（朝長収大藤原正貞墓）



写真143 伊木力・佐瀬墓所（穂木宇都） 墓所内の状況



写真144 伊木力・佐瀬墓所（小崎） 遠景・自然石墓碑2例



写真145 伊木力・佐瀬墓所（大久保） 遠景・近景・自然石墓碑転用例



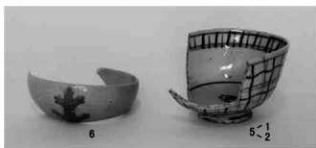
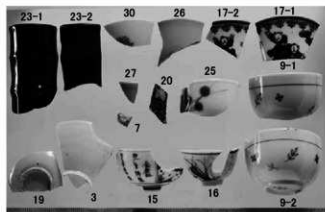
写真146-1 伊木力・佐瀬墓所（須ノ瀬A）遠景・近景・自然石墓碑（伏石並列）



写真146-2 須ノ瀬A 自然石墓碑（伏石の奥に立碑） 今道助右衛門関係の墓碑2基



写真147 伊木力・佐瀬墓所（須ノ瀬B）遠景  
右上2点：並立する墓石、右下：自然石墓碑と伏石



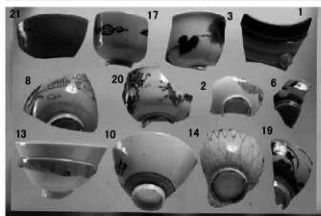
梅木地 A



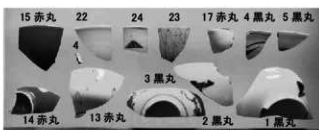
梅木地 B

写真148 墓所採集品 (梅木地 A・梅木地 B)





梅木地 B



平

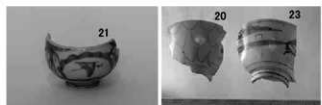
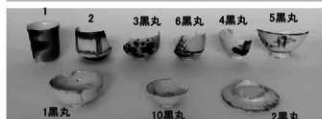
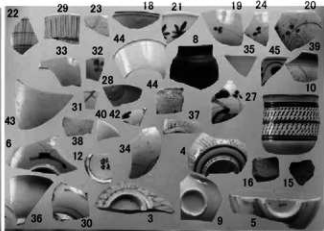
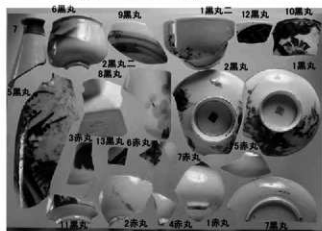


長野

写真149 墓所採集品 (梅木地B・平・長野)



田頭



葛根原

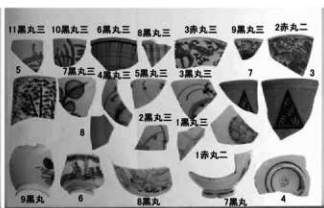
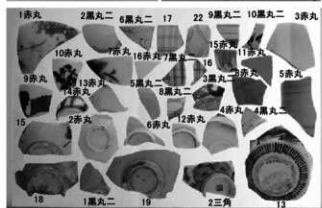
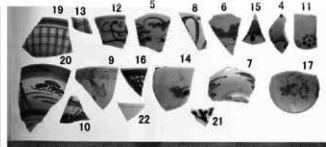
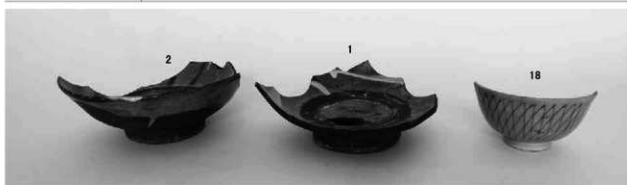
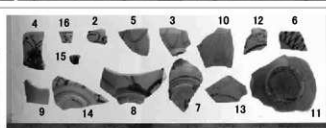
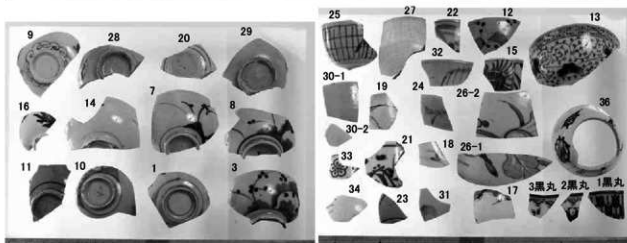
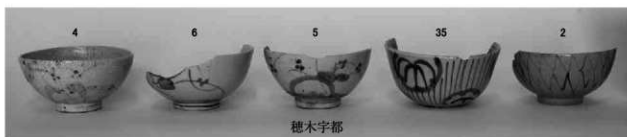


写真150 墓所採集品（田頭・葛根原）



須ノ瀬B

写真151 墓所採集品 (穂木宇都・小崎・須ノ瀬A・須ノ瀬B)

表18 伊木力・佐瀬墓所採集品属性

凡例 番号は遺物に記入した情報(墓所番号・日付・個別番号)のうち個別番号のみ(例) 注記: 1.. →1黒丸2

梅木地A		
番号	重量(g)	時代性
1	170.8	18世紀末～19世紀前半
2	102	1810～1860年
3	34.7	近代
4	89.4	18世紀後半
5	135.9	1810～1860年(2点接合)
6	48.1	18世紀前半
7	2.2	石
8	224.6	明治
9	108.4	現代(2点)
10	130.9	近現代
11	115	大正～昭和初期
12	87.7	大正～昭和初期
13	55.5	大正～昭和初期
14	71.3	大正～昭和初期
15	26.3	大正～昭和初期
16	18.5	近代
17	25.4	近現代(2点)
18	35.6	昭和初期
19	35.9	近代
20	4.7	明治初期
21	44.2	近代
22	—	欠番
23	75	戦後(2点)
24	252.3	近現代
25	18.3	近現代
26	14.9	近現代
27	2.6	近現代
28	57.6	近現代
29	73.2	近現代
30	7.2	近現代

梅木地B		
番号	重量(g)	時代性
1	47	江戸
2	27.3	江戸
3	34	近現代
4	0.1	江戸
5	78.9	18世紀前半
6	21.9	18世紀前半
7	126.8	18世紀前半
8	54.8	19世紀前半
9	109.3	明治～大正
10	72.9	大正～昭和
11	114.3	18世紀前半
12	194.7	1810～1860年(2点)
13	73.4	19世紀前半
14	75.4	18世紀前半
15	63.1	18世紀前半
16	91.3	明治
17	43.8	19世紀前半
18	43.3	19世紀前半
19	37.5	19世紀中頃～後半
20	48.1	明治～大正
21	31.1	不明
22	6.7	近代
23	7.5	18世紀前半
24	4.8	近代
1黒丸	50.5	現代
2黒丸	33	明治～大正
3黒丸	12.1	近世
4黒丸	3.6	明治
5黒丸	3.6	19世紀前半
1赤丸	306.6	現代

梅木地B		
番号	重量(g)	時代性
2赤丸	169	現代
3赤丸	125.3	現代
4赤丸	120.3	現代
5赤丸	119.6	現代
6赤丸	95.8	現代
7赤丸	72.7	現代
8赤丸	63.5	現代
9赤丸	58.9	戦後
10赤丸	55.5	現代
11赤丸	50.2	現代
12赤丸	41.2	現代
13赤丸	19	戦後
14赤丸	9.7	現代
15赤丸	10.4	現代
16赤丸	9.3	現代
17赤丸	3.9	現代

平		
番号	重量(g)	時代性
1	15.6	近代
2	5.1	18世紀前半
3	6.6	18世紀
4	54	19世紀前半
5	66.8	18世紀
6	46.8	18世紀後半
7	7	18～19世紀
8	87.7	18世紀前半
9	47.7	大正
10	107.7	大正
11	13.2	明治
12	28.5	明治
13	127.3	明治～大正
14	1.7	明治
15	3.3	明治
16	156.9	18世紀後半
17	32.5	大正
18	378.9	明治
19	141.2	戦時中
20	13.5	近代
21	32.3	近代
22	2.7	近代
23	11.8	近代
24	18.4	近代
25	5.6	近代
26	5.6	近代
27	30	近代
28	1.5	近代
29	31.6	近代
30	19.3	近代
31	12.7	近代
32	18.3	近代
33	33.9	近代
34	4.6	近代
35	—	近代(29と接合)

長野		
番号	重量(g)	時代性
1	35.3	18世紀初頭～中頃
2	1.6	18世紀初頭～中頃
3	8	18世紀初頭～中頃

出頭		
番号	重量(g)	時代性
1	660.9	17世紀後半
2	87.1	18世紀
3	39	18世紀前半
4	37.5	19世紀前半
5	48.7	18世紀
6	25.9	18～19世紀
7	20.1	近代
8	21.1	不明
9	16.3	近現代
10	54.1	現代
11	18.1	近現代
12	7.4	現代
13	96.2	19世紀前半
14	92.4	19世紀前半
15	3.5	土師片
16	5.9	中世か
17	73.1	19世紀後半
18	4.6	不明
19	11.4	18世紀
20	11.8	18世紀
21	5.4	明治
22	7.7	19世紀前半
23	3.6	18世紀後半
24	8.2	18世紀後半
25	92.1	18世紀
26	115.1	18世紀前半
27	8.9	18世紀
28	5	18世紀前半
29	8.2	19世紀
30	16.9	19世紀
31	1.8	18～19世紀
32	2.8	18～19世紀
33	9.4	18～19世紀
34	18.9	18～19世紀
35	3.2	18～19世紀
36	16	19世紀江戸
37	4.5	19世紀江戸
38	4.7	19世紀江戸
39	7.7	19世紀江戸
40	3.6	19世紀江戸
41	12	18世紀
42	3.1	19世紀後半
43	16.7	19世紀後半
44	8	19世紀後半
45	3.7	19世紀後半
1黒丸	85.8	近代
2黒丸	79.8	近代
3黒丸	75.8	近代
4黒丸	68.1	明治
5黒丸	66.4	近代
6黒丸	41	近代
7黒丸	34.5	明治
8黒丸	23.6	近代
9黒丸	16.9	近代
10黒丸	12.4	近代
11黒丸	11.8	近代
12黒丸	6.8	近代
13黒丸	2.5	近代
1黒丸二	38	現代
2黒丸二	27.2	現代
1赤丸	27.2	近代
2赤丸	25.8	近代
3赤丸	8.7	近代
4赤丸	7.3	近代
5赤丸	5.7	近代
6赤丸	3.9	近代

出頭		
番号	重量(g)	時代性
7赤丸	1.2	近代

葛根原			9.10.11は欠番
番号	重量(g)	時代性	
1	91.8	現代	
2	88.4	現代	
3	29.2	現代	
4	23.2	近代	
5	18.3	昭和40年代	
6	16.2	近代	
7	9.8	現代	
8	7.1	近代	
12	73.9	19世紀	
13	65.1	19世紀	
14	101.9	19世紀、江戸	
15	30	19世紀	
16	2.3	19世紀前半	
17	6.5	19世紀前半	
18	34.3	19世紀前半	
19	71.6	18～19世紀	
20	36	18世紀後半	
21	132.4	18世紀後半～19世紀	
22	8.3	18世紀後半	
23	51.8	1850～1860年	
1黒丸	73.8	現代	
2黒丸	71.3	現代	
3黒丸	65.3	近現代	
4黒丸	60.5	近代	
5黒丸	51.5	近代	
6黒丸	40.4	明治	
7黒丸	36.2	近代	
8黒丸	31.8	近代	
9黒丸	26.6	近代	
10黒丸	21	近代	
1黒丸二	11.9	18～19世紀	
2黒丸二	10.3	18～19世紀	
3黒丸二	8.6	18～19世紀	
4黒丸二	5.8	18～19世紀	
5黒丸二	5.4	18～19世紀	
6黒丸二	4.8	18～19世紀	
7黒丸二	4.5	18～19世紀	
8黒丸二	3.9	18～19世紀	
9黒丸二	3.5	18～19世紀	
10黒丸二	2.1	18～19世紀	
1黒丸三	5.8	18世紀後半	
2黒丸三	8.3	18世紀後半～19世紀	
3黒丸三	10.7	18世紀後半～19世紀	
4黒丸三	13.4	18世紀後半～19世紀	
5黒丸三	8.6	18世紀後半～19世紀	
6黒丸三	14	19世紀江戸	
7黒丸三	12.8	19世紀江戸	
8黒丸三	4.3	19世紀江戸	
9黒丸三	3.1	19世紀前半	
10黒丸三	8.3	19世紀後半	
11黒丸三	7.7	19世紀後半	
1赤丸	24	近現代	
2赤丸	22.3	近現代	
3赤丸	20.3	近現代	
4赤丸	19.7	近現代	
5赤丸	17.6	近現代	
6赤丸	15.3	近現代	
7赤丸	10.6	近現代	
8赤丸	9.7	近現代	
9赤丸	8.4	近現代	
10赤丸	7.9	近現代	
11赤丸	7.4	近現代	

葛根原 9, 10, 11は欠番		
番号	重量(g)	時代性
12赤丸	6.9	近現代
13赤丸	6.6	近現代
14赤丸	6	近現代
15赤丸	4.8	近現代
16赤丸	2.6	近現代
1赤丸二	13.2	近代
2赤丸二	12.6	近代
3赤丸二	11.7	近代
1瓦	106.1	近代
2三角	29.2	近代

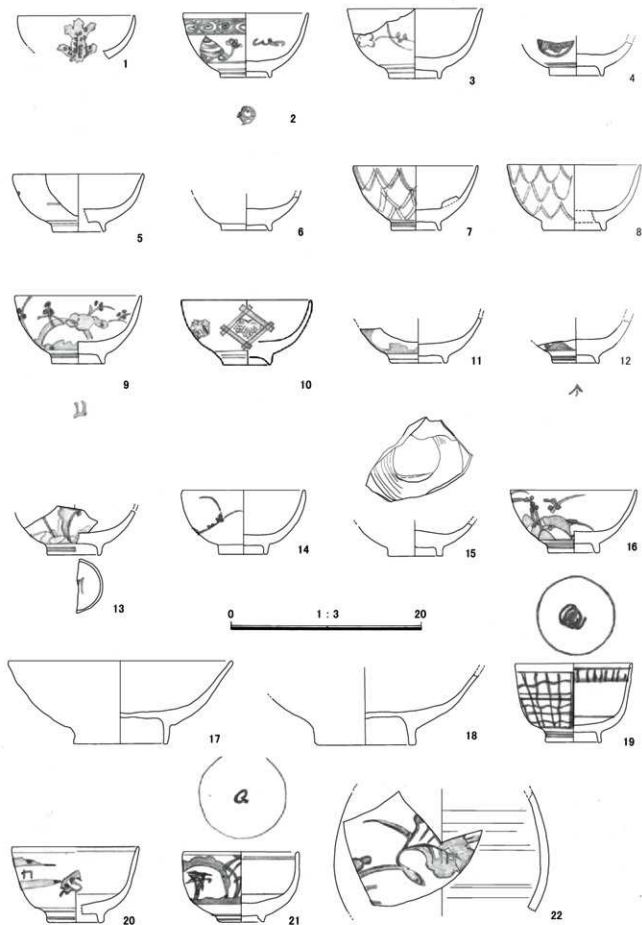
須ノ瀬A		
番号	重量(g)	時代性
8	38.4	18世紀
9	5.6	18世紀前半
10	14.5	18世紀前半
11	83.8	18世紀初頭
12	5	18～19世紀
13	11.9	18～19世紀
14	24.9	18世紀前半
15	0.5	18世紀前半
16	1	近代

榑木字都		
番号	重量(g)	時代性
1	59.8	18～19世紀
2	106.1	18～19世紀
3	63	18～19世紀
4	197.4	18世紀
5	144.9	18世紀後半
6	144.8	18世紀前半
7	66.2	18世紀
8	63.4	18世紀
9	62	18世紀後半
10	82.1	18世紀
11	38.7	18世紀
12	15.9	18世紀後半
13	40.2	19世紀
14	57.4	18世紀前半
15	8.9	19世紀前半
16	12.5	19世紀
17	9.2	19世紀
18	4.2	19世紀
19	9	19世紀
20	28.4	19世紀
21	14.7	19世紀
22	5.8	19世紀
23	7.9	18～19世紀
24	7.8	18～19世紀
25	33.9	19世紀前半
26	75	19世紀 (2点)
27	29.3	19世紀
28	51.3	18世紀前半
29	57.9	18～19世紀
30	17.9	18～19世紀 (2点)
31	7.5	19世紀
32	9.5	19世紀前半
33	3.5	明治～大正
34	12.7	19世紀
35	162.2	19世紀前半
36	50.5	19世紀初頭
1黒丸	5.9	近代
2黒丸	4.8	近代
3黒丸	3.5	近代

須ノ瀬B		
番号	重量(g)	時代性
1	322.9	18世紀～19世紀
2	392.1	18世紀～19世紀
3	74	18世紀後半
4	5.7	18世紀後半
5	9.5	18～19世紀
6	8.2	18～19世紀
7	22.2	19世紀
8	5	19世紀前半
9	9.8	19世紀
10	4.2	19世紀
11	7.4	18世紀後半～19世紀
12	8	19世紀
13	1.9	19世紀
14	15.8	19世紀
15	3.3	19世紀
16	3.7	19世紀前半
17	22.2	19世紀
18	133.3	19世紀前半
19	13.2	19世紀
20	27.3	19世紀中～後半
21	3.1	近代
22	1.8	近代

小崎		
番号	重量(g)	時代性
1	12.4	19世紀

須ノ瀬A		
番号	重量(g)	時代性
1	148.4	18世紀初頭～中頃
2	3.5	18世紀
3	12.1	18世紀
4	8.1	18世紀
5	7	18世紀
6	4.1	18世紀
7	30.4	18世紀後半



第63図 採集品 実測図 1/3

表19 伊木力・佐瀬墓所採集品観察表

番号	種別	場所	口径	器高	高台径	時代性	地点情報	備考
1	染付碗	梅木地A	9.3	-	-	18c 前半	梅木地 A-6	
2	染付碗	田頭	10	5.1	4.3	18c 前	田頭26	
3	染付碗	徳木字都	(10.8)	5.5	4.2	18c 前半	徳木字都-6	
4	染付碗	徳木字都	-	-	4.3	18c 前	徳木字都-28	
5	染付碗	徳木字都	(10.4)	4.6	(4.2)	18c 前	徳木字都-14	文様不明
6	青磁皿	須ノ瀬	-	-	4	18c 初	須ノ瀬 A-11	
7	染付碗	平	9.5~10.0	5.1	4.84.9	18c 後	平-16	
8	染付碗	葛根原	(10.6)	5.2	(5.2)	18c 後	葛根原-20	
9	染付碗	徳木字都	10	5.4	4.2	18c 中~後	徳木字都-5	ゆがみあり
10	染付碗	須ノ瀬	(10.2)	5	3.9	18c 初~中頃	須ノ瀬 A-1	
11	染付碗	田頭	-	-	4.6	18c	田頭-25	生焼け
12	染付碗	徳木字都	-	-	3.5~3.8	18c	徳木字都-10	ゆがみあり
13	染付碗	徳木字都	-	-	4.4	18c	徳木字都-8	
14	染付碗	須ノ瀬	(9.8)	5.1	3.8	18c	須ノ瀬 B-3	焼成不良
15	青磁皿	葛根原	不明		4.6	18c~19c	葛根原-19	
16	染付碗	徳木字都	9.8~10.2	4.9~5.1	4.1	18c後~19c初	徳木字都-4	略完形 生焼け ゆがみ
17	陶器鉢	須ノ瀬 B	18	6.6	7.5	18c~19c	須ノ瀬 B-1	
18	陶器鉢	須ノ瀬 B	-	-	7.7	18c~19c	須ノ瀬 B-2	
19	染付碗	梅木地A	9.5~10.7	6.3	4.4	1810~1860	梅木地 A-5	
20	染付碗	葛根原	(10.2)	6	(4.6)	1850~1860	葛根原-23	
21	染付碗	葛根原	7.5~10	5.6	3.6	18c後~19c初	葛根原-21	焼けひずみあり
22	染付瓶	徳木字都	-	-	-	19c	徳木字都-26	



## 第2節 伝西川内マリア観音像の科学的分析結果

### 1 はじめに

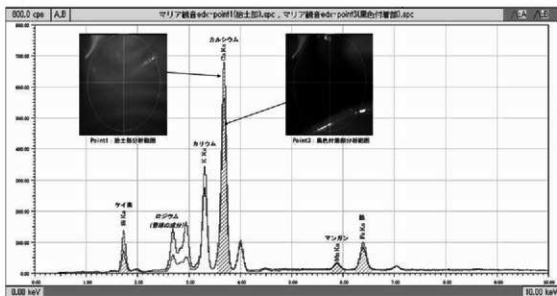
キリシタン遺跡等調査指導委員会の指摘を受け、伝西川内マリア観音像（写真152）に付着する黒色物質について非破壊で科学的調査を実施した。

### 2 調査内容と結果

- ①実体顕微鏡で10倍～20倍で黒色物質を拡大観察した結果、黒い物質は薄く均等に堆積しており、像自体に付着している様子が確認できた。（写真153右下）膜状に剥離するところもあり、層状に堆積している可能性がある。黒ではなく茶色い部分もある。
- ②透過X線撮影装置（いわゆるレントゲン）を用いて、像内部の構造調査及び付着黒色物質の材質推定を行なった結果（写真153左上）、黒色物質付着箇所において極端な濃淡の差異は見られず、金属元素を含む顔料の付着ではないことが分かった。
- ③赤外線は炭素（元素記号C）に吸収される性質があり、また波長が長い（エネルギーの小さい）電磁波であることから空気や細かいゴミなどに散乱吸収されにくく、墨書土器や絵画の下絵の観察などに利用されている。赤外線カメラで伝西川内マリア観音像を撮影したところ（写真153右上）、黒い物質については黒く反応していたため、この黒色物質は炭素を主成分とする物質であると推測された。茶色箇所については、赤外線カメラでの反応は観られなかった。
- ④蛍光X線分析は、資料にX線を照射することで資料表面から二次的に発生する蛍光X線を検出し、そのエネルギーを調べることで、どのような元素が含まれるか分析することができる。黒色物質の付着部と非付着部とで分析し比較したところ、検出元素に大きな差はみられなかった（第64図）。

### 3 まとめ

以上の結果から、伝西川内マリア観音像に付着している黒色物質は、黒色顔料ではなく、炭素を主成分とする墨もしくは煤であると考えられる。墨は煤や炭を膠などで固めたもので、顕微鏡観察でみられた茶色い粒が膠であるならば墨となり、意図的に塗られた可能性もあるが、夜中に伝西川内マリア観音像を照らす目的で蠟燭などが至近距離で使用されていたのであれば、蠟燭由来の煤が伝西川内マリア観音像全体に付着し、布などで清掃する際に拭き残ったものが溝状の凹部に残存したものと考えられる。（片多）



第64図 伝西川内マリア観音像分析結果



写真152 伝西川内マリア観音像

右側面 正面 左側面

背面 内部





写真153 左上 透過X線画像  
右上 赤外線反射画像  
右下 煤付着部分拡大画像

### 第3節 伝西川内マリア観音像の実測・撮影

#### 1 伝西川内マリア観音像の実測作業

実測図の作成にあたり、3D用の撮影を行い伝西川内マリア観音像の形状を記録した。3D・オルソ画像の作成をし、それを基にイラストレーターソフトを用いて実測図の作成を行った。

椅子に腰掛ける人物像を象った中国製の白磁で釉薬が厚くかかる仕上げである。

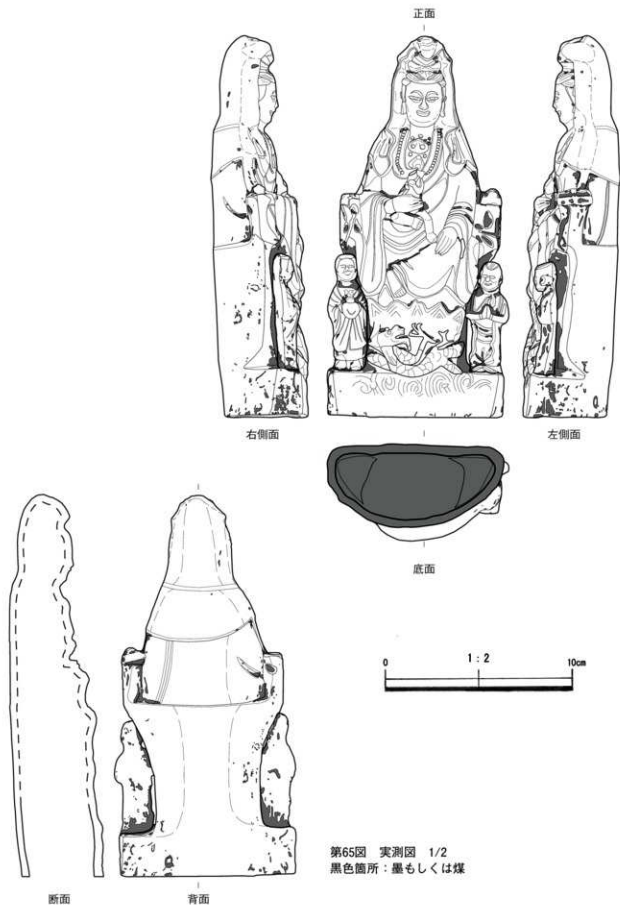
衣をまとった人物が椅子に腰掛け、左足裏を見せるように両足を交差した姿勢をし、腹部には子どもを抱きかかえている。椅子の両側には童子が1人ずつ直立する。頭部は高く髪の毛が結び上げられ、その上から布で覆われており、首元には丸い玉を連ねた垂飾品と大きな装飾品がある。左手は自然にひざに置かれ、右手に幼児を抱いている。椅子の両側に立つ童子のうち、向かって右側の童子は合掌しており、左側の童子は手に水晶のような丸い玉を持っている。台座は蓮の花を模したように三角の浮き彫りが5個あり、表面に円形や楕円の線彫りが見える。その下には竜が台座を支えているように表現されている。基部には渦巻くような模様は薄く施されている。人物の装飾品、手の指、衣の皺、竜の鱗など、細かいところまで丁寧に表現された像である。しかし背面は、人物、両側の童子とも装飾などはなく簡素なつくりであり、両側の童子に関しては背面が平面で表現されており、像自体が正面から拝むためのものということが伺える。内外面ともに、刻印など産地を示す痕跡は確認できない。

測定したところ、全高20.1cm、椅子の肘掛までの高さ12cm、基部のみの高さは2.5cm、最大幅は9.9cm、奥行き最大幅は5cm、断面の厚さ4mmで中は空洞である。

人物の右手に抱かれている幼児は左腕と両足が確認できるが、頭部と右腕が欠損しており、椅子の右の肘掛部分の装飾にも欠損が見られる。



写真154 伝西川内マリア観音像オルソ画像



## 2 伝西川内マリア観音像の発見に関する記録

1971年（昭和46）発行の『多良見町郷土誌』によると、「森高勝馬氏の仏壇には「子安観音」という白磁の焼物製の観音像が祭られ、産婦が近郊から参詣して安産を祈願すると云っているが、この像は「かくれ切支丹の拝み像でマリア観音像」ではないかと、識者は見ている。又大山山中には人が這入れれるほどの洞窟があって、祭壇もあり、山を越ゆれば川平であり、その方面からキリシタン徒がここに隠れて祭ったのだと伝えている。」と記載される。

1995年（平成7）発行の『多良見町郷土誌』には、「『マリア観音』といわれている一体の『観音像』が、西川内名鳥淵二五番地に住んでいる森高信氏宅に安置されている。どうしてこの家に伝来しているのか、語りつぐその経緯は、三、四代前の家族が山で作業中見つけたというが、これも全く不確かなようだし、全く解っていないのが実状だ。自磁製のものが、仏壇から煤けて出てきたので拭ったという。」と記載される。

2023年（令和5年12月）に現所有者に聞き取りを行ったところ、「夏休みに西川内の親類宅へ遊びに行った時の記憶では、床の間に飾ってあったことは覚えている」、「またその発見は裏の竹やぶの中で発見されたと聞いている」。という証言を得た。

所有者も変わり当初の記憶が失われつつあるが、1971年（昭和46）の記録にある「床の間の仏壇に安置され安産祈願のために近くの人が参詣していた」というのが基本的な伝承である。安産祈願は出産という人生儀礼のひとつで、安産への願いという普遍的な信仰に由来する。寺社仏閣ではなく個人の家という閉鎖的空間において、安産祈願のために近隣から人が参集するというのが、西川内地域に伝わる中国で作製された観音像に関する伝承の本質であろう。

また発見地の西川内は大村藩、天領の古質と接しており、戦国時代は領地争いが頻繁に行われた地域である。1995年『多良見町郷土誌』には、1579年（天正7）に洗礼を受けたキリシタン大名の有馬晴信により、喜々津の城（現金尾城）が1582年（天正10）に有馬晴信の支城になり、有馬晴信に従う者はキリシタンに改宗するなど、当時喜々津には相当な数のキリシタンがいたと想定されるとの記載がある。1995年（平成7）の多良見町郷土誌の発行時に行った調査では、当時の調査員から伝西川内マリア観音像が伝わっていた森高氏の家紋が木瓜紋だったという記憶があると伺った。木瓜紋は家紋の中でも歴史が古く、寛政年間に編纂された『寛政重修諸家譜』には、肥前国大村藩大村氏の家紋が木瓜であったという記録もあり、発見地がキリシタンの影響を受けていたことは明らかなようである。

さらに西川内はいわゆる袋状集落で、集落の入り口付近に民家が密集しており、四方は山に囲まれている。発見地は集落の入り口付近で、そこから北西に向かった場所には、元禄年間の銘があるという古い墓地があり、江戸時代からこの地域に人が密集していたことが伺える。

西川内に隣接する山川内には旧往還道（長崎往還）が通っており、山を越えると長崎の畦別当につながり、天領の長崎へ行く道がある。1971年『多良見町郷土誌』によると、この道は激しい坂道で、諫早領との領境を通るので特に取り締まりが厳しいところであったという。西川内からもこの道に繋がる道があるとされ、キリシタンが多かったとされる長与とも近いという地理的状況も備えている。

安産祈願とキリシタン信仰に関しては、「子安観音」とキリシタンの関係についての高



第66図 発見地周辺地形図 1/50,000

田茂氏の研究がある。高田茂氏は『聖母マリア観音 御姿と伝承』（1972年）において、子安観音の呼称は、江戸幕府の禁教令を受け、キリシタン信徒の間で重要視するようになり、聖母マリア像の姿を聖母子観音菩薩像に習合したと述べている。仏教の観音菩薩像に幼児キリストを抱かせた「子安観音像」が、聖母マリアのイメージと重なり好都合であったため「聖母マリア観音」と称していたということである。

また、安高啓明氏は『浦上四番崩れ』（2016年）の中で、「マリア観音像のおおくは、中国貿易を通じてもたらされた明・清時代の17世紀に徳化窯で製作された慈母観音像である。この慈母観音像を聖母マリアとかさねあわせて祈りをささげていたのである。これは疑似信仰の一種ではあるが、外見は慈母観音にすぎないことから、潜伏キリシタンは信仰をカモフラージュすることができた。」と述べている。

あくまでも憶測ではあるが、周辺の歴史地理の状況や調査時の木瓜紋の家紋から、安産祈願という伝承は、西川内にいたキリシタンが潜伏するために行った信仰のカモフラージュで、それが伝西川内マリア観音像に係る伝承として記憶されたのではないか。

### 3 伝西川内マリア観音像の類例

伝西川内マリア観音像は中国の徳化窯が原産地と推定され、その類例として東京国立博物館所蔵品2点を紹介する。写真155は中国・徳化窯の白磁製、明～清時代（17世紀）の作、高さ18.8cmである。背の付札に「『七十九／高野』仙次郎／『五』」とある。写真156は中国・徳化窯の白磁製、高さ18.8cm、江戸時代（19世紀）の作で、1856年（安政3）の浦上三番崩れの際に浦上にて収納された長崎奉行所旧蔵品である。

この類例以外にもマリア観音像の類例はあり、その入手ルートや発見に至るまでの状況、類例のマリア観音像に付着する煤の成分分析などの体系的な分析と合わせて考える必要がある。



写真155 マリア観音像  
東京国立博物館 所蔵

出典：国立文化財機構所蔵品総合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/trm/C-606?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/trm/C-606?locale=ja))

写真156 マリア観音像  
東京国立博物館 所蔵

出典：国立文化財機構所蔵品総合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/trm/C-621?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/trm/C-621?locale=ja))



## 第4節 高城跡採集品

### 1 採集品の数量と分布（第68図～第74図、表20～表21）

本節で紹介する採集品は、事業期間中に借用した個人所有分24点を中心に、第68図～第74図に示す焙烙片1点、土師質土器の小型の皿1点、陶磁器類3点、瓦38点である。瓦の内訳は、軒丸6点、軒平7点、鯨瓦1点、鬼瓦3点、道具瓦1点、丸瓦8点、平瓦12点である。

分布は、第67図の高城跡周辺の地形図（諫早市作成）によって説明する。高城跡の基本構造は、東西に長い丘陵で上段に東西二面の平坦面（西側が①、東側が②）をつくり、中段に丘陵を取り巻くように平坦面③（帯曲輪）があり、西南側に深い堀（④）、南東側に土塁と平坦面からなる曲輪⑤がある。採集品の分布数は①に25点、②に4点、③に8点、不明1点となり、ほとんどが曲輪③より上に分布する。表20右欄に採集地点と採集者のメモを掲載した。

### 2 採集品の特徴（第68図、表21）

第68図1は土師質土器で鍋として利用された焙烙の特徴をもち、口縁部は復元で30cm、中世のものであろう。2は土師質土器の小型の皿である。諫早家御屋敷跡や日野江城跡の出土品と特徴を同じくする。3は鍋連弁を施す青磁碗の口縁部小片である。4及び5は青花の皿と碗で、4は基筒底となり、5は高台をもつ。1～5の時代性は、表21に示すように中世から江戸時代初頭までである。

第69図～第74図は採集された瓦の実測図、表20は観察表である。第57図は軒丸瓦で1は花十字紋、2～5は三つ巴紋、6は菊花紋で、丸瓦部までの破片は2及び6で、そのほかは瓦当部分の破片である。

**軒丸瓦**（第69図）1は花十字紋のおよそ4分の1の破片で、2022年度（令和4）に報告された1点（2022長崎県埋蔵文化財センター、写真158の1-2：2点を並べて撮影）と同じ紋様であり、長崎市興善町遺跡出土品（1998長崎県教育委員会）と同じである。瓦当面が比較的薄いことも特徴である。

2～5の三つ巴紋の特徴は、4が圏線の中に巴が接合し、2及び3が巴の尾が長く伸び、5は巴の尾が短い。朱文数は4が最も多く、次いで2、3と減じ、5は朱文が大きく少ない。朱文の大きさは2及び4がほぼ同じ0.3cmで、3は0.5cm、5は1.0cmとなる。朱文の大きさと比較すると花十字紋にある朱文は3と同じとなる。6は菊花紋であり、花卉は14枚に復元できる。

瓦当部と丸瓦部との接合方法は、瓦当部の縁断面と瓦当断面などの観察から、2は瓦当部の円形粘土板の後ろに丸瓦部の半円筒形粘土板を接合し、6は丸瓦部の半円筒粘土板の内側に瓦当の円形粘土板を下から接合している。断面の観察から4は2と同じ接合方法で、3は6と同じ接合方法であろう。朱文の大小、接合方法の違いに相関関係があり、時期や製作者集団の異なること指摘できる。また、丸瓦部の内面に残る調整痕跡の観察による切り離し技法は、2が横方向の斜めでコピキB（鉄線切）、6はコピキA（糸切）である。

表20 高城跡採集品 基本情報一覧 (縦・横・厚さの単位: cm)

種類	番号	縦	横	厚さ	重さ(g)	地点	採集者のメモ
軒丸瓦	1	7.3	4.9	2.0	56.3	③北	高城 花十字瓦片 平成24年2月19日(日)3時にて発見 平成24年3月3日 高城 三巴文瓦
	2	15.5	15.4	3.2	674.9	①東	平成24年、10.31出土頂上の奥石碑の近く尻尾の長い方が古い 尻尾の短い方が若い400年～450年差は10年□□、..... 平成24年11.11出土頂上のおく伊佐早石碑の近く南側 平成25年5.19(日)に両方合わせる 高城 伊佐早
	3	17	10	2.3	1013.6	③南	平成24年1月2日 中腹南側よりまん中当たりツツジ山より一段はなれた所
	4	11.6	14.7	2.4	425.8	②東	頂上南側より出土 望遠台の所 金箔瓦右回り 日野江城
	5	9.6	11.5	2.5	217.4	不明	高城 平成23年10.5
	6	16.1	13.2	2.2	534.1	①東	平成24.11.12出土 頂上の奥 石碑の近く 棟瓦の側面は□付・菊紋・
軒平瓦	1	20.3	25.2	3.4	1500.0	③東	高城瓦 三本釘のキリシタン瓦 築城 1469年 西郡高善 1469年～1487年 文明年間 平成24.10.28出土中腹南側寺前あたりつつじの所 高城
	2	18.4	12.3	3.4	476.5	①東	平成24年、11.10 頂上のおく□□のちかく
	3	12.3	3.9	3.1	115.9	③南	平成24年、2.25 中腹南側 カイダン入口前
	4	10.1	10.8	3.0	280.1	①	平成24年、11.11 頂上おく
	5	13.0	7.1	2.0	217.4	③南	高城城 平成24.3月 中腹 南側 カイダン入口より
	6	8.3	5.3	2.8	89.5	③南	高城城 平成24.2.18 中腹 南側 カイダンより
	7	13.3	7.3	2.3	256.9	①東	平成24年、11.10 頂上のおく 石碑の裏より出土
鯉瓦	1	13.7	11.0	3.0	544.5	①東	平成24.12.7頂上のおく 石碑近く 籠の飾り瓦 諫早高城跡発見
鬼瓦	2	15.7	15.0	3.8	854.1	②	平成24年1.1 朝6時より頂上まんなか
	3	17.8	16.5	4.5	899.2	②	平成24年1.1 朝6時より頂上まんなか
	4	16.6	13.3	5.5	940.6	①	平成24.年2.26 頂上のおくから出土
道具瓦	5	7.6	4.5	3.6	126.1	②北	山城北側トイレの斜面より
丸瓦	1	22.2	12.5	3.2	842.7	③東	平成23.12.30中腹階段より木下像 南側に向かって10mの所まんなか 内側網目叩き痕・九文・波文が古く□、...見られる 丸瓦男瓦
	2	29.9	15.6	3.5	2000.0	③東	高城25.2.15中腹南側ツツジの所階段のある所
	3	19.7	15.2	2.4	1500.0	①東	諫早高城丸瓦平成24年11.13出土 頂上のおく 石碑近く
	4	14.4	13.4	2.2	732.1	①東	平成24年12.7頂上のおく石碑近く
	5	13.7	12.9	2.0	509.4	①東	平成24年11.25頂上のおく石碑の裏より出土
	6	15.0	12.5	1.7	570.7	①東	平成24年11.24頂上のおく石碑の裏より出土
	7	20.5	10.0	2.1	445.6	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	8	18	11.0	2.2	560.2	③	高城中:旧諫早市郷土館採集品
平瓦	1	15.0	18.9	1.7	519.7	③南	平成24年11月高城城 中腹つつじ南側より
	2	11.3	18.4	2.0	501.6	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	3	13.3	9.8	2.5	478.7	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	4	18.4	15.3	3.0	898.8	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	5	20	15.4	2.5	918.8	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	6	19	10	2.0	396.5	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	7	7.9	10	2.0	198.6	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	8	6.5	8.4	2.0	129.3	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	9	12	8.4	2.0	241.3	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	10	11.6	11.2	1.7	275.7	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	11	7.5	9.6	1.7	102.3	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品
	12	11.2	9.3	1.5	224.5	①	高城上:旧諫早市郷土館採集品

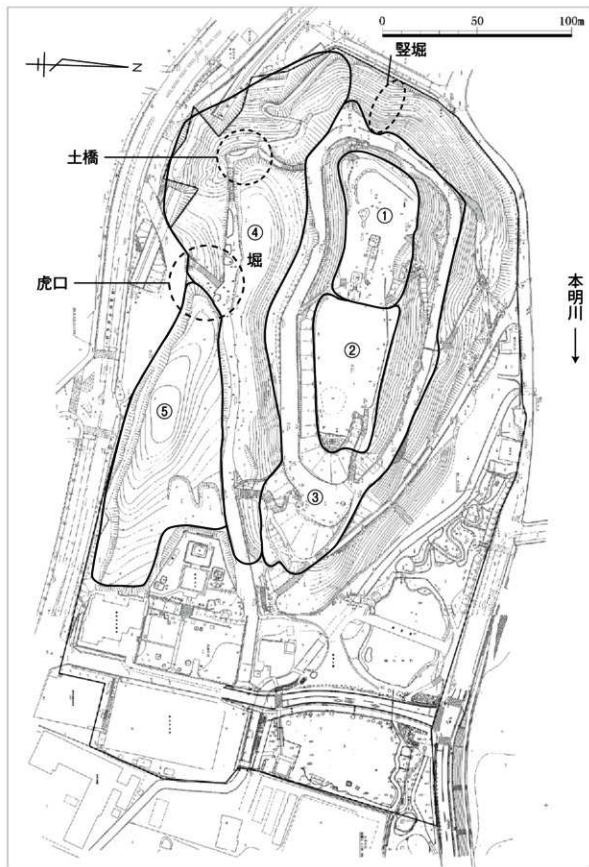
**軒平瓦**（第70図1～4、第71図5～7）軒平瓦の実測図及び拓本である。1はほぼ完全な形の軒平瓦であり、平瓦の大きさ、軒文様などの基本情報を持つ良好な考古資料である。軒平に近い部分に面取りの削り、そして平瓦部の側部上面に長い面取りの削りが施されている。また、軒部と平瓦部との接合には強い押さえが施されており、断面に観察できる。接合は、平瓦に下から顎部を接合している。軒文様は、線描きの三葉でいずれの葉も中央の葉脈を直線で引き、唐草は2点する線描きである。三葉の中心は二等辺三角形の中央にまっすぐな線を描き、その両端に左右対称で斜め上向き二等辺三角形と中心線を描き、三葉とする。唐草は左右対称に書かれた葉の下から伸び、巻きはそれぞれ一周でとどまり、端部が一転目は上向き、二転目は下向きとなる。2～4は、同じ文様の軒平瓦の破片で、いずれも同じ接合方法で、顎の接合には内側に強い押さえを施しており、断面に観察できる。顎の幅（奥行き）の違いによって、1と2と3がほぼ同じで狭く高い断面形態で、4は広く低い形態である。平瓦部は7が最も薄く、2・3・4は1よりも厚い。5から7は上向き一葉の中心飾り三転唐草の文様をもつ軒平瓦の破片である。いずれも中心飾りは摩滅しており、葉脈表現は失われているが、過去に採集された同じ文様の軒平瓦片では、しっかりと葉脈表現まである非常に特徴的な文様である。唐草は巻きが強く、それぞれ1周と1/4ほどする巻きの強さである。1～4の瓦当と比較すると、高さが高く、瓦当の文様外区の幅が広い点が特徴的である。1～4に見られるように瓦当上部に施される削りの面取りは広めである。顎の接合方法も強く抑え、1～4は共通した技法が確認できる。

**鯨瓦**（第72図1）鯨瓦の丸瓦部分で目釘穴を有する破片である。厚みのある丸瓦部の上部表面に鱗の模様を線描きしている。その下部に目釘穴を穿孔している。丸瓦部の下部表面には他の部材が張り付けてあたった痕跡が遺る。

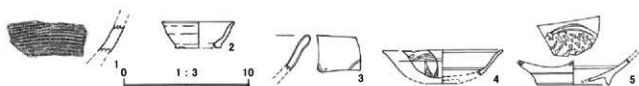
**鬼瓦**（第72図2～5）第72図2及び3は方形の鬼瓦の側面部分で、2は目釘穴を二つ有する。2の外表面には平滑な縁飾りを段差で施し、内面は撫で調整である。3は鬼瓦の角部で、細い粘土を貼り付けて竜の髭のような造形を施している。4の外表面には粘土を貼り付け盛り上げて造形を行い、その剥がれた痕跡が遺る。5は鬼瓦などの裏側に貼り付けられていたものと思われ、二側面に剥がれた痕跡が遺る。

**丸瓦**（第73図1～8）丸瓦には長さ28cm前後のもの（1・2・7・8）と18cm以下のもの（3～6）と二種がある。前者には幅が広く（20cm近く）厚みがあるもの（7・8）と幅15cm以下のもの（3～6）とがある。大きさの違いから、大屋根と塼とにそれぞれ葺かれていたことが分かる。

**平瓦**（第74図1～12）平瓦には薄く小さいもの（1・2・6～12）と、厚く大きいもの（3・4・5）との二種がある。1は横幅が分かる資料で横幅18.9cm、断面形は湾曲するがほぼ円形である。4や5は厚く大きく、残存幅で15cm、断面形は中央部分が特にくぼむ形態、5は復元で横幅22cmとなる。



第67図 高城跡地形図 1/2,000



第68図 採集品実測図 (土師器類・陶磁器類 1/3)

表21 高城跡採集品属性表

法量単位 (cm)

No	材質	種別	器種	口径	高さ	底径	重量	注記	時代
1	土師	焙烙	鍋	—	—	—	23.0g	高城上	中世
2	土師	土師質土器	小皿	6	2.2	4	5.8g	高城上	中世
3	陶器	青磁	碗	—	—	—	11.0g	高城上	13~14c
4	磁器	青花	皿	10	2.7	3	3.1g	高城上： TKS1989.5.29	16c前~中
5	磁器	青花	碗	—	—	—	15.1g	高城上	16c前~中

この他に堯となる茶色の陶器片1 (5cm×2.5cm 厚さ0.8)、近世磁器片1 (6cm×3.5cm)あり

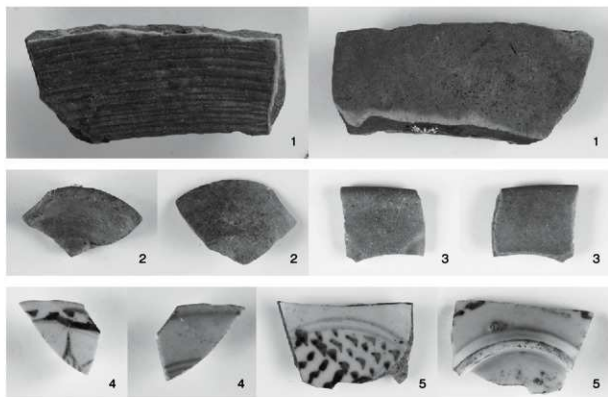
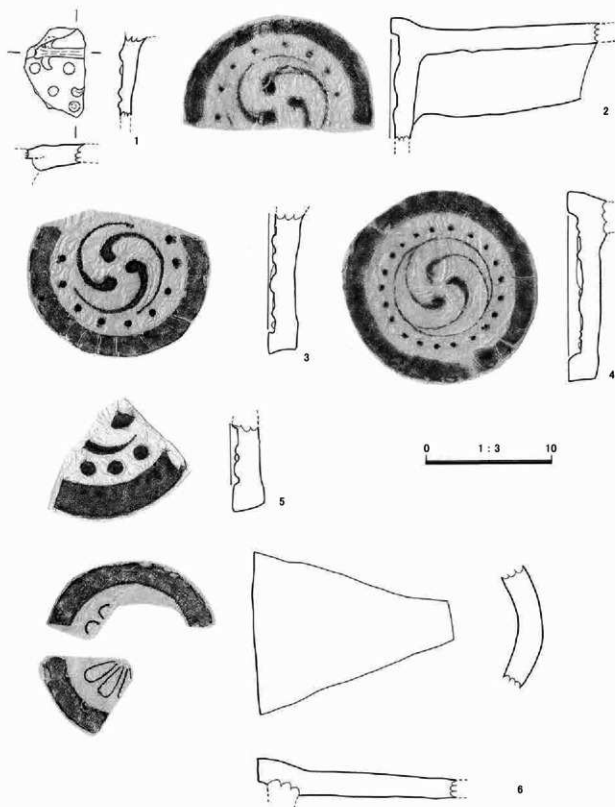


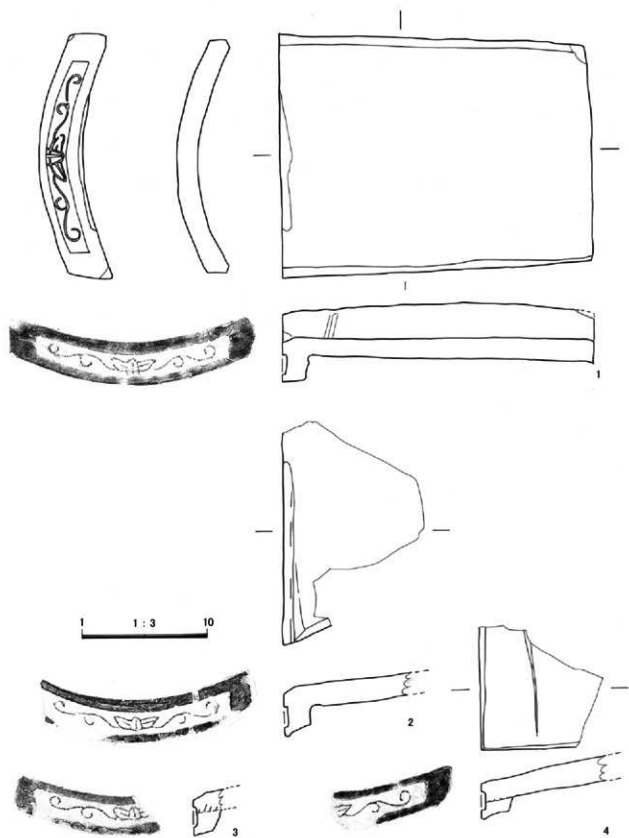
写真157 土師器・陶磁器類



第69図 採集品実測図 (軒丸瓦 1/3)



写真158 軒丸瓦 1～6



第70図 採集品実測図 (軒平瓦 1/3)



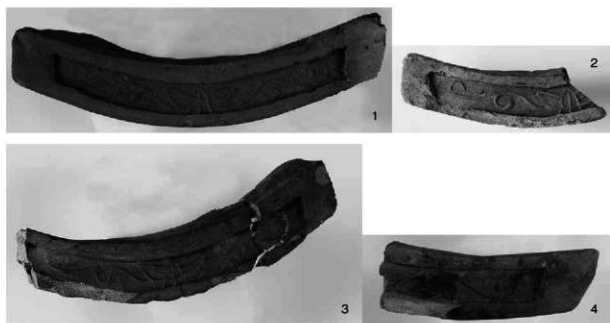
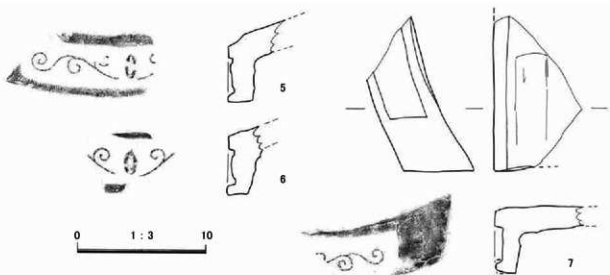


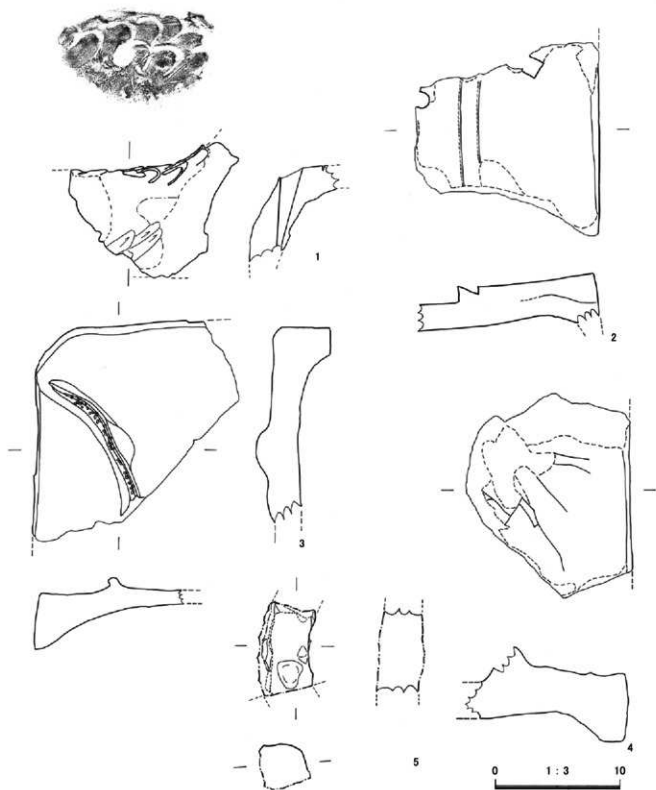
写真159 軒平瓦1～4



第71図 採集品実測図(軒平瓦 1/3)



写真160 軒平瓦5～7



第72図 採集品実測図 (鯉瓦・鬼瓦類 1/3)

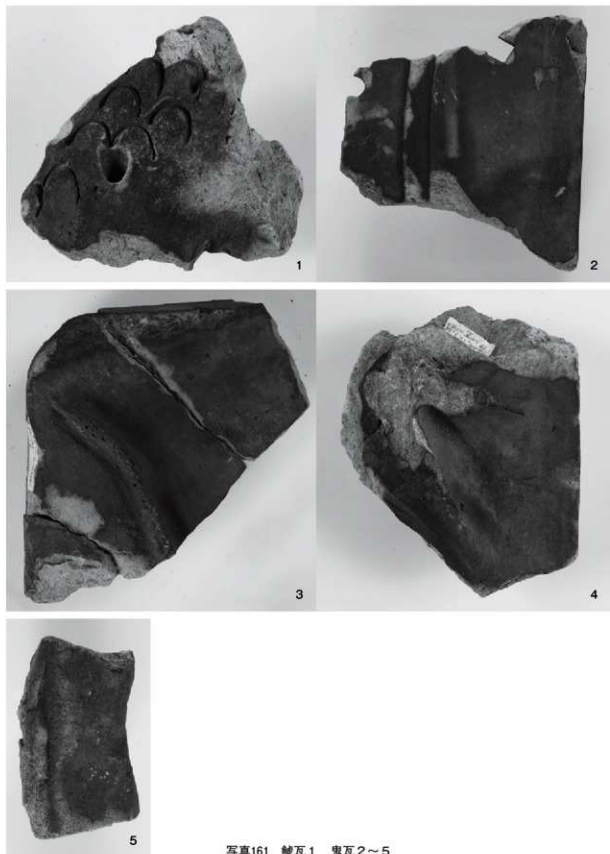
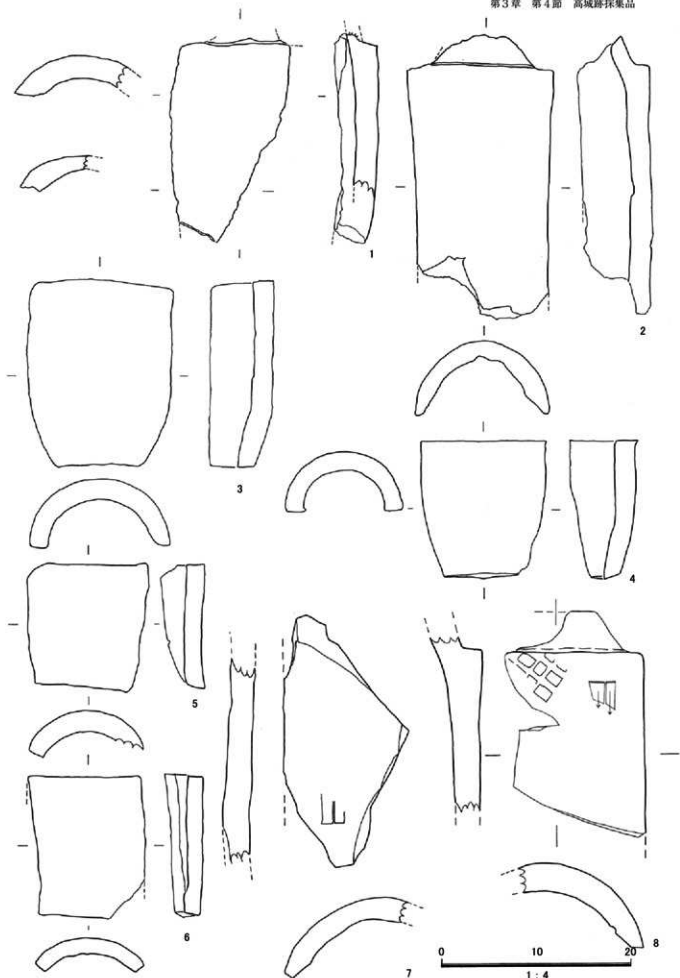


写真161 鱗瓦1 鬼瓦2~5



第73図 採集品実測図(丸瓦 1/4)

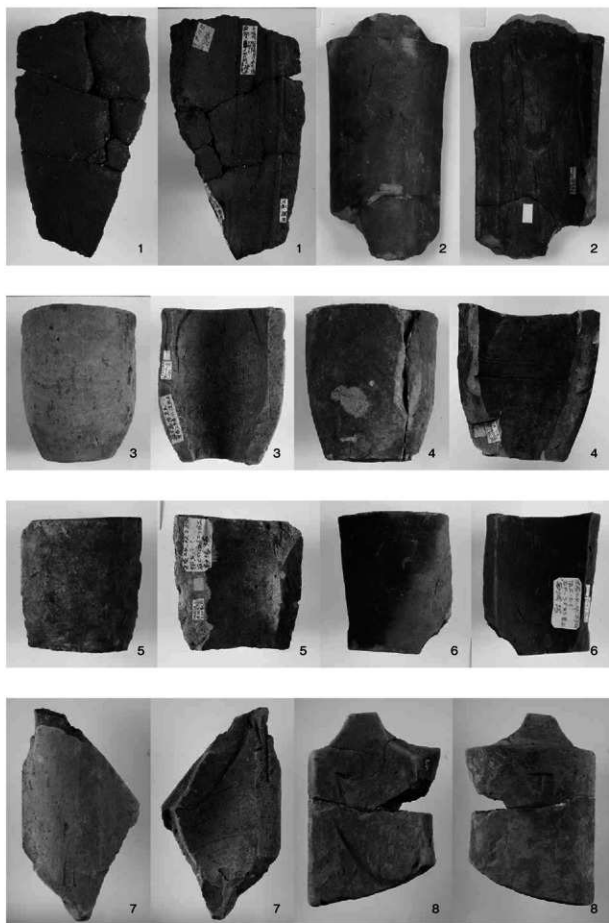
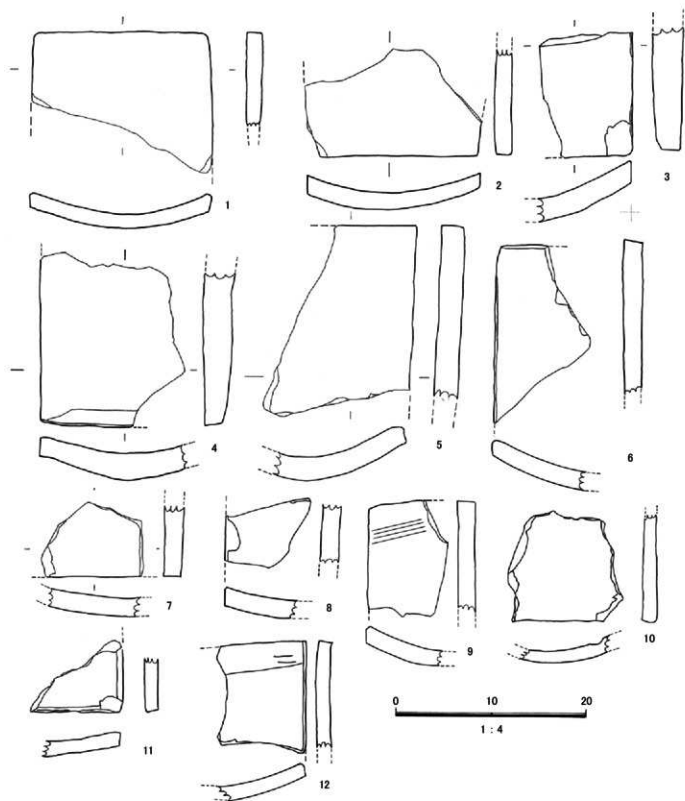


写真162 丸瓦 1～8



第74図 採集品実測図 (平瓦 1/4)

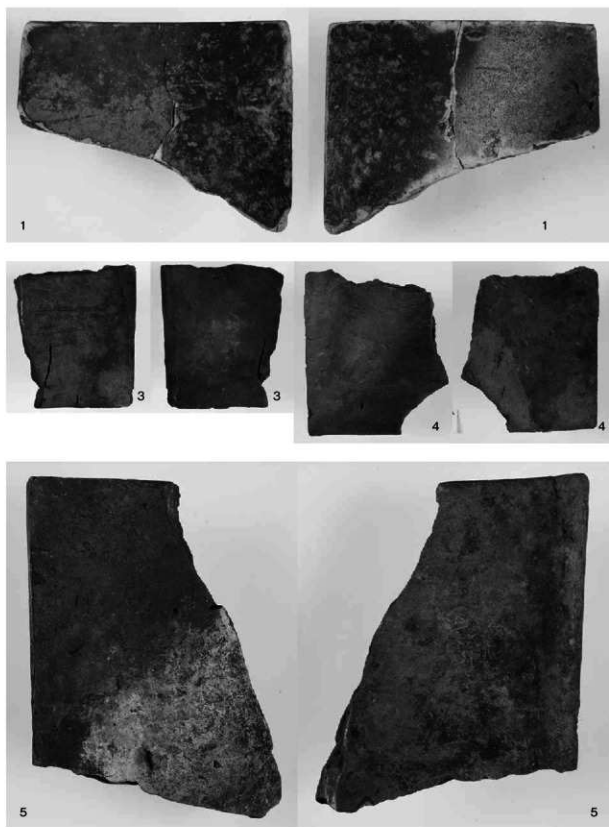


写真163 平瓦 1～5

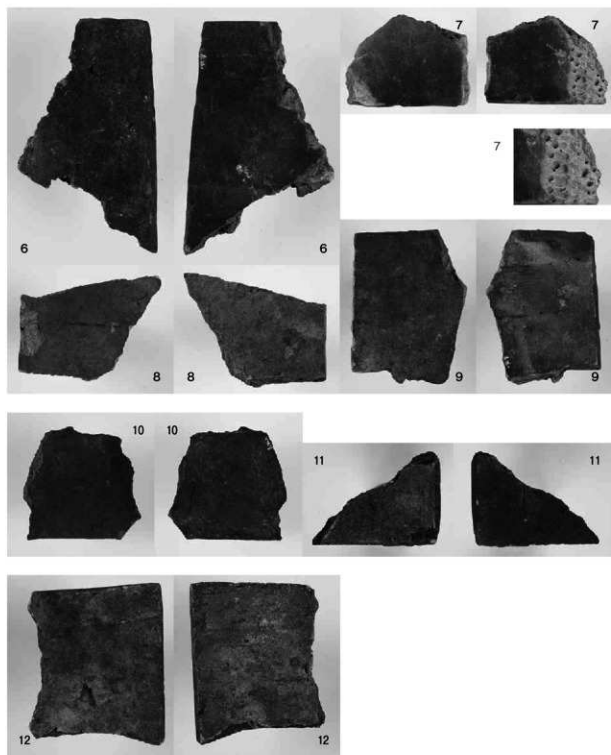


写真164 平瓦6～12



## 第5節 西小路町墓碑・山川内遺跡隣接墓碑

### 1 西小路町墓碑（第75図、写真165：正面・背面）

本節の1で紹介する石塔は、諫早市西小路町の墓所にある石塔である。石塔は硬質砂岩製で、高さ75cm幅22cm厚さ9.2cmの規模で、正面に建立者名・戒名・月日を縦書きの漢字で刻み、背面に十字架様の浮き彫りがある。

背面にある十字架のように見える浮き彫りについて、所在地の天祐寺より、キリシタン関連遺跡等ではないかということで紹介を受けた資料である。

現地は、切土造成によってできた平坦面とその平坦面に迫るほぼ垂直な崖面とがあり、石塔は十字架のような浮き彫りがある面を崖面側に面するように建造されている。石塔と崖面との距離は1m未満の狭小な幅であり、十字架のような浮き彫りがある面を背面と意識して建立されていることが明らかである。（写真165）石塔は土にそのまま埋め立てられており、地下構造が存在することが想定される。

実測を行った結果、石塔は神社形式の小型の石祠に付属する縦格子が彫られた石扉を加工し、法名などを薬研彫りし墓碑としていることが判明した。

石塔の正面に刻まれた文字は、向かって右から一行目「寺田氏立」二行目「一徳相元大徳」三行目「七月十四日」とあり、彫り方が類似しており、同じ時に十五文字が刻まれたことが分かる。江戸時代のものであろう。

また、戒名と建立者名、そして月日が刻まれていることから、キリシタン関連の考古資料とは言いがたいことが判明した。ただし、神道或いは仏教関連の遺物を取って加工し、背面に十字架のような格子を残す点は気にかかる。

### 2 山川内遺跡隣接墓碑（第75図、写真166：正面・背面・両側面）

第75図下の実測図は山川内遺跡に隣接して存在する墓碑である。ミカン畑の中で道に面した標高50mの地点にある木製の祠の中にある石碑である。

石塔は安山岩製で、高さ81cm幅57.5cm厚さ30cmの規模で、正面に2名の戒名と日付を縦書きの漢字で刻み、背面に矢穴が一箇所確認される。戒名から男女の夫婦の供養塔もしくは墓碑と考えられる。近くには平地区の墓地があるが、小さな谷を挟んでおり、ミカン畑の斜面に単独で存在する。石塔の基部はコンクリートにより覆われ、地下の構造は不明で、明確な時代性も不明である。

石塔に刻まれた文字は右から一行目「七月二十四日」、二行目「妙法妙圓信女」、三行目「五月六日」、四行目「妙法圓基信士」と刻まれている。石塔に向かって右が女性、左が男性で、両者ともに彫り方や彫り幅が類似しており、一度に二十二文字が刻まれていることが明らかである。刻まれた二つの日付には、2カ月ほどの間隔があり、同時に埋葬されたとは考えられない。このため、二人目が亡くなってから以降に石塔が建てられたと考えられる。

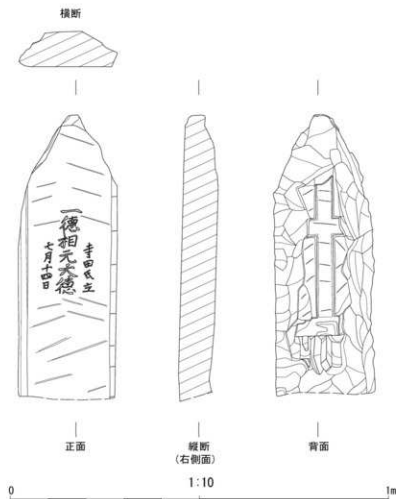
また、右が女性、左が男性という並列関係は千々石ミゲルの墓と思われる石碑と共通する並列関係あり、興味深い共通項目である。



写真165 西小路町墓碑 正面・背面

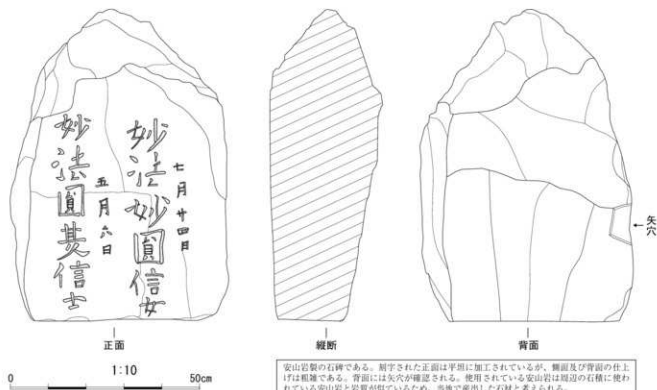


写真166 山川内遺跡隣接墓碑 正面・背面・両側面



正面は表面にノミによる面取りが加工されており、正面の両端は鋭曲している。右側は背面向かって斜めに切られていることが横断面より重取される。左側は加工の痕跡は確認されない。十字架及び周囲はノミによる面取りが行われているが十字架以外の部分はノミで広く削っただけである。十字架の上端、両端及び下端の意匠は一部欠損している。

第75図  
西小路町墓碑  
山川内遺跡隣接墓碑  
1/10



安山岩製の石碑である。刻字された正面は平坦に加工されているが、側面及び背面の仕上げは粗雑である。背面には矢穴が確認される。使用されている安山岩は周辺の見取の石種に使用されている安山岩と岩質が似ているため、当地で産出した石材と考えられる。

## 第6節 伝「円通寺跡」の石塔群

## 1 石塔群（第76図～第85図）

諫早市多良見町中里にある伝「円通寺跡」の石塔群は、室町時代の紀年銘を有する宝篋印塔を主体とする。1998年（平成10）に多良見町文化財に指定された。名称にある伝「円通寺」は、江戸時代には破壊地と記録された寺院の一つである。キリシタンによる破壊が原因で廃寺になり、江戸時代にも引き継がれず、伝承のみが残っていたものである。指定対象は緑泥片岩製の石塔部材7点、安山岩製他の部材3点で、そのすべてについて実測作業を行い第76図～第85図に掲載した。

いずれも完全な形で遺る部材はないが、それぞれの石塔部材の特徴づける部位は残している。1から4は宝篋印塔の屋根で、その特徴である四方に配される上向きの角型の突起がすべて欠損している。5～8は宝篋印塔の基礎で、下方の欠損が共通しており、7はトンボ玉のように削られ、8は側面の下半分を薄く削り銘文が存在したかどうかを確認できない。9は五輪塔の火輪で、上部が欠損し、角も丸く削られており、三角形の火輪とは思えない形態になっている。10は五輪塔の水輪で、右側面と背面が表面を大きく削られている。

このように石塔には破損の痕跡が遺されるが、意図的であるのかどうかの判断はできない。また、周辺は住宅地として大きく造成されているが、近接する金谷城跡の大きな堀を挟んで北にあるので、二の丸などの館地として想定できる。

表22 円通寺跡石塔一覧

	種別	部位	最大幅	高さ	紀年銘	人名
1	宝篋印塔	屋根	23.4cm	14.6cm		
2	宝篋印塔	屋根	22.5cm	14.5cm		
3	宝篋印塔	屋根	26.0cm	14.5cm		
4	宝篋印塔	屋根	29.3cm	22.9cm		
5	宝篋印塔	基礎	35.0cm	24.0cm	応永31（1424）	□真一翁純禪定門聖義
6	宝篋印塔	基礎	31.7cm	22.3cm	応永4（1397）	天叟
7	宝篋印塔	基礎	33.3cm	19.0cm	文明6（1474）	□真覚□□定門れい
8	宝篋印塔	基礎	31.9cm	17.1cm		
9	五輪塔	火輪	24.5cm	13.1cm		
10	五輪塔	水輪	22.8cm	15.0cm		



写真167 伝「円通寺跡」の石塔群



写真168 宝篋印塔屋根 1

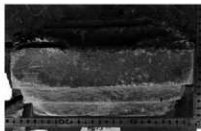


写真169 宝篋印塔屋根 2



写真170 宝篋印塔屋根 3



写真171 宝篋印塔屋根 4

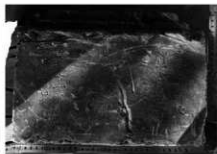


写真172 宝篋印塔基礎 1

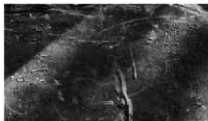


写真173 基礎 1 拡大

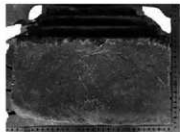


写真174 宝篋印塔基礎 2

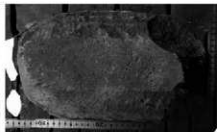


写真175 宝篋印塔基礎 3

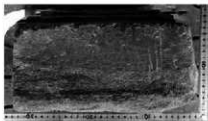


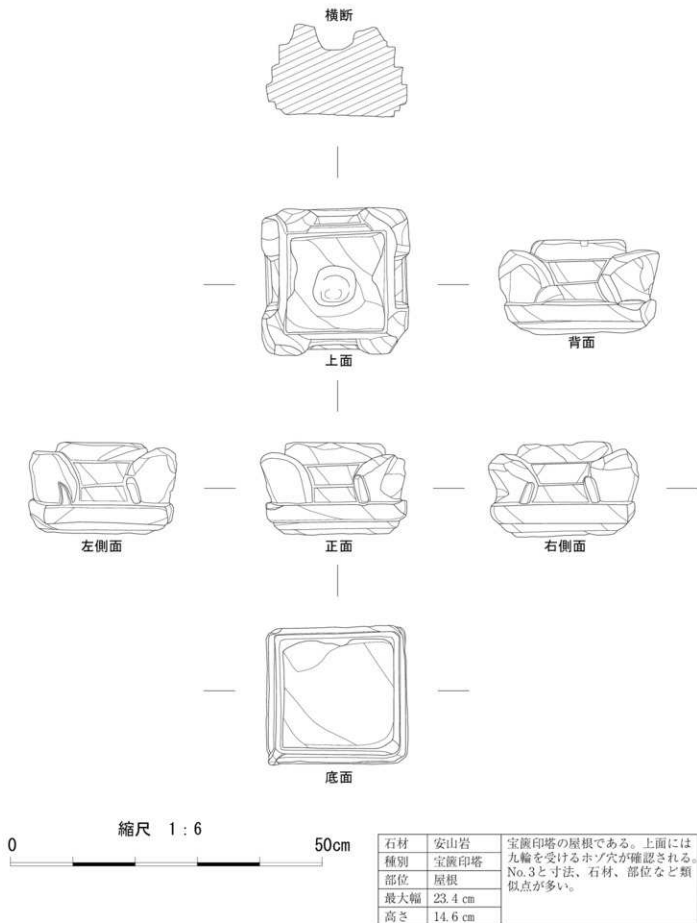
写真176 宝篋印塔基礎 4



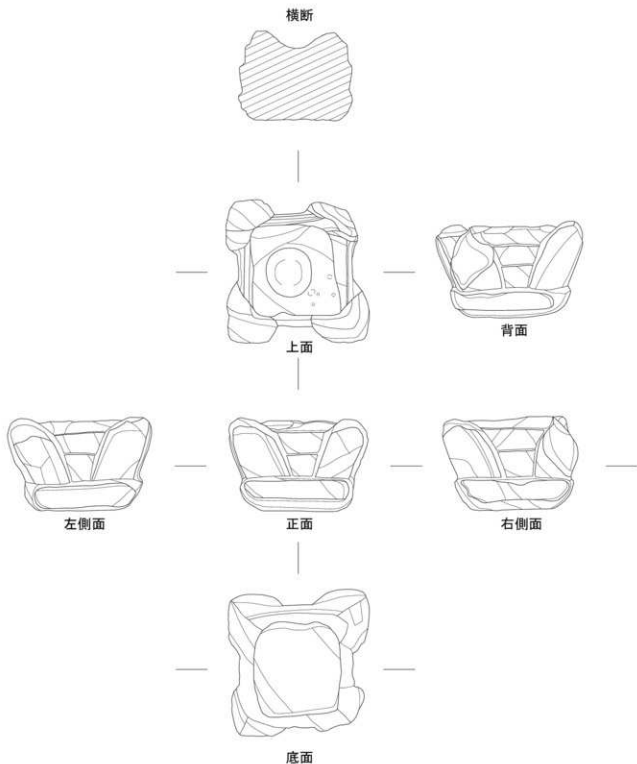
写真177 五輪塔火輪



写真178 五輪塔水輪



第76図 宝篋印塔屋根 1 1/6



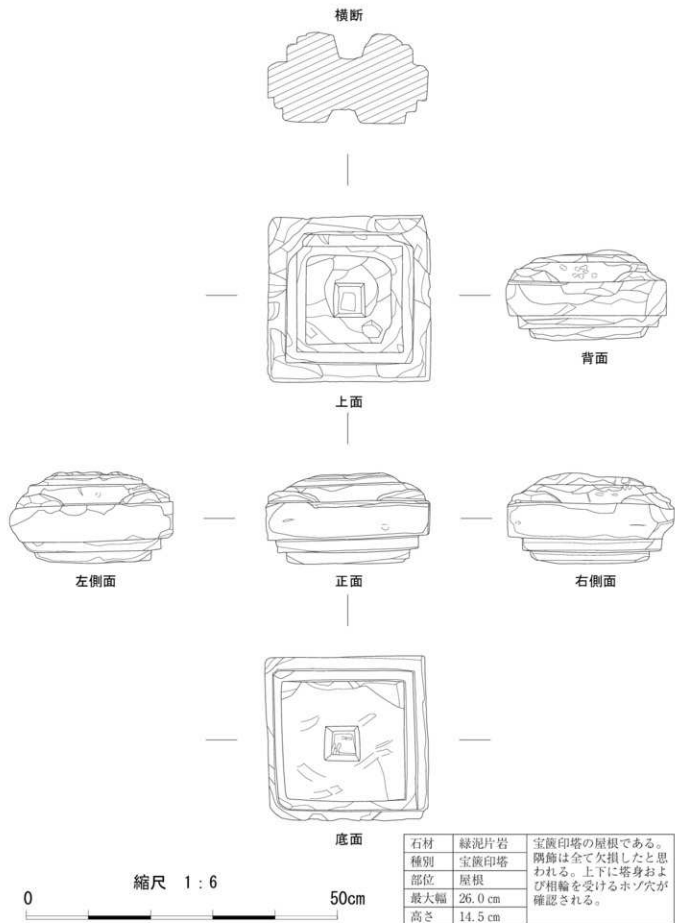
縮尺 1 : 6

0 50cm

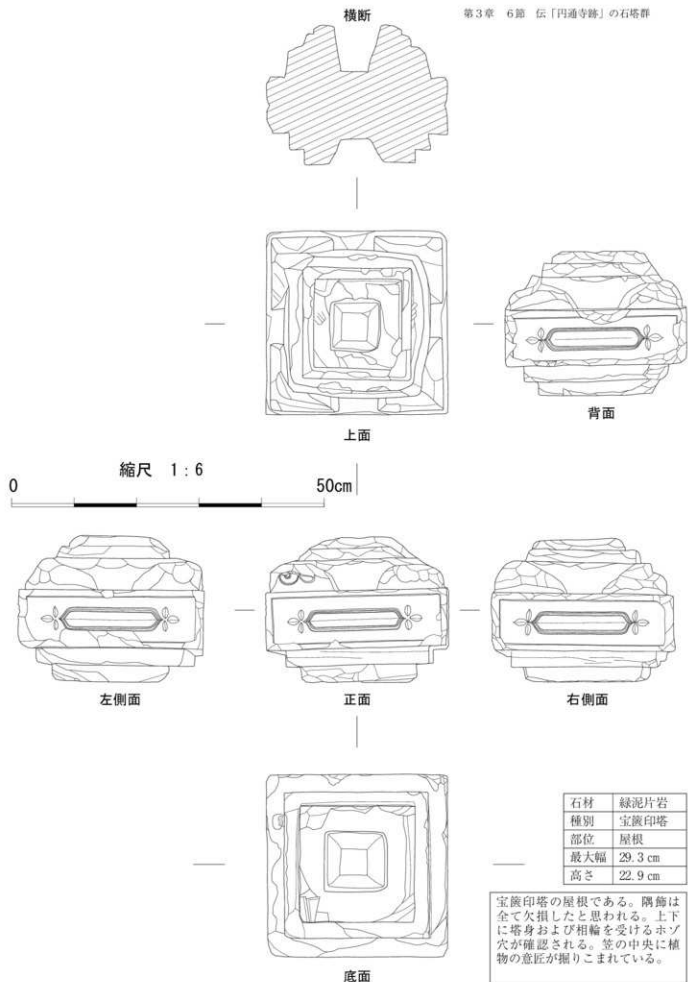
石材	安山岩	宝篋印塔の屋根である。上面には九輪を受けるホゾ穴が確認される。No.1と寸法、石材、部位など類似点が多い。
種別	宝篋印塔	
部位	屋根	
最大幅	22.5 cm	
高さ	14.5 cm	

第77図 宝篋印塔屋根2 1/6

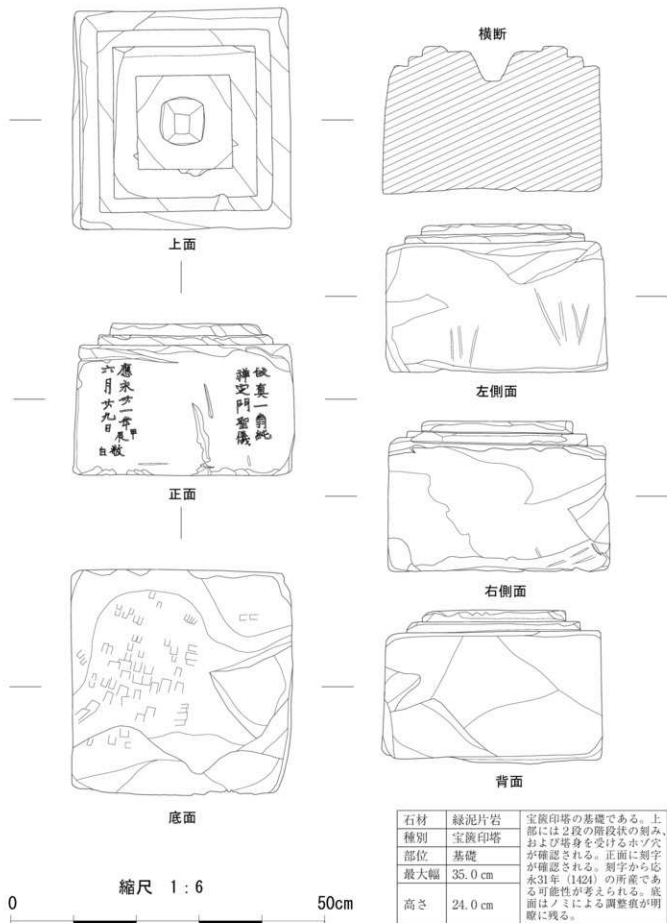




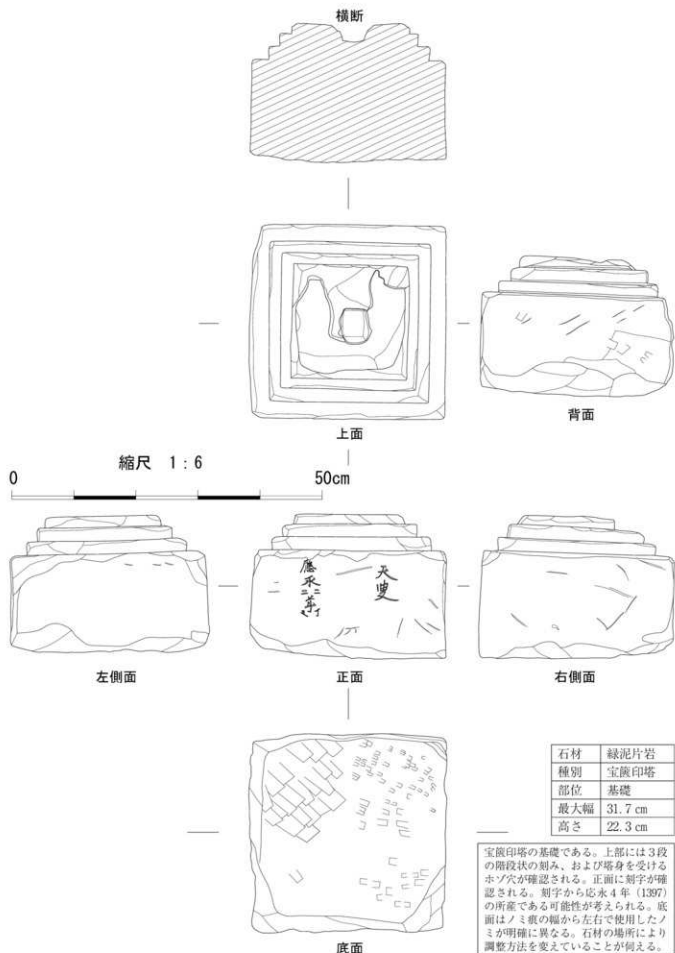
第78図 宝篋印塔屋根 3 1/6



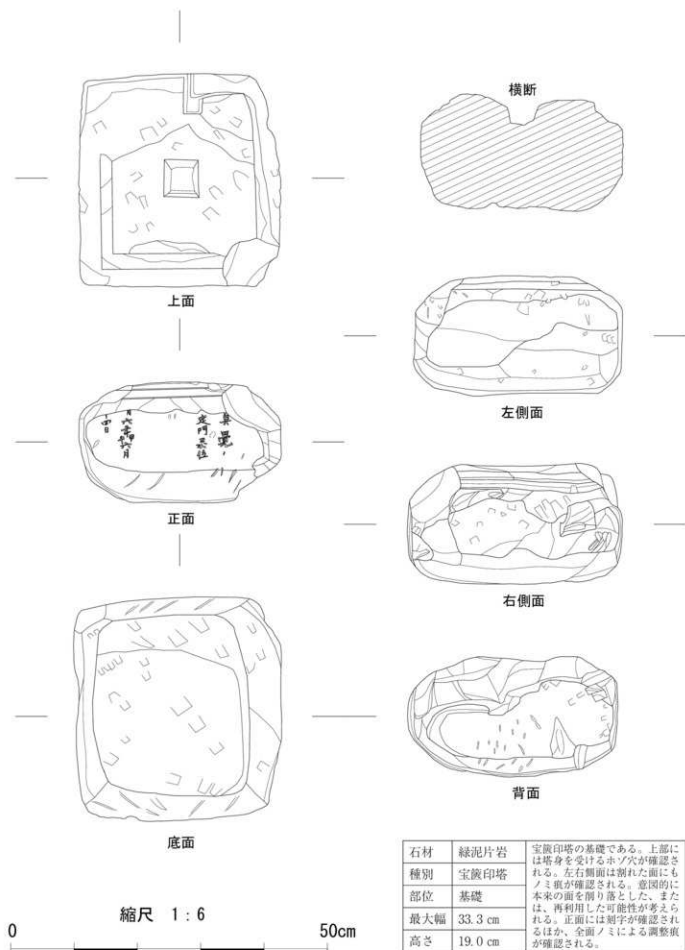
第79図 宝篋印塔屋根 4 1/6



第80図 宝篋印塔基礎1 紀年銘有 1/6



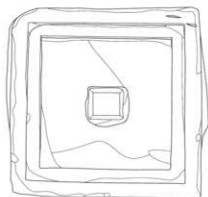
第81図 宝篋印塔基礎2 紀年銘有 1/6



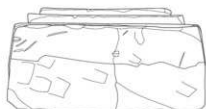
第82図 宝篋印塔基礎3 紀年銘有 1/6



上面



背面



左側面



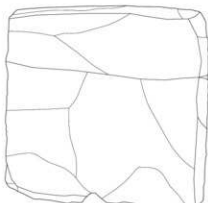
正面



右側面



底面

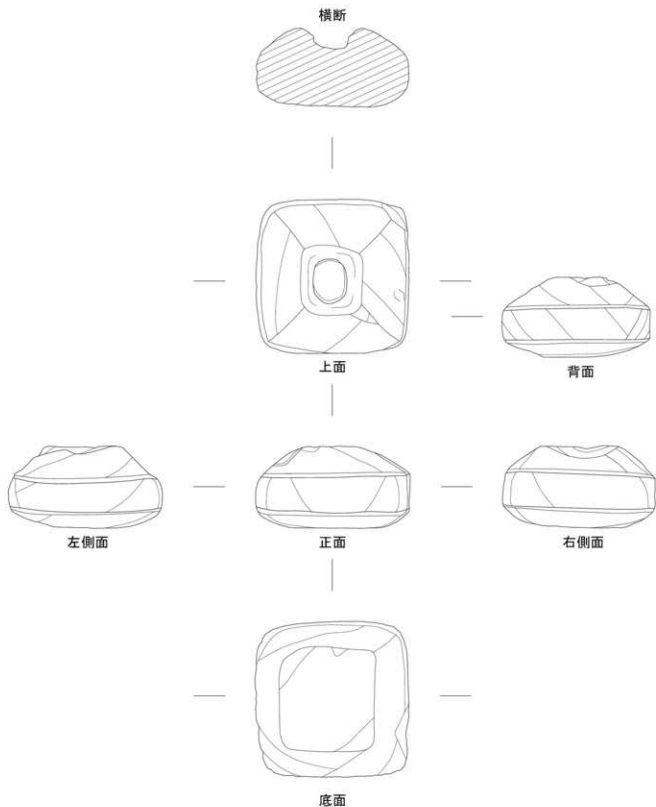


石材	緑泥片岩
種別	宝篋印塔
部位	基礎
最大幅	31.9 cm
高さ	17.1 cm

宝篋印塔の基礎である。上部には2段の階段状の刻み、および塔身を受けるホゾ穴が確認される。側面の上部は本来の面が残存しているが、下部は本来の面を削り取ったと思われるノミ痕が多数明瞭に確認される。意図的に削り取った可能性が考えられる。

縮尺 1:6

0 50cm

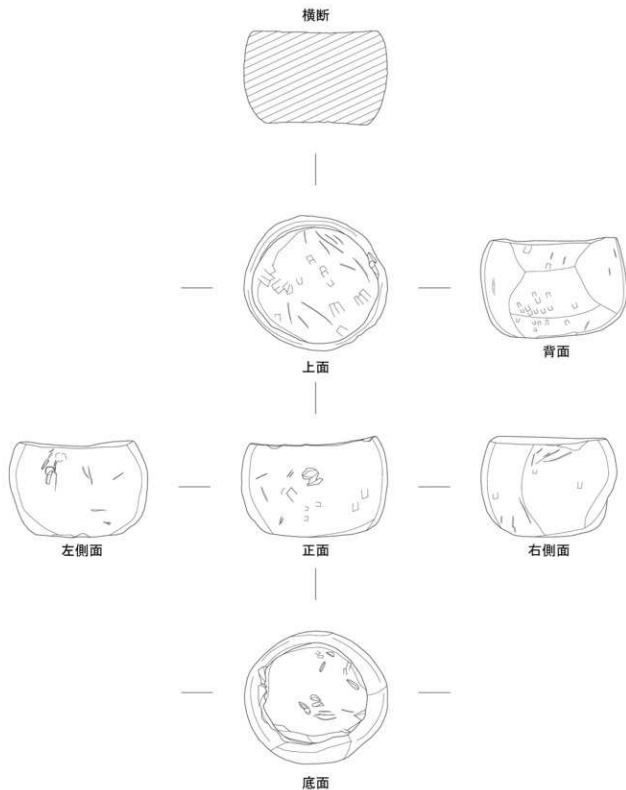


縮尺 1 : 6

0 50cm

石材	安山岩
種別	五輪塔
部位	笠(火輪)
最大幅	24.5 cm
高さ	13.1 cm

第84図 五輪塔火輪 1/6



縮尺 1:6

0 50cm

石材	緑泥片岩	背面の処理がやや粗い。 ノミ痕が多く残る。
種別	五輪塔	
部位	塔身(水輪)	
最大幅	22.8 cm	
高さ	15.0 cm	

第85図 五輪塔水輪 1/6



## 第7節 文献からみたキリシタン関連遺跡等

### 1 文献資料の紹介と解題

本節では第1章第1節における「調査の基本方針」④関連文書の収集と一覧表作成に基づき、事務局が収集・読解した文献資料の抜粋（一部補足あり）と解題を紹介する。対象とした文献資料は6点あり、(1) 外国人が遺した文書・記録類（外国人、中でも日本の研究者あるいは来日したキリスト教の司祭が遺したもの）、(2) 国内の支配層が遺した文書・記録類（日本国内の宗教勢力や為政者が遺したもの）と大別して紹介し、合わせて解題を示す。

- (1) a: レオン・バジェス「日本切支丹宗門史」(1938 訳: 吉田小五郎『日本切支丹宗門史』(上) 岩波書店)  
 b: レオン・バジェス「日本切支丹宗門史」(1938 訳: 吉田小五郎『日本切支丹宗門史』(中) 岩波書店)  
 c: レオン・バジェス「日本切支丹宗門史」(1940 訳: 吉田小五郎『日本切支丹宗門史』(下) 岩波書店)  
 d: フロイス「日本史」第24章(1979 訳: 松田毅一・川崎桃太『日本史9西九州篇I』中央公論社) 第83章(1979 訳: 松田毅一・川崎桃太『日本史11西九州篇III』中央公論社)
- (2) a: 『寺社調査誌』(2007 諫早市郷土館)  
 b: 『龍造寺家文書』(1958『佐賀県史料集成古文書編第三巻』佐賀県立図書館)

上記の資料は、調査指導委員会に所属する織田委員から紹介されたものを含み、江戸時代の諫早地域におけるキリシタン受容と排斥の様相について記録された文献である。(1) - a、(1) - b、(1) - c の『日本切支丹宗門史』(上)・(中)・(下) はフランスの日本研究者であったレオン・バジェス(1814-1886)が1869年(明治2)に著した編年史で、岩波文庫として編集・刊行されたものである。(1) - d の「日本史」はキリスト教カトリック教会の修道会組織「イエズス会」に所属する司祭であったルイス・フロイス(1532-1597)が1583年(天正11)にイエズス会本部より指令を受けて1593年(文禄2)までに書上げた、日本における布教史で、同じく編集・刊行されたものである。(2) - a の『寺社調査誌』は2007年(平成19)に諫早市郷土館叢書として発行された資料で、佐賀鍋島文庫の「寺院帳・社寺差上帳等」の中より諫早関係部分を抽出したものである。さらに「寺院帳・社寺差上帳等」は「寺院帳」、「諸寺院抱宮其外由緒書」、「当山派山伏由緒」と大別され、成立年代は「寺院帳・社寺差上帳等」が寛政から天明年中(1781~1800)であり、「寺院帳」は嘉永年中(1848~1853)に、「諸寺院抱宮其外由緒書」は慶応年中(1865~1867)に、「当山派山伏由緒」は弘化年中(1844~1847)にそれぞれ記されている。江戸時代後期には、江戸幕府は封建体制維持のために宗教団体への対策として寺社奉行を置き、宗教政策の元締めをなしており、佐賀藩でも同様に寺社方役所を置いている。そしてこの宗教政策の基本調査となったのが、佐賀藩諫早領内の各寺院がそれぞれ由緒を書き出し、役所に差し出したもので、その一部が「寺院帳・社寺差上帳等」である。この資料により江戸時代の佐賀藩諫早領内における寺社の名称や由来、境内の様相、住職名、寺格、当時

の廃寺名等を確認することができ、諫早地方での寺社関係資料として数少ない貴重な文献であると言える。(2)-bの「龍造寺家文書」は、平安時代末期の1186年(文治二)から江戸時代に至るまでの277点を数える古文書で、佐賀県指定重要文化財である。「龍造寺家文書」は、『佐賀県史料集成古文書編第三巻』(佐賀県立図書館 1958)に掲載されており、文書の中にある「起請文」には、いくつかの大名家や寺社勢力の信仰した神仏が列記されている。その中から、16世紀後半に現在の長崎県北・県央地域に割拠した戦国大名が信仰していた神仏について紹介する。

#### (1) 外国人が遺した文書・記録類

a: レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』(1938 訳: 吉田小五郎『日本切支丹宗門史』

(上) 岩波書店)より抜粋(一部補足あり)

#### 【第1章 1598～1599年】(記事1)

伊東殿(伊東義益)、諫早殿(西郷氏)並に豊後の諸侯達は何れも皆宣教師達に対して好意ある態度を示し、同時に領内に宣教師を迎える事を痛く望んでいた。(中略)但し、其の領地が有馬領と大村領との間に挟まれていた諫早の領主は、例外であった。

#### 【第2章 1600年】(記事2)

当時、日本にはイエズス会の司祭・修士合わせて百九人あり、中十四人は本年到着した者であった。彼等は三十箇所の駐在所、又伝道所に分散していたが、中六箇所が主要なるものであった。彼等の肝煎で、五十箇所の天主堂が再建され、五万人の新しいキリシタンが洗礼を受けた。長崎教区の大駐在所には、伝道所の教師を加えて三十人の宣教師がいた。

其処には、一つの神学院が付属してある。(中略)深堀で伝道が行われて其処で六百人の人が改宗した。諫早では、領主が天主堂のために土地を寄進し、又一向宗の仏僧七十二人は、自殺しようとして遺書まで作りかけていたが、改宗して命を永らえ、靈魂の救いを求めることになった。

#### 【第9章 1607年】(記事3)

一六〇六年、七年の二年間に起ったイエズス会の出来事の概要をここに記しておこう。(中略)なお「諫早」、「古賀」、「浦上」、「内海」、「本土山」、以上六箇所の之に付属する伝道所があり、この伝道所で七百人の授洗が行われた。九箇所の天主堂が建てられた。

#### 【第12章 1610年】(記事4)

此処で1609年(慶長14年)と1610年(慶長15年)の教会の情勢の概略を述べておこう。(中略)長崎の学林、修練所及び伝道所には、五十五人のイエズス会員がおり、諫早、深堀、古賀、浦上、内海、及び本土山等、附属の伝道所が九つあった。同地方の五人の大名の一人である諫早殿は、非常に好意を示し、肥前の大部分の領主志摩殿(寺沢)を尻目にかけて、キリシタンの兵士達を保護した。遂に、彼は、宣教師達の住宅を建てるために、敷地を得た。この大名は、宣教師達を訪問して敬意を表し、礼拝堂の中で跪いた。

#### 【第13章 1611年】(記事5)

学林に附属した伝道所、即ち諫早、深堀、浦上、内海、本土山の伝道所には、六人の司祭と三人の修士がいた。宣教師達は、難儀して立ち廻らなければならなかったが、その代りには相当の効果があった。一神父が肥前の城下龍造寺に建てられた天主堂を訪問した。

この天主堂は、異教徒でも好意を寄せていた諫早殿の願によって、同間の領主シノドノの承認を経て建立されたものであった。

#### 【第14章 1612年】(記事6)

諫早には、司祭・修士各々一人づついた。神父は、肥前の城下佐賀のキリシタンを訪問した。然し、キリシタンという名の大敵であり、殊に悪辣な仏僧達の煽動を受けていた諫早候は、迫害の計画を立て、公方と肥前の領主カシュー（鍋島勝茂のことか）の名に於て調査させた。多数のキリシタンは財産を没収され、また追放された。

#### 【第16章 1614年】(記事7)

諫早の大名は、領内にある五つの天主堂だけは残しておきたいと思ひながら、弱さのために、全部を破却させた。然し、彼は好機が来るまで、その材料を全部保存させた。即ち、二人の伝道者に守られていた宣教師達の住居には手を触れず、そのままにしておいた。

時々長崎から一人の神父が出張して、このキリシタンを訪問した。諫早の大名もまた、キリシタンの教を放棄せよとの命令を出した。然し同時に、彼は奉行に通告して、布令は形式に過ぎないということ、キリシタンは目だつ事をしない、累を自分に及ぼさないという条件つきで、信仰はそのまま続けていて差支えないと言った。

b : レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』(1938 訳: 吉田小五郎『日本切支丹宗門史』(中) 岩波書店)より抜粋 (一部補足あり)

#### 【第2章 1617年】(記事8)

最初に捕らわれたのは、大村で布教していたサン・フランシスコ会の神父であった。キリシタン達は師に危険を警告したが、無駄であった。背教者たる長与の奉行は、神の教しを請う希望があるやに見せかけて、この宣教師を首尾よく逮捕させた。師はお尋ね者となって大村から後をつけられていたが、四月八日、長崎を距てる九マイルの肥前諫早領、喜々津(キキズ)町で捕らわれた。彼は、迫害者の手に捕られるや、跪いて神の恩寵を感謝した。(中略)彼等(神父)は、市の入口に薄い板で小屋を作り、まず公然説教をし、告白を聴き、その周囲に集まる者は、三千余人に上った。(中略)彼等は、長崎を去る三マイルの伊木力に留錫した。彼等は、一昼夜を同所に過したが、三百人の背教者が再び教会の戒律に服した。

#### 【第5章 1620年】(記事9)

長崎の近くのオゴズ(喜々津か)の村で、二人の修道者が捕縛された。彼等は、普段修道者たち全部の宿主で、一六二一年火災りになったドミニコ・マツワの家に住み、長崎附近の村々で伝道していた。

#### 【第6章 1621年】(記事10)

二月十四日、サン・フランシスコ会の二人の宿主であった百姓ドミニコ・マツワは、オゴズ(喜々津)の部落で、死刑になった。とろびで火災りという宣告を受けた彼は、苦悶一時間の後、一撃の下に処刑された。(中略)四月二十五日、オルファネル神父、彼の伝道士、彼のミサを献てる折の従僕ドミニコは、長崎からから半リユウのところ、諫早に属する矢上の町外れの隠れ家で逮捕され、ぎりぎりに縛られた上、首に籠をはめられて長崎に送られた。

**【第9章 1624年】(記事11)**

肥前の大名鍋島信濃守(勝茂)は、最早その領内にキリシタンをおくに堪えず、誰人によらず棄教せよ、これに違背した者は、裸にして鼻と耳を殺ぎ、額に十字架の烙印を押し、妻子と共に諫早候に渡して奴隷にすると伝達させた。喜々津、イチ(伊木力か)及び大草等、百姓の村々に先ず手が入られた。最初の村(喜々津)の住民は素朴で信仰深い人々であったが、当時大草に匿われて言葉を学んでいたドミニコ会のエルキシア師の意見を聞くため、使者をやった。彼等は、司祭の意見で信仰を固くし、命を捨てる決心で役人の前に出かけて行った。(中略)役人達はその不退転の信仰の様を見て、この信者達を解放した。イチ(伊木力か)、大草でも、試練は同様で、信者の壮烈また同じであった。そこで領主は、調査の中止を命じた。(中略)諫早では、キリシタンの中、若干が役人のために追放された。その他の人も、依然四六時中、死に曝されていた。

c:レオン・バジェス『日本切支丹宗門史』(1940 訳:吉田小五郎『日本切支丹宗門史』(下)岩波書店)より抜粋(一部補足あり)

**【第14章 1629年】(記事12)**

原始会則のアウグスチノ会員のバルトロメオ・グチェレス神父は諫早領の喜々津村の近くで、この神父が長崎のキリシタンを精神的に助けていた豊後殿(松倉重政)の家老のために捕らわれた。

**【第15章 1630年】(記事13)**

伊木力のトマス・テライ・カヒョーエ(寺井加兵衛)が一六二九年十一月召し捕られたのであった。ある者は、主人と共に召し捕られ、又あるものは、山の中に散らばっていたが、捕らわれたのであった。

**【第15章 1630年】(記事14)**

ドミンゴス・ヨヒョーエ(興兵衛)、その妻マグダレナ・トマス・ニゾ、ルイス・キイロ共に伊木力で火炙りとなる。ベトロ、その妻マグダレナ、彼らの子、マリヤ十二歳、カタリナ八歳、ライモンド一歳、伊木力にて斬首せらる。

**<解題>**

江戸時代初頭の諫早におけるキリスト教の受容と排斥の様相は、レオン・バジェス『日本切支丹宗門史』(上)・(中)・(下)の記事によると、時代順に次のようにまとめられる。

まず『日本切支丹宗門史』(上)では、西郷氏や龍造寺氏および諫早氏による宣教師やキリシタンに対する好意的な処遇が1617年(慶長15)以降、徐々に厳しい弾圧へと変化しながらも、徹底されていない禁教政策がうかがえる。(記事1)では、諫早領主(西郷氏)は宣教師に対して好意ある態度を示したが、領内に宣教師たちを迎えることは望まなかったという。(記事2)では、諫早領主(諫早氏)によって布教の拠点となるであろう天主堂建造のための土地が寄進されていることが分かる。(記事3)では、1606年(慶長11)、1607年(慶長12)の出来事として、「諫早」、「深堀」、「古賀」、「浦上」、「内海」、「本土山」の6か所に伝道所があり、この伝道所で700人の授洗が行われ、9か所に天主堂が建てられたとする。(記事4)では、1609年(慶長14)、1610年(慶長15)の出来事として、長崎の伝道所には55人のイエズス会員がおり、「諫早」、「深堀」、「古賀」、「浦上」、「内海」、

「本土山」など、付属の伝道所が9つあると記載されている。また、諫早殿（諫早氏）はキリシタンに対し非常に好意を示し、キリシタンの兵士達を保護するのみならず、宣教師達の住宅を建てるために敷地を得るなどし、さらには宣教師達を訪問して敬意を表し、礼拝堂の中でひざまずいたという。（記事5）では、「諫早」、「深堀」、「浦上」、「内海」、「本土山」の伝道所には6人の司祭と3人の修士がおり、宣教師たちは難儀して立ち廻る必要があったとする。また、肥前の城下籠造寺に建てられた天主堂は、異教徒であっても好意を寄せていた諫早殿（諫早氏）の願いによって、同関の領主シノドノ（詳細不明）の承認を経て建立されたものであったという。（記事6）では、諫早には司祭・修士各々一人ずついて、また諫早候（諫早氏）は仏僧達の煽動を受けてキリシタン迫害の計画を立て、公方（将軍）と肥前の領主カシュー（鍋島勝茂）の名の下に調査した結果、多数のキリシタンは財産を没収、追放されたとする。（記事7）では、諫早の大名（諫早氏）が領内の5つの天主堂を破却させながらも建築材料を保存し、宣教師たちの住居はそのまましておくなどの柔軟な対応をとっている。また、キリスト教の棄教命令を出す一方で、形式的な命令にとどめ、信仰を黙認する態度を示している。

次に「日本切支丹宗門史」（中）では、肥前諫早領の各地でキリスト教の指導的な立場の神父や修道者に加えて、宿主のような協力的な立場の者に対しても、厳しい探索や処罰が行われた様子が確認できる。一方で、堅く信仰を守る信者に対しては為政者側が方針を転じており、17世紀前半、島原の乱が勃発する1637年（寛永14）以前においては、必ずしも徹底した禁教令ではなかったと考えられる。（記事8）では、大村で布教していたサン・フランシスコ会の神父が肥前諫早領、喜々津（キキズ）町で捕えられたこと、（記事9）では、長崎付近の村々で伝道していた二人の修道者がオゴズ（喜々津）で捕縛されたことが述べられている。（記事10）では、この二人の宿主であった百姓ドミニコ・マツヲについて、オゴズ（喜々津）で火災により死刑となったという。（記事11）では、肥前の大名鍋島勝茂が棄教令を発し、違反した際の厳しい刑罰を通達している。これに伴い、諫早領内では喜々津・伊木力・大草などの村々の信者が調査されたが、彼らの不退転の信仰の様子を見て、役人は信者を解放し、領主も調査の中止を命じたという。

「日本切支丹宗門史」（下）の（記事12）、（記事13）、（記事14）では、喜々津や伊木力において、神父のほかにも受洗名を持つキリシタンとその家族に対して執拗に山の中まで捜索し、厳罰に処す様子が述べられている。

d：フロイス「日本史」第24章（1979 訳：松田毅一・川崎桃太『日本史9西九州篇Ⅰ』）  
第83章（1979 訳：松田毅一・川崎桃太『日本史11西九州篇Ⅲ』中央公論社）より抜粋（一部補足あり）

#### 【第24章】

大村領と高来領の間に一人の殿がいて、その家名から伊佐早殿と称している。彼は妹をドン・バルトロメウに嫁がせており、有馬家とは婚姻と近親関係でも結ばれていたが、それにもかかわらずこの下（九州）のあらゆる殿のうち、デウスの教えのもっとも残忍で苛酷な敵であることを示していた。彼にとってはドン・バルトロメウがキリシタンで、彼の領内にデウスの教えが広まっていることは、きわめて気に入らぬことであった。

## 【第83章】

天正17年（1589）、有馬の教会では五百人以上が受洗した。彼らに混じって伊佐早（西郷信尚）の弟「家明」がキリシタンになった。彼は当地方の著名な貴人である。すなわち過ぐる年、有馬、大村両家を相手にした合戦において彼はつねに伊佐早を支えて来た人物であり、少なからず相手方を苦しめて来たからである。彼は立派なキリシタンとしての態度を示しており、(教名を)ドン・リアンと称し、妻女や家臣たちにもさっそく説教を聴聞させようと望んでいる。

## &lt; 解題 &gt;

フロイス「日本史」を編集した『日本史II 西九州篇III』第24章ではキリシタン宣教師の立場から西郷氏について、「伊佐早殿（西郷純堯）は大村家・有馬家ともに近親関係にもかかわらず、キリシタンに寛容な九州諸侯の内でも苛酷な敵である」とし、「ドン・バルトロメウ（大村純忠）がキリシタンで、彼（西郷純堯）の領内にデウスの教えが広がっていることは、きわめて気に入らぬことであった」との見方をしている。また、第83章では西郷氏の末裔が「立派なキリシタンとしての態度を示し」た上、ドン・リアンという教名を称し、模範的な教徒となっていることを紹介している。

## (2) 国内の支配層が遺した文書・記録類

a : 『寺社調査誌』（2007 諫早市郷土館）より抜粋（一部下線部などの補足あり）

## 【西明寺】

安勝寺末寺

一 田結村 西明寺 號飯盛山 法官飛擲

開基 了金

(中略)

第三世 正専

其比切支丹致流行候得共、田結戸石江ノ浦一人も被宗落ず、八丁分之内  
 柴田屋敷と申所有之深堀支配之由、此所尔甚三郎と申者、他所より来里邪宗門を  
 相勧候得共、一人も帰依不仕終尔顕然尔及長崎御奉行深堀役人立会之上、二ノ坪  
と申田中にて親子三人火炙被仰付候、村中二者一人も帰依乃者無之段明白ニ而  
 西明寺勸方宜しき由神妙之至也と御褒美尔預里見渡し所御免地尔被仰付候、其後  
 古賀へ立越猶亦切支丹致退治福隨寺を取立、次男正哲と申候を召置、夫より里矢上  
 へ立越称念寺を建立須、弟子了西を召置又日見尔至里切支丹退治し桜谷寺を草創  
 須、其身八田結村尔帰里桜谷寺祭一派之僧無之故浄土宗乃道心者を頼寺番させ  
 召置候依之右寺ハ今浄土宗登なる長崎奉行松倉豊後守殿より里日見古賀寺建立之  
 御免状尔今所持仕候、切支丹退治乃御褒美として、村中貫物等仕致相続候様被仰  
 付候得共、宗旨繁昌仕候得者不及其儀御断申上候、見渡し乃所御免地尔被仰付置  
 候得共其後遙過候而より寺地山五反有餘と御改只今尔頂戴仕候

## 【金泉寺】

高来郡諫早太良嶽山金泉寺書上

一、太良嶽山鎮守由来

當社者天竺摩阿陀王の神靈也、當國の松浦尔着給ふ、當峯の殊勝なるを見て居居し給ふ、又一の峯有圓顯嶽といふ、國王我國をかへり見さ勢給ひたる、是を俗體神といふ、經の嶽ハ御經を納玉ふ所也、是を法體神と云、此の三神を三社と云也、和銅年中行基菩薩此山尔来り玉ふ、其後代々座主無闕如往古ハ寄附願文等之古書多ク寶庫二有りとといへ共天正十一年耶蘇の邪徒大村理專等の乱入の頃悉く焼亡し、當時ハ諫早与寄附地有り座主代々金泉寺与相務御國家泰平之禱相動被在候

#### <解題>

この資料には江戸時代の諫早領内寺院（西明寺・金泉寺）のキリシタンとの関わりや対応についての記述が見られる。「西明寺」は「寺院帳」に、「金泉寺」は「諸寺院抱宮其外由緒書」にそれぞれ記述されている。

西明寺（諫早市飯盛町里）は宗派を浄土真宗本願寺派とする安勝寺の末寺である。資料中の「第三世正専」の項に、「切支丹流行」した際の様相を次のように記述している。「田結・戸石・江ノ浦ではキリスト教信者はおらず、また栄田屋敷と呼ばれる深堀の支配が及ぶところではキリスト教の布教活動が行われたが、帰依した者は一人もいなかった」という。一方、布教に関わったと思われる「親子三人」が「二ノ坪」という「田中」で「火炙」に処されたとも記述されており、佐賀藩諫早領内における厳しいキリシタン摘発や処刑の状況の一端を垣間見ることができる。「二ノ坪」は現在の諫早市飯盛町里の小字名であり、飯盛支所田結出張所のすぐ南付近に比定できる。

金泉寺（諫早市高来町善住寺）の由来の末尾には、1583年（天正11）に発生したキリシタンによる仏教寺院に対する焼き打ちの様相が記述されている。「邪徒」「大村理専」らが「乱入」し、「悉く」「焼亡」したという。「大村理専」とは大村純忠を指すことから、大村純忠によるキリスト教への領民の強制的な改宗とキリシタンによる領内や近隣神社への襲撃の様相を表した記述と見ることができる。

(4) b : 「龍造寺家文書」(1958『佐賀県史料集成古文書編第三巻』佐賀県立図書館)より抜粋（一部下線部などの補足あり）

(前略)

#### 西郷家関係【1584年（天正12）】

原純英外十三名連署

当国千栗八幡大菩薩 当所四面大菩薩 八幡大菩薩 天満大自在天神 愛宕大権現 軍神摩利支尊天

#### 有馬家関係【1579年（天正7）】

有馬鎮純

当国鎮守千栗八幡大菩薩 殊温泉四面五所大菩薩 天満大自在天神 春日大明神 愛宕大権現 軍神摩利支尊天

#### 松浦隆信・鎮信【1575年（天正3）】

殊者当国鎮守千栗八幡大菩薩 当島志自岐大菩薩 白山妙理大権現 氏神七郎大権現 摩利支天

**大村純忠【1576年（天正4）】**

天道之離伽羅佐 弓矢之運命竭終 並部類眷属 殊者於子々孫々  
(後略)

**<解題>**

龍造寺家文書の中にある「起請文」には、いくつかの大家や寺社勢力の信仰した神仏が列記されている。資料からは西郷、有馬、松浦の各家が日本における旧来の複数の神仏を信仰していることが分かる。一方で、大村純忠は1563年（永禄六）にキリスト教へ改宗したのち、1576年（天正四）当時の起請文である本資料には「天道之離伽羅佐 弓矢之運命竭終 並部類眷属 殊者於子々孫々」と表現されており、一神教であるキリスト教の特徴を表した記述と見ることができる。



## 第4章 調査の総括と課題

### 第1節 発掘調査等で得られた事実関係の整理

2020年度（令和2）から2023年度（令和5）まで諫早市が実施した保存目的の発掘調査等の詳細について第2章及び第3章で報告したが、本節ではその成果を整理し、調査により得られた事実関係を要約する。

今回の調査対象は潜伏キリシタンに関する遺跡4箇所、潜伏キリシタンの弾圧が行われた江戸時代初頭の8箇所の墓所を特定するための踏査対象は11箇所、花十字紋瓦や伝西川内マリア観音像等のキリシタン関連遺物等は5件である。

「ジブの墓」は潜伏キリシタンの伝承を持つ自然石立碑の江戸時代の塚で、保存目的の発掘調査を行ったところ、墓碑の地下に墓坑があることが確認できた。さらに、多久市が所蔵する江戸時代初頭の佐賀藩のキリシタン弾圧の文献に記載された有喜村の宿主治部左衛門等に関する処罰記録にある人名と伝承名が一致し、考古学と文献学の両分野において、潜伏キリシタンに関する伝承が伝えられ現地に遺跡として遺されていることが確認できた。

「ピッチの墓」は潜伏キリシタンの伝承を持つ自然石立碑の江戸時代の塚であり、保存目的の発掘調査により墓碑の地下に墓坑があることが確認できた。

「山川内遺跡」は中世期の石塔が散布する遺物包蔵地で、地形測量及び石塔分布と数量把握を行い、紀年銘の確認はできなかったが「道佛禅門」の銘がある宝篋印塔の基礎、伝承で「ブッセキ」「ブッセキチ」と呼ばれることが確認できた。そして、山川内遺跡に散布する石塔群は伊木力川流域を代表する室町時代から江戸時代初頭の墓所であることが判明した。これらの成果から、山川内遺跡は『長墓改覚』記載の「佛石墓所」に該当する可能性が極めて高いことが指摘できた。

「千々石ミゲル墓所推定地」は、1633年（寛永9）の紀年銘を持つ自然石の墓碑と地下に墓坑を有する江戸時代前半の墓地であり、その範囲や内容についての調査を行った。その結果、墓碑の北側に新たに二つの墓坑（3号墓・4号墓）を確認し、第4次調査で確認された整地層に類似する土層の分布範囲を確認した。また、3号墓と4号墓の礫直上に供えられた出土品（土師器小皿）の時代性は、4号墓坑覆土に含まれる陶磁器片の年代から18世紀前半以降の時期を示すことが判明した。これら遺構と遺物の様相から、石碑と1号墓と2号墓に埋葬された人物とは強い関連性を持っており、3号墓と4号墓は100年余りの時間差を有することが確認できた。また、3号墓脇には明治期に墓じまいを行った痕跡が確認され、墓所としての利用は長期間であるが、埋葬された人数は極めて少数であることが判明した。

「伊木力墓所群」の11箇所は踏査による現地観察と採集品の時代性から江戸時代から現在まで連綿と利用されている墓所であることが確認できた。また、墓所名と字名の分布、現地に残された自然石墓碑の状況、採集品の時代性を総合的に判断し、11箇所のうち3箇所（梅木地・田所・穂木宇都）が江戸時代初頭の記録である『長墓改覚』に記載された伊木力・佐瀬地域の墓所である「志げ尾」「くほ」「なりやうづ」に該当し、山川内遺跡・千々石ミゲル墓所推定地は「佛石」に該当すると判断できた。また、「なりやうづ」は、

現在利用されている墓所に隣接する場所に江戸時代から利用されていた墓所が良好な状態で残存していることが確認できた。

「伝西川内マリア観音像」は、多良見町西川内に伝わる中国製磁器で、長崎奉行所に保管されていたと伝わる類例との比較、黒い付着物質は煤である可能性が高いことから、潜伏キリシタンに関連する伝世品となる可能性があることを指摘できた。

「花十字紋瓦」は諫早市の中心、本明川河口近くにある西郷氏の居城である高城跡で2点採集されており、キリシタン関連の遺物を出土する中世山城としての位置づけができ、さらに鯉瓦や軒丸及び軒平瓦などの存在から瓦屋根を持った大型の木造建造物や塀がある山城であったことが確認できた。

「西小路町墓碑」は神社形式の石祠の扉を加工し再利用した墓碑であり、十字架のように見える模様は、扉の縦格子の一部分であることを確認できた。

「山川内遺跡隣接墓碑」は、右が女性、左が男性という戒名の配置が「千々石ミゲルの墓と思われる石碑」と共通することが確認できた。

伝「円通寺跡」石塔群については、紀年銘を含む石塔群の実測作業を行い、具体的な時代性と図面等の基礎的情報を明らかにした。そのことから山川内遺跡に散布する石塔類の時代性を類推することができた。

## 第2節 肥前国彼杵郡・高来郡での歴史の評価

第1章で紹介したが、鎌倉時代から江戸時代にかけて、伊木力地域を含む多良見地域とそれ以東の諫早市域は彼杵郡と高来郡、大村藩と佐賀藩及び天領という複数の領域にまたがる交通の要衝であることが歴史文化の特徴の一つである。今回のキリシタン関連遺跡等の分布もその特徴を反映しており、それぞれの地域における遺跡の様相は異なることが判明した。

「ジブの墓」「伊木力墓所群」は、1613年（慶長18）年の禁教令以降の諫早地域の佐賀藩と大村藩とでそれぞれ実施された政策を具体的に知ることができる遺跡である。「ジブの墓」は佐賀藩における様相、「伊木力墓所群」は大村藩における調査成果である。また、それらは、考古学的な分析の他に、それぞれの地域の古文書との比較検討により得られたことも特筆すべきである。

「高城跡」「伝円通寺の石塔群」の調査成果は、禁教令以前の彼杵郡の一部と、高来郡の室町時代から戦国時代までの戦闘と信仰の様相を、具体的に伝える考古資料である。

また、これまでキリシタン関連遺跡等の存在について、周辺の歴史文化の様相と比較し、諫早地域にはその分布は希薄ではないかという消極的な評価があった。しかし、今回の調査において大村藩域のみならず、諫早領域の高城跡の花十字紋瓦、橘湾沿岸の潜伏キリシタン伝承地を確認できたことは大きな発見であった。

伊木力・佐瀬地域の3箇所の墓所は、『長墓改覚』に記載された墓所と一致する可能性が指摘でき、その弾圧を逃れるようにして存在する自然石を伏石の上や伏石の奥に石碑を建てる形式の墓制の存在を記録した。同様な事例は、『長墓改覚』の記録で最も多い数の墓数を記録する長与地域にも見られ、大村湾沿岸の潜伏キリシタンの墓制に共通する特徴であることが伊木力地域でも確認された。

「ジブの墓」は、有喜の早見地域に伝わる潜伏キリシタンの伝承を持つ墓で、そのすぐ南にあった「メットイ坂」という地名は、「召し取り」というキリシタン宗徒と関連する人物達の捕縛を連想させる伝承名である。さらに、それらの伝承内容や地名については、佐賀県多久市所蔵の鍋島勝茂の書状を収めた江戸時代初頭の古文書の記載内容と強く関連するものであることが明らかになった。禁教令後に佐賀藩が実施したキリシタンの取締り政策の具体的事例について、考古学・民俗学・歴史学の三方からアプローチした成果である。

千々石ミゲル墓所推定地では、千々石玄蕃の建立した墓碑（千々石ミゲルの墓と思われる石碑）とその下にある二つの墓坑、そしてそれらの北側に新たに二つの墓坑を確認した。また、石塔が建立された当初の造成範囲や段造成の様相、そして明治期に行われた墓じまいの痕跡を確認した。千々石玄蕃の父親は千々石直員の息子で、千々石ミゲルとして天正遣欧使節の一人に選定され渡欧し、帰国後に千々石清左衛門と改名した人物であることが明らかにされている。千々石ミゲル墓所推定地は、日本の歴史上に登場する人物の終焉の地となる可能性が非常に高い江戸時代の墓地遺跡であり、これまで実施された第1次から第4次までの調査成果を今回の調査（第5次）において、追認できたことは諫早の歴史文化にとって大変意義深い発見である。

また、「長墓改竄」のような弾圧が行われたにもかかわらず、千々石ミゲル墓所推定地はその時には掘り返されずに現在まで良好に地下構造が遺っていることは特筆すべき成果である。「墓改」による掘り返しの対象とならなかった点と石碑銘文から、埋葬された人物は仏教徒として葬られたことが確実である。100年以上時間が経過した後に埋葬された3号墓と4号墓の被葬者は、上面で検出された土師器小皿、墓坑の平面形態と規模からいわゆる座棺（棺桶）による埋葬が想定され、それらは仏教的埋葬が行われたという考古学的特徴を持っている。それに対し、1号墓及び2号墓の上面には土師器小皿などが供献された痕跡が無い点、棺が縦長で側臥屈肢という共通した埋葬が行われている点、1号墓の女性人骨にはキリシタン関連の信仰具が副葬される点、その3点が1号墓と2号墓の考古学的特徴である。このため1号墓と2号墓に埋葬された人物は3号墓と4号墓の埋葬方法とは明らかに異なるため、仏教的な埋葬が行われたという考古学的特徴を持たない。特に1号墓の女性はキリシタンとしての信仰を維持したままの埋葬である可能性は非常に高い。2号墓の男性は副葬品が確認できないがキリシタンとしての信仰を維持したまま埋葬された可能性は否定できないが、埋葬された個人の信仰を確定するには同時期の良好な埋葬事例による比較検討が必要である。

高城跡における花十字紋の軒丸瓦2点目の採集事例は、存在した建物の屋根に軒丸瓦として葺かれていたことが想定され、西郷氏から龍造寺氏へ勢力が交代する時期であり、当地域の戦国時代を語る上では欠かせない歴史的な発見となった。同時に採集された陶磁器類や瓦の存在は、これまで不明確であった高城跡の時代性や建物の存在を明らかにすることができ、諫早を代表する戦国時代の山城の重要な考古資料の発見となった。今回の高城跡の調査成果を概観すると、諫早西郷氏はキリシタンを嫌っていたという外国宣教師の評価にもかかわらず、高城に花十字紋瓦を葺く建物が想定できる様子を見ると、キリシタン

大名の有馬氏と親戚関係であることから、容認していた部分もあつたのではないかと、戦国時代における、諫早の領主像を改める必要を指摘できる発見であった。

### 第3節 今回の調査における課題

#### 1 基本方針からみた今回の調査の課題

キリシタン関連遺跡等調査指導委員会で決定した調査の基本方針①～④と照らし合わせて、今回の調査における課題を整理する。

基本方針①：諫早市内全域を調査対象とする。

有明海沿岸における様相がはっきり把握できなかった点は課題である。また、橘湾沿岸においては、第3章第7節で紹介したが古文書では飯盛町田結におけるキリシタン信徒火あぶりの記事があるが、その痕跡や伝承等を調査していない。

基本方針②：遺跡及び出土品、伝承地及び伝世品を対象とする。

基本方針③：時代性は、主に江戸時代とする。

既知の遺跡、伝承地等については当初の計画に従い調査し、本章の第1節及び第2節のように成果があつた。特にジブの墓においては同時代の文字資料との比較によって、キリシタン伝承を遺跡と文字資料の両面から証明できたことは大変大きな成果であった。

また、天正遣欧使節団の一人である千々石ミゲルの墓地の推定地に関する調査で、墓地の平面的な範囲の確認と墓地の使用の様相を復元できたことは大きな成果であった。

基本方針④：考古学、民俗学、歴史地理学は現地調査、歴史学は関連文書の収集と一覧表作成

民俗学的な調査が不十分であったことが課題である。また、歴史学の関連文書については、収集が不十分で一覧表作成まで至らなかったことが課題である。そして、古文書に掲載された佐賀藩による禁教政策の具体的な記録の調査が必要で、佐賀藩の様相の中でも諫早領内における調査が今後の課題である。

#### 2 個別の調査における課題

多良見地域の西川内に伝わる伝マリア観音像については、類例について現物確認などの調査を行っていない。今後、類例について同じ方法で付着する媒がどのような物質であるのかを確認することは、具体的な信仰の様相を明らかにする一つの手段となろう。

キリシタン関連遺跡については、その保存について課題がある。ジブの墓は現在、周辺が圃場整備によりかつて島原街道沿いにあったというロケーションが大きく改変されている。伝承と文献とが一致する学術的に非常に良好な事例として、調査結果の周知と今後の保存のためにも説明板や案内板などの整備をおこない、潜伏キリシタン遺跡として保存し、広く活用していくことが肝要である。また、ジブの墓はキリシタンの拷問や処刑が行われた雲仙岳が橘湾を挟んで目の前に遠望でき、世界遺産の存在する天草も望むことができる。このため、ジブの墓については周辺の市と連携した史跡の周知・活用についても検討が可能であろう。

ピッチの墓は周辺の墓碑の銘文調査を行っていないため、時代性が不明な部分が多い。墓地の改修などにより江戸時代から存在する墓石や自然石立碑に対しての改変が行われる前に写真や測量による記録保存を行うことが必要である。

伊木力・佐瀬地域の墓所（伊木力墓所群）は、現在も墓地として利用されていることもあり、遺跡として遺すということは非常にハードルが高い。2014年（平成26）報告と今回成果を比べると10年の年月により、かつての様相が失われた墓所は数多い。このため、写真撮影や3D測量などによって現状を記録することが最善の策で、この記録調査には民俗学的方法と分析が必要である。

そのような中でも山川内遺跡と千々石ミゲル墓所推定地は現在、墓所として利用されておらず、周辺一帯を潜伏キリシタンとその時代の歴史を伝える遺跡として保存・周知することが検討できる。幸い地元には毎年、墓碑に刻まれた千々石清左衛門（千々石ミゲル）の命日に慰霊祭を行う有志の市民団体も健在で、遺跡の保存と活用による地域活性化が期待できる。遣欧使節団の一員であったコンスタンティノ・ドラードと共に諫早特有の歴史として未来を担う若い世代に周知していくことも必要である。

同じく、墓所でもすでに利用されていない忘れられた江戸時代の墓所があり、「徳木宇都墓所」は「長墓改覚」記載の「なりやうづ」であることが確認できた。「徳木宇都墓所」は潜伏キリシタンの存在とその弾圧の歴史を伝える遺跡として保存していくことが検討できる。この墓所については、自然石が墓碑として整然と遺っており、複数個所に墓坑痕跡があり、地上における観察だけでも、地下遺構は良好に残存するものと想定でき、地形測量や保存目的の発掘調査を行うなどして残存状況を把握することができる良好な遺跡である。

高城跡は採集品により瓦葺の建物が存在したこと想定され、発掘調査を行い建物の痕跡を確認し、より具体的に戦国時代の諫早の中心にある山城の様相を明らかにできる見込みが確認できた。さらに軒丸瓦の紋様には花十字紋を採用したものが2点採集された。また、西郷氏と龍造寺氏の戦いの記録である「西郷記」にあるように高城は樹木が伐採され堀や土塁が築かれた山城であったという文献の記録も存在する。明治期には公園化され地形に変更があったが、国指定天然記念物である「諫早市城山暖地性樹叢」に1951年（昭和26）に指定され、幸いにそれ以降、大きな地形の改変は加えられていない。また、市所有であるため開発による現状変更は少なく、今後も遺跡として良好に保存される見込みが十分ある。しかし、具体的な発掘調査は行われていないため、山城としての歴史的な存在意義について不明点が多い。特に山城の特徴を示す土塁や堀は、頂上から裾まで大きなものから小さなものまで残存する。それらの地上で確認できる遺構を現状で地形測量するなどして把握することだけでも、この地域の歴史を大きく物語る成果が得られるものと思われる。採集品は13世紀代の鎌倉時代後半から江戸時代までさまざまなものがあり、良好な遺構・遺物の残存する可能性が高く、3点目の花十字紋瓦の出土も想定できる。

今後、高城跡の普遍的な価値を探るために発掘調査を含めた総合的な学術調査を行う必要がある。さらに、諫早市域に50箇所存在する山城跡の悉皆調査を行い、高城跡の相対的な位置づけを行う必要がある。

#### 第4節 諫早市キリシタン関連遺跡等調査の総括

最後に、調査の総括を行い、調査報告書を締めくくる。1549年（天文18）にキリスト教が鹿児島に伝来し、その後、日本に浸透し、大村、大友、有馬の3氏のようないわゆるキ

リシタン大名と呼ばれる支配者層が出現する。その後、豊臣秀吉が1587年（天正15）に伴天連追放令を出し、1591年（慶長元）には宣教師と信者の26名が長崎で処刑される。その跡地は、日本二十六聖人殉教地という名称で長崎県史跡として1956年（昭和31）に指定されている。その後、徳川家康が1612年（慶長17）に長崎を直轄領とし、翌年1613年（慶長18）に全国に禁教令を布告した。1637年（寛永14）～1638年（寛永15）に島原の乱が起き、その後、絵踏・禁書・宗門改め・寺請制度による弾圧が行われた。天正遣欧使節は1582年（天正10）に派遣され、1590年（天正18）に帰国した。

今回の調査では、ジブの墓、伊木力墓所群の内2箇所（志げ尾墓所：梅木地墓地、なりやうづ墓所：穂木宇都墓地）、山川内遺跡（佛石墓所）、千々石ミゲル墓所推定地が禁教期に関する遺跡であると確定できた。いずれも1613年（慶長18）の禁教令以降の遺跡であるが、ジブの墓は佐賀藩（諫早領）による禁教政策、伊木力・佐瀬墓所及び山川内遺跡は大村藩による禁教政策の痕跡であり、九州北西部における江戸時代の禁教関連の墓地遺跡である。

千々石ミゲル墓所推定地は、キリスト教の布教時に天正遣欧使節の一人として生き、禁教令後にはその弾圧の様子を見てきた歴史上の人物の終焉の地で、江戸時代を通じて現在まで関係者により顕彰・保存されてきた墓地遺跡である。

これらの遺跡は、地域の歴史を語る上で欠くことができないものであり、適切な保護を図り、地域の歴史を学ぶ際に学校や生涯学習の場で活用され、未来を担う若い世代に継承されるべき諫早の歴史文化の資産である。

- 本報告をまとめるにあたり参考にした文献の一覧（単行本及び発掘調査報告書等）
- 1882年 長崎県庶務課『肥前國西彼杵郡各村字調』
- 1938年 レオン・バジェス『日本切支丹宗門史（上）』訳：吉田小五郎 岩波書店
- 1938年 レオン・バジェス『日本切支丹宗門史（中）』訳：吉田小五郎 岩波書店
- 1940年 レオン・バジェス『日本切支丹宗門史（下）』訳：吉田小五郎 岩波書店
- 1950年 海老沢有道『長崎版 どちりなきりしたん』岩波書店
- 1958年 佐賀県史編纂委員会『龍造寺家文書』『佐賀県史料集成古文書編第三巻』佐賀県立図書館
- 1967年 宮崎五十騎・小林盛次「資料紹介 大村彦右衛門文書キリシタン関連その一」大村史談第3号 大村史談会
- 1967年 片岡弥吉『かくれキリシタン—歴史と民族—』日本放送出版協会
- 1970年 片岡弥吉『長崎の殉教者』（株）角川書店
- 1971年 『多良見町郷土誌』多良見町
- 1972年 高田茂『聖母マリア観音 御姿と伝承』立教出版会
- 1977年 宮崎康平『島原半島の切支丹』『墓碑証言文書遺跡一覧並関係年表』島原歴史懇話会
- 1978年 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』国書刊行会
- 1979年 フロイス『日本史9 西九州篇Ⅰ』訳：松田毅一・川崎桃太 中央公論社
- 1979年 フロイス『日本史11 西九州篇Ⅲ』訳：松田毅一・川崎桃太 中央公論社
- 1980年 村井正明『伊佐早とキリシタン—有喜・矢上の五人組迫害等—』諫早史談第12号 諫早史談会
- 1980年 『長崎県歴史資料調査キリシタン関係資料』長崎県文化財調査報告書第48集 長崎県教育委員会
- 1980年 『日本城郭大系 第17巻 長崎・佐賀』（株）新人物往来社
- 1983年 『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集 諫早市教育委員会
- 1985年 愛宕社調査委員会『愛宕社の調査報告』諫早史談第17号 諫早史談会
- 1988年 『平戸市内キリシタン遺跡詳細分布調査報告書』平戸市の文化財24 平戸市教育委員会
- 1991年 越中哲也『長崎純心大学博物館研究第七号 長崎文化考』（株）東京堂出版
- 1991年 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集 長崎県教育委員会
- 1992年 村井正明『コンスタンチノ・ドラード等は諫早の生まれ』諫早史談第24号 諫早史談会
- 1995年 『多良見町郷土誌』多良見町教育委員会
- 1995年 『川内紅毛キリシタン関連遺跡 湯牟田遺跡Ⅰ』平戸市の文化財39 平戸市教育委員会
- 1997年 『旧古賀村の史跡』長崎県立西陵高等学校東長崎分校郷土歴史研究会
- 1998年 『沖城跡』長崎県文化財調査報告書第143集 長崎県教育委員会
- 1998年 『富の原遺跡・大村館墓地・下荒瀬山下墓』長崎県大村市教育委員会
- 1998年 『日野江城跡』北有馬町文化財調査報告書第2集 北有馬町教育委員会
- 1999年 越中哲也『長崎純心大学博物館研究第7輯 長崎文化考』長崎純心大学博物館

- 2000年 『沖城跡』 諫早市文化財調査報告書第14集 諫早市教育委員会
- 2001年 木高孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』（財）九州大学出版会
- 2002年 久田松和則『キリシタン伝来地の神社と信仰』（株）つじ印刷
- 2002年 村井早苗『キリシタン禁制と民衆の宗教』日本史リブレット37 山川出版社
- 2002年 『森岳城跡 県立高原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』長崎県文化財調査報告書第166集 長崎県教育委員会
- 2003年 末木文美士『中世の神と仏 日本史リブレット32』山川出版社
- 2004年 青山敦夫『もう一人の少年使節ドラード』昭和堂出版事業部
- 2005年 大石一久『天正遣欧使節 千々石ミゲルの墓石発見』長崎文献社の歴史叢書 長崎文献社
- 2005年 佐賀県立図書館『佐賀県近世史料 第8編第1巻』佐賀県立図書館
- 2005年 『有馬のセミナリヨ』関係資料集』北有馬町役場
- 2007年 『佐賀本藩収蔵諫早私領 寺社調査誌』諫早歴史資料叢書（一）諫早市郷土館
- 2007年 『開遺跡Ⅱ 主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎県文化財報告書第193集 長崎県教育委員会
- 2008年 田中裕介『イエズス会豊後府内教会と附属墓地』鹿毛敏夫編『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院
- 2008年 下川達彌（活水女子大学教授）『キリシタン墓碑の研究に向けて キリシタン墓碑の研究余滴（1）』長崎学研究第11号 長崎純心大学博物館内長崎学研究所
- 2009年 田中裕介『豊後府内のキリスト教会墓地』『キリシタン大名の考古学』別府大学文化財研究所企画シリーズ②〈ヒトとモノと環境が語る〉別府大学文化財研究所、九州考古学会・大分県考古学会 思文閣出版
- 2009年 下川達彌『キリシタン遺跡・遺物の検討（覚書）』長崎学研究第12号 長崎純心大学博物館内長崎学研究所
- 2010年 藤野保『佐賀藩』吉川弘文館
- 2010年 『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ 地名表・分布地図編』長崎県文化財調査報告書第206集 長崎県教育委員会
- 2010年 田中裕介『九州南部のキリシタン考古学』『特集日本のキリシタン考古学』考古学ジャーナル600ニューサイエンス社
- 2010年 宮下雅史『長崎地方のキリシタン瓦』『特集日本のキリシタン考古学』考古学ジャーナル600ニューサイエンス社
- 2010年 下川達彌『おろくさんの墓とおろくにん様について キリシタン墓碑巡り』長崎学研究第13号長崎純心大学博物館内長崎学研究所
- 2011年 『諫早家御屋敷跡 長崎県立諫早高等学校附属中学校校舎建設工事に伴う発掘調査報告書』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書2 長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
- 2011年 『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ 詳説編』長崎県文化財調査報告書第207集 長崎県教育委員会
- 2012年 片岡瑠美子（研究代表者）『キリシタン墓碑の調査 ―その源流と型式分類のための再調査― 平成20年度～平成23年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号20320125）』長崎純心大学片岡研究室



- 2012年 『横瀬浦開港450周年記念事業企画展—キリスト教の伝来と西海の歴史—』 横瀬浦開港450周年記念事業実行委員会、西海市、西海市教育委員会
- 2012年 田中裕介「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会
- 2013年 『くらわんか藤田コレクション—寄贈記念図録—』波佐見町教育委員会
- 2014年 相川和葉・加藤久雄・野村俊之・白濱聖子『「長墓改」以降の潜伏キリシタン墓の基礎研究（旧浦上木場村・向地を中心に）』長崎ウエスレヤン大学現代社会学部研究紀要12巻1号 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部
- 2014年 田中裕介「日本のキリシタン墓地遺跡」『シンポジウム 発掘！検証！キリシタン墓—高山右近とキリシタン—』公益財団法人大阪府文化財センター
- 2014年 田中裕介「日本のキリシタン墓研究の現状」白杵史談104号 白杵史談会
- 2016年 安高啓明『浦上四番崩れ 長崎・天草禁教史の新解釈』（株）長崎文献社
- 2016年 『東京都文京区 切支丹屋敷跡—文京区小日向1丁目東遺跡・集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』[遺構・遺物・自然科学分析（1）・考察編]三菱地所レジデンス株式会社・テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部
- 2016年 『東京都文京区 切支丹屋敷跡—文京区小日向1丁目東遺跡・集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』[保存処理・自然科学分析（2）編] 文京区教育委員会
- 2017年 田中裕介（研究代表者）『日本近世における外来系墓碑の変容過程に関する実証的研究 平成26（2014）年度科学研究費助成事業基盤研究C（課題番号26370908）研究成果報告書』別府大学文学部
- 2018年 久原卷二『長与の地名 340の小字』ゆり書房
- 2018年 安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』吉川弘文館
- 2018年 『「千々石ミゲル夫妻伊木力墓所」パンフレット』千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会
- 2018年 『特別展キリシタン—日本とキリスト教の469年—』長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産 世界文化遺産登録記念 國學院大學博物館・西南学院大学博物館
- 2018年 『小値賀諸島の文化的景観—野崎島キリスト教関連資料保存調査報告書—』小値賀町文化財調査報告書第24集 長崎県小値賀町教育委員会
- 2018年 坪根伸也『中・近世移行期の施錠具と真鍮生産にみる外来技術導入をめぐる諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第210集
- 2018年 宮下雅史『花十字紋瓦の二次加工と転用について』長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第8号
- 2019年 田中裕介「日本におけるキリシタン墓地の類型とイエズス会の適応政策」『論集葬送・墓・石塔』狭川真一さん還暦記念会
- 2019年 『令和元年度企画展 大友氏の栄華Ⅲ 宗麟とキリスト教—地中に眠るキリシタンの時代—』大分県埋蔵文化財センター
- 2019年 『千々石ミゲル夫妻伊木力墓所発掘調査（第1次—第3次）報告書 報告編』千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会
- 2019年 『千々石ミゲル夫妻伊木力墓所発掘調査（第1次—第3次）報告書 分析・考察編』千々石ミゲル墓所発掘調査委員会

- 2019年 伊藤敬太郎「キリシタン瓦の基礎的考察」アジア地域研究 第2号 岡山理科大学経営学部経営学科
- 2020年 狭川真一『中世墓の終焉と石造物』高志書院
- 2020年 原田昭一『九州板碑の考古学』高志書院
- 2020年 松本啓子『世界を旅したマジョリカ陶器 鎖国期のアルパレロと天正遣欧少年使節』清文堂出版
- 2020年 田中裕介（研究代表者）『鎖国期から幕末明治にいたる外国人墓の基礎的研究 平成29（2017）～令和元（2019）年度科学研究費助成事業 基盤研究C（課題番号17K03225）研究成果報告書』別府大学文学部
- 2021年 高澤等『家紋大辞典』（株）東京堂出版
- 2021年 野澤哲朗「伊佐早四面大菩薩について」諫早史談第53号 諫早史談会
- 2021年 本馬貞夫「世界遺産 キリシタンの里—長崎・天草の信仰史をたずねる—」一般財団法人九州大学出版会
- 2021年 『小城鍋島家 肥陽舊章録 第一集』多久古文書の村史料叢書第一冊 多久古文書の村
- 2021年 『九州山岳霊場遺宝—海を望む北西部の山々から—』九州歴史資料館
- 2022年 片岡弥吉「長崎と熊本殉教者 片岡弥吉全集4」智書房
- 2022年 野上建紀・賈文夢（長崎大学）「長崎県波佐見町の「痲瘡墓」の分布について」金沢大学考古学紀要第43号
- 2022年 「感染症と考古学—長崎・天草地方の痲瘡墓をめぐる—発表要旨集」2021年度多文化社会学部研究シーズ育成事業「近世〈痲瘡墓〉に関する基礎的研究」報告会 長崎大学多文化社会学部 野上研究室（共催）長崎県考古学会
- 2022年 「『千々石ミゲル夫妻伊木力墓所』パンフレット」千々石ミゲル墓所調査プロジェクト
- 2022年 伊藤敬太郎「キリシタン瓦の基礎的考察その2—長崎西役所跡（岬の教会）出土の十字架文軒平瓦について—」半田山地理考古第10号 岡山理科大学 地理考古学研究会
- 2022年 「多久家文書の「読みなおし」」東京大学史料編纂所 多久家文書研究会
- 2023年 田中裕介「キリシタン墓研究の歩み」『季刊考古学164 特集キリシタン墓研究と考古学』（株）雄山閣
- 2023年 大石一久「キリシタン墓碑の布教期から潜伏期への移行」『季刊考古学164 特集キリシタン墓研究と考古学』（株）雄山閣
- 2023年 大石一久・田中裕介「千々石ミゲル夫妻墓所」『季刊考古学164 特集キリシタン墓研究と考古学』（株）雄山閣
- 2023年 大石一久「肥前の潜伏キリシタン墓地—近世を通して築かれた佐賀藩深堀領飛び地の長墓群—」『季刊考古学164 特集キリシタン墓研究と考古学』（株）雄山閣
- 2023年 田中裕介「キリシタン墓碑研究の現状」『季刊考古学164 特集キリシタン墓研究と考古学』（株）雄山閣
- 2023年 野澤哲朗「諫早市愛宕山三重塔出土の土師器」長崎県考古学会会報第31号 長崎県考古学会



# 報告書抄録

ふりがな	いさはやしきりしたんかんれんいせきとうちょうさほうこくしょ							
書名	諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書							
副書名								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	野澤哲朗 福井造香 大島大輔 江口高裕 片多雅樹							
編集機関	諫早市 経済交流部 文化振興課							
所在地	長崎県諫早市東小路町7番1号							
発行年月日	令和6年3月31日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ジブの墓	諫早市早見町	42304	-	32°47'33"	137°3'33"	R3.9.8~R3.10.29	13㎡	保存目的
ビッチの墓	諫早市天神町	42304	-	32°48'5"	137°3'33"	R4.8.16~R4.12.24	2.4㎡	保存目的
山川内遺跡	諫早市多良見町	42304	83-10	32°50'45"	137°55'25"	R3.11.19~R4.3.31	24.8㎡ 28㎡	保存目的
千々石ミゲル墓所推定地	諫早市多良見町	42304	83-79	32°50'47"	137°55'27"	R4.6.13~R4.12.24	19.8㎡ 17㎡	保存目的
伊木力嘉所群 <small>(熊本字本所ほか)</small>	諫早市多良見町	42304	-	32°51'33"	137°54'58"	R2.2.12~R2.3.28	-	保存目的
伝「円通寺跡」の石塔群	諫早市多良見町	42304	-	32°49'37"	137°56'22"	R2.11.24~R3.1.29	-	保存目的
高城跡	諫早市高城町	42304	84-39	32°51'47"	137°2'48"	-	-	保存目的
西小路町墓碑	諫早市西小路町	42304	-	32°51'35"	137°2'51"	R2.10.27~R2.12.24	-	石塔図化
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ジブの墓	その他の墓(塚)	江戸時代	自然石立碑・墓坑	陶磁器	伝承人名と文書資料と一致			
ビッチの墓	その他の墓(塚)	江戸時代	自然石立碑・墓坑	陶磁器	-			
山川内遺跡	遺物包蔵地	中世・近世	石塔群・墓「道徳神門」	陶磁器・石塔	『長墓改竄』記載の佛石墓所に比定			
千々石ミゲル墓所推定地	遺物包蔵地	江戸時代	自然石立碑・墓坑	土師器・陶磁器	墓地の範囲を確認			
伊木力嘉所群	遺物包蔵地	中世・近世	自然石立碑等	陶磁器	『長墓改竄』記載の墓所と比較			
伝「円通寺跡」の石塔群	石塔	中世	石塔群	宝篋印塔	紀年銘有り			
高城跡	山城	中世・近世	土橋・堀・土塁	花十字紋瓦	西郷氏の居城			
西小路町墓碑	石塔	近世	石刻扉を加工した石塔	-	石刻扉加工品			
要約	ジブの墓：無銘の自然石立碑一基、地下構造は土坑墓、潜伏キリシタン伝承の人名と文献記載の人名とが一致。							
	ビッチの墓：潜伏キリシタン伝承を持つ無銘の自然石立碑が墓地の中心に所在。地下構造は土坑墓である。							
	山川内遺跡：石塔が分布する中世から近世の墓地。伝承名称が「フッセキ」「フッセキチ」であり、五輪塔類が多数散布し、銘「道徳神門」が有る。『長墓改竄』の記載「佛石墓所」に比定。							
	千々石ミゲル墓所推定地：平成29年に民間組織が実施した発掘調査区の北側において、令和3年調査時に確認された整地層の延長範囲を確認し、それを掘込む墓坑2基を確認。それより北側に墓域が広がらないことに加えて、明治期に墓じまいが行われた痕跡を確認。							
	伊木力嘉所群：3箇所を『長墓改竄』記載の「志げ尾」「くぼ」「佛石」「なりやうづ」に比定。							
	伝「円通寺跡」の石塔群：1,300年代後半から1,400年代の石塔の実測と年代 伝西川内マリア観音像：多良見町に伝わる磁器製観音像で表面に付着する黒い物質が煤と判明し、信仰の形跡と確認。 高城跡：特徴的な花十字紋瓦を利用しており、これまでキリシタンを嫌っていたという西郷氏の歴史像に變更を迫られる発見である。長崎市内のみでの分布が確認されていた花十字紋瓦の分布を見直す発見 西小路町墓碑：神社形式の石刻扉を加工し、背面に十字が浮き彫りになるように加工された和銘をもつ墓碑。							

諫早市文化財調査報告書 第28集

## 諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書

令和6年3月31日発行

発行・編集 諫早市

〒854-8601

諫早市東小路町7番1号

印刷 株式会社 昭和堂

〒854-0036

諫早市長野町1007-2

2024.3  
ISAHAYA



「道佛禅門」銘 宝篋印塔基礎 山川内遺跡（多良見町）